時代小説を読む

日本妖忍列伝

縄田一男編

小松 重男
宮崎 惇
神坂 次郎
新宮 正春
早乙女 貢
南條 範夫
小松 左京

「時代小説を読む」
縄田一男編

●●●好評既刊●●●

日本豪剣列伝
南條範夫　中山義秀
早乙女貢　白井喬二
五味康祐　柴田錬三郎
戸部新十郎

日本剣鬼列伝
杉本苑子　仁田義男
峰隆一郎　船山　馨
山手樹一郎　柴田錬三郎
津本　陽

日本忍者列伝
山田風太郎　南原幹雄
戸部新十郎　柴田錬三郎
大坪砂男　五味康祐
村上元三　野村胡堂

カバーイラスト：村山潤一
カバーデザイン：甲田勝彦＋砂川雅史
カバー印刷：図書印刷(株)

時代小説を読む
縄田一男編

日本妖忍列伝

小松重男
宮崎惇
神坂次郎
新宮正春
早乙女貢
南條範夫
小松左京

1154
さ2-1
P530

日本妖忍列伝
早乙女貢他

大陸文庫

9784803339871
1910193005302

日本妖忍列伝

猿飛佐助、風魔小太郎、服部半蔵、いづれ劣らぬ忍者たちは、凄絶な修業の果てに常人には想像もできぬ妖術を身につける。
しかし彼らは、主命を全うし、歴史の表面に現われることもなく闇の中を疾風のように駆け抜けていった……。
時代小説の醍醐味にふれる珠玉の名作、傑作、いま甦る!!

定価＝530円(本体515円)
ISBN4-8033-3987-2 C0193 P530E

大陸文庫好評既刊

【日本豪剣列伝】——南條範夫他
【日本剣鬼列伝】——津本　陽他
【日本忍者列伝】——山田風太郎他
【人斬り弥介】——峰隆一郎
【平三郎の首】——峰隆一郎
【暗鬼の剣】——峰隆一郎
【修羅が疾る】——峰隆一郎
【斬　刃(御落胤暗殺)】——峰隆一郎
【非情の牙】——峰隆一郎
【白　刃(埋蔵金の罠)】——峰隆一郎
【殺人!!博多発「ひかり4」の女】——峰隆一郎
【特急「あずさ」殺人事件】——峰隆一郎
【熱鬼顕現】——谷　恒生
【鬼獣狩り】——谷　恒生

日本妖忍列伝
発行日——1992年3月19日初版発行
著　者——早乙女貢 他
発行者——塚田友宏
発行所——㈱大陸書房
定　価——530円(本体515円)

日本妖忍列伝

早乙女貢他

大陸文庫

日本妖忍列伝

早乙女貢他

大陸文庫

日本妖忍列伝

早乙女貢他

大陸文庫

目次

おんみつ侍　小松重男　5
神変卍飛脚　宮崎惇　33
最後の忍者——天正伊賀の乱　神坂次郎　81
捨てかまりのお蘭　新宮正春　101
くノ一崩れ　早乙女貢　135
脱走　南條範夫　169
最後の隠密　小松左京　195
編者解説　縄田一男　233

おんみつ侍

小松重男

一

江戸城の中庭を木枯らしが吹き渡って行く。
「村垣どの。まもなく御上が御渡りあそばされまするぞ」
「はっ」
御小姓の前触れを聞いて村垣与三郎範正は御駕籠台下の地面に片手片膝を付き、ふかぶかと頭を垂れた。
範正は先祖代々御庭番を勤める家の次男に生まれたが、十年ほど以前に小十人格御庭番として召し出され、別家を立てさせていただいた。わずか十人扶持ながらも旗本である。
先刻、宿直当番の同役が出仕して来たので下城の支度を始めたところ、「御直に遠国御用を仰せ付けられるそうな。すぐさま御駕籠台下へ……」との達しが届いたのであった。
御駕籠台は本丸中奥と大奥の境目にあって、将軍が遠御成のとき御駕籠に乗り込む場所だが、また御庭番が御直に内々御用を承る場所としても世間へ知れ渡っている。
範正が御駕籠台下に畏るのは六度目だ。
「おぬしが妬ましいわえ」
とつぜんの達しを受けて袴の紐を結び直しているとき、ずっと年上の同役に言われた。
「おぬしは、たびたび遠国御用を仰せ付かるのう。よほど御信頼が厚いと見ゆる」

範正が初めて承った遠国御用は、まだ当代の将軍が本丸に移った直後で、実際の仰せ付けは御側御用取次の口を通じてであったが、御用の中身は重大だった。大飢饉の奥羽、越後諸藩を巡って各藩府の治政を調べて来たのである。いかなる場合にも身分を明かすことはできないので、いくら豊富な路銀を持っていても食べ物に有り付けない日がつづき、いくたびも、こんどこそ飢え死にか、と覚悟を決めたほど苦しい道中であった。

どうにか無事で御用を果たし、調べたことは細大漏らさず書面にして差し上げたら、じつに行き届いた復命書である、と御褒めくだされた由、御側御用取次が伝えてくれた。けれども範正は、そのことを同役たちには無論、妻や兄にも告げなかった。

それは、あからさまな自慢話はもとより、とどのつまりは自慢になるような事柄を口にすることこそ武士たる者が最も忌むべきことである、とむかし父より耳に胼胝のできるほど言い聞かされたからだ。

障子を開ける音につづいて、聞き覚えのある御側御用取次の声が頭上に聞こえた。

「御召しの者、これに控えおりまする。なにとぞ御用御仰せ付けくだされませ」

初めて耳にする家慶公の御声である。当年五十歳にしては若い御声だな、と思った。ありがたいことに亡き父の名を御存じだ。

「そのほう、たびたびの働き、大儀である。こたびは越後新発田の城を見てまいれ」

「ははっ」

「隅櫓の屋根が禿げ茶瓶であるそうな。まことか、偽りか、早々に聞きたい。速やかに立ち戻ってまいれよ」

「ははっ。しかと……」

しかと承りました、と明晰に申し上げるつもりが、どうにも声が掠れて満足な言葉にならず、しかと承ったそうにござりまする、と御側御用取次から助け船を出してもらった。

「左太夫の墓に香華を手向けてくれ」

「ははっ。ありがたき……」

御礼を言上し終えぬうちに障子の閉まる音が耳へ届いた。

範正は中腰のまま尻が中庭の塀へ突き当たるまで後退り、奥の番に潜り戸を開けてもらった。吹上の御庭を回って詰所へ戻ったが、さすがに同役たちは、どんな御用だ、などとは訊かない。まだ妬ましげな顔付きながらも、精一杯に働いて来い、と励ましてくれた。

巷間、御庭番が御直に遠国御用を仰せ付かると、わが家へも寄らずに御城から真っ直ぐ目差す国へ旅立って行く、などと喧伝されているけれども、そのようなことはない。

また、さる大所の呉服屋へ立ち寄るなり、さまざまな風体に変装して出掛けるのだ、と見て来たような臆測を述べ立てる向きもあるらしいが、そのようなこともない。

風体は自宅で変える。むかしは旅絵師やら旅芸人やらに姿を窶して出掛けた者もあったそうだが、なりだけで腕前が伴わなければ、かえって怪しまれてしまう。範正は武芸のほか、これと言える芸がないので、前回は江戸商人の手代を装った。

今回も前回同様にして御用を果たすつもりである。

だが、そんなことよりも御用の御趣旨を正確に理解して、いまのうちに江戸で調べておくべきことに遺漏なきを期するほうが肝要である。そのため、わが家へ戻って、じっくりと考え、じゅうぶんに事前の調べを尽くしてから出立するのが定めだった。ただ闇雲に急いだところで成果は挙げられない。

このたびも、速やかに立ち戻ってまいれ、と仰せ付けあそばされたが、とかく高貴な御方は性急にあらせられる、けっして周章狼狽いたすなよ、という亡父の戒めを思い起こした。兄が先代将軍に大坂の探索を仰せ付かったときなんぞ、その夜から、まだ戻らぬか、との御催促が矢継早に仰せ出されたそうだ。

二

御庭番は、それぞれ御庭番同士で婚姻し、なるべく親類を増やさないように心がけている。内々御用を承って探索する相手が親類だったりすると、ついつい情に絆されて矛先が鈍ったり、お手柔らかに……、などと頼み込まれたりするのを避けるためである。

もともと八代将軍吉宗公が初めて仰せ付けになった十七家に限られていた御庭番の家も、いろいろな事由で潰れたり、また範正のように嫡子でない者が別家を立てさせていただいたりで増減しているが、いずれも御扶持は少ない。しかし、口の悪い町人どもに、「百俵六人、泣き暮らし。家族が六人もあれば泣き泣き暮らしているだろう」などと貧乏ぶりを囃されているが、むかしから町屋の地所を二百坪くらいずつ賜っているので、そこから相当の地代が取れる。けっして裕福ではないが、さりとて、「泣き暮らし」ているほどの貧乏でもない。

範正と兄は日比谷御門のすぐ近く、鍋島藩主松平肥前守の上屋敷に囲まれた御用屋敷の中に御長屋を拝借している。御長屋と言っても町屋の裏長屋や、大名または大身の旗本が低い身分の家来たちを住まわせておく粗末な御長屋とは大違いで、それぞれ塀に囲まれた一軒あたりの敷地が百坪以上あり、家には五つも立派な座敷がある。ただ同役たちの拝借屋敷が連なっているので「御長屋」と称えているだけのことである。

範正は、その御長屋に戻ると、わが家より先に本家へ行き、兄の書見部屋を訪れた。

「上様が、そのように仰せられたか。さては……」

なにやら言いかけて言葉を濁したのは、いまの将軍が長い御世子時代に寵愛なされた御中臈たちを亡き父上が調べたのだ、と教えようとしたのかも知れない。御庭番の内々御用には、これから御側近くへ召し出されて御小姓、御小納戸役を仰せ付けられそうな人物の適不適や、係累たちを調べることと、いずれ御手を付けられそうな御中臈を同様に調べることもあった。

「まず目下の御用が先じゃ。ぜんたい越後の国蒲原郡にある新発田城の屋根が禿げ茶瓶とは……。おまえは仰せの趣が分かったのか」

「はい。おそらく……」

範正たち御庭番は、大奥、御右筆所、御勘定所、御目付部屋以外なら勝手に出入りして見聞

きすることが許されているから知っているのだが、越後新発田五万石の城主溝口主膳正直溥は、まだ襲封したばかりの若い大名のくせに、ほぼ同格の大名はおろか、まるで格の違う大名や、公儀の御側方、御役方、御番方、果ては御坊主衆にまで藩財政の逼迫ぶりを恥ずかしげもなく喋り散らしている。

「ふむ。当節、勝手向きの苦しい大名家は珍しくないが、御城の中で相手構わず喋り散らしておられるとはのう。して、評判は……」

「当然のことに芳しくはございません」

あそこは表高が五万石でも内高は十数万石以上ある筈。にもかかわらず、むかし焼失した城の普請が一向に竣工せぬのは奇妙だ。もう疾うに竣工しておるのに披露すると振舞、引出物などに出費が嵩むゆえ、ことさら勝手元の困窮を言い立てて普請が進捗せぬことを吹聴しているのではないか。また天守閣あるいは櫓の屋根を葺き終えぬうちは築城が完成したことにならぬという故実を幸いに、わざと禿げ茶瓶さながらにしておくらしい。

「なるほど。つまり上様は、まこと勝手向きが苦しゅうて屋根瓦を葺き終えることもできぬのか、それとも、わざと禿げ茶瓶にいたしておくのか、それを確かめてまいれ、と仰せ付けあそばされたわけじゃな」

「さように相違ないと存じまする」

「それにしても、禿げ茶瓶なんぞと申す俗な言葉をば、よくぞ御存じであったわえ」

兄は、かくべつ江戸で調べることのない御用だから明朝早く出立せよ、と言った。

「さのみ難しい御用ではないが、もしも役目が露顕いたしたときは命が危ういぞ」

「わたくしも、さように存じておりまする」

諸藩へ探索に潜入した御庭番が殺害されても、あくまで〝内々御用〟である以上、将軍は相手の藩主を咎めることができない。いつも御庭番の殺され損になった。それどころか殺され方によっては嫡子が家を継ぐことも許されず、みすみす享保以来つづいている家が潰されてしまうことすらあった。

家を潰されるのは、たいがい役目を打ち明けたりして内々遠国御用の御庭番であることが天下に知れ渡った場合である。いっそ行き方知れずになるほうがましだった。三年経っても音信がないときは死んだものと見做されて、家禄、役目ともに世襲が許される。もう二百四十余年もつづいている太平の御世に、たった一つ残っている武士らしい任務が、まさに命がけで成し遂げるべき御庭番の内々御用であった。

「このたびは、おまえ一人じゃと」

「はい」

たいてい二人いっしょに仰せ付かるのが長年の仕来であったが、なぜか今回は範正ただ一人だった。

「さほどに御信頼が厚いと思わねばならぬ」

「ありがたいことにござりまする」

「さて、だれを宰領に頼もうか」

まったく、と断言してもよいほど世間に知られていないことだが、御庭番が御用の旅をするとき荷物を担いで供をする、と言うよりは案内に立つ〝宰領〟こそ町奉行所に於ける岡っ引よろしく下働きを勤める私的な手先だった。京、大坂には公然たる手先がいて、それぞれ公儀より御扶持または地所を賜り、商売や、芝居・見世物の興行に携わっている。こわもてするので楽に金が儲かるらしい。しかし、それ以外の土地には一切このような手先など置いていないから、御庭番たちは、いざ御用、というときに備えて、なるたけ頼りになる宰領を見付け出しておかなければならない。れっきとした旗本の御庭番ですら見殺しにされるのだから、まして私的な雇人に過ぎぬ宰領は公儀より何ほどの庇護も受けられないし、また京、大坂の手先のような利益も得られない。その点、岡っ引とは大いに異なる。そもそも御庭番は、ふだん江戸で召し使っている家士、家僕など奉公人を御用の手先として用いることが厳重に禁じられている。その理由は諸藩の密偵が奉公人に化けて御庭番の家へ潜り込むのを防ぐためであった。

だれしも荷物担ぎの宰領なんぞ頼りにしないで御用を成し遂げたいが、腕っ節の強さはともかく、身元が確かで旅慣れた供を連れて行かなければ、いっそう御用が困難になるのである。

亡父は得難い宰領を何人も使うことができた。いずれも、かくべつ恩を授けたわけではないが両番格御庭番として召し出されたばかりか、次男の範正も小十人格御庭番として別家を立てさせていただいたのも、ひとえに得難い宰領たちの働きがあったればこそ、と言える。

「あの者たちを、わしの家来じゃと思うな」

範正は、亡父と兄に釘を刺されていた。

「つねづね、おまえのためにも働きたいと申しておるゆえ……」

兄は、また信濃屋に頼もう、と言った。

三

「兄上。なにとぞ、わが家の取り締まりをお頼み申しまする」

「うむ。引き受けた。存分に働いてまいれ。おれも植木屋どもの人数改めなんぞ御免こうむって、どこぞの国へ探索にまいりたいわえ」

御庭番は平常、本分の御用を仰せ付けられていない者が当番日に出仕して、植木職人、畳職人、表具職人たちの出入りを監視するなど文字どおりの〝御庭番〟もしているのである。

範正は本家の当主たる兄の御長屋を辞去してから、わが家の敷居を跨いで妻子と奉公人たちに明朝の出立を告げ、夕餉もそこそこに芝七軒町の信濃屋という紙問屋を訪れた。

「ごぶさたいたしております」

当代の信濃屋芳兵衛は六十九歳だと言う。当然兄より年上だが髪の毛は遥かに多い。いずれは三代目になる一人息子を宰領に使ってくれ、あなたさまより六つ年上だ、と言って引き合わせてくれた。

「お初にお目どおりいたします。栄太郎と申しますが、どうぞよろしゅう……」

じつのところ範正は、いま初対面の挨拶をしている栄太郎を疾うに見知っていた。ちかぢか宰領に使うことになるだろう、と予想したからではなかったが、さんざん亡父の宰領を勤めたう、と思い立って両三度、武者窓より覗いたのであった。芳兵衛が倅を町道場へ通わせている、と聞き及んだので、いったいどれほどの腕前か見届けよ

竹刀捌きの筋は良い、と見た。それより、いかにも機転のききそうな顔付が気に入った。五年前の春、大塩平八郎という大坂町奉行所の元与力が不届至極な乱を引き起こした直後に、兄は内々御用を仰せ付けられたが、このとき宰領を勤めた栄太郎の機転で間一髪の危機を切り抜け、無事に戻って来たのである。

鎮圧の采配を振っていた二人の町奉行が揃って落馬するという失態を演じ、「大坂天満の真ん中で、馬から逆さにすってんてん、こんな弱い武士は見たことない。鼻紙三帖ただ捨てた」というような唄まで流行る始末。両町奉行は、かならずや派遣されて来るであろう御庭番たちを殺して将軍の耳目を塞ごうと、あらかじめ配下の与力、同心たちなどに東海道筋を見張らせていたらしい。兄たちの一行は、おおぜいの下っ引に取り囲まれて、どうも胡乱な江戸者だ、と問屋場へ連れ込まれた。紙問屋の手代だと言っても信用せず、下っ引の親分が暗に、ほんとうの身分を明かせば鄭重に大坂まで御案内する、と誘い掛けたので、うっかり兄が乗りそうになったところ、障子の向こうで刀を抜く気配とともに殺気が沸立った。そのとき栄太郎は咄嗟に範正の兄を引っ担ぐなり人通りの多い道へ飛び出したのである。いっしょに連れ込まれた相役と、その宰領はいまだに戻って来ない。つい先日、総領息子が家督相続を許されたが、ま

だ元服して間もないから御役に就くのは相当先のことである。

なんの証拠もないが、おそらく殺害されたものと思われる。このように幕閣の重職たる大坂町奉行ですら保身のために御庭番の命を狙うくらいだから、いまは神妙に臣従している外様ないし準譜代の大名が、いずれ機の熟した秋は……、と公儀の御為にならぬことを企んでいるとして、もし御庭番を発見したら生かしておくまい。

「溝口様の御上屋敷は幸橋御門の近く。てまえどもは徳用半紙を御納めいたしております」

「ほう。やはり相当けちな御家と見えるな」

「いかさま。御殿様の御召し上がり物なども、ずいぶんと御粗末な物ばかりだそうで……」

信濃屋の徳用半紙は、ちょっと寸法が小さいので値も安い。きまりの寸法なんぞ構わない向きにはよく売れているが、きまりに喧しい武家、儒家はけっして使わない代物である。城持ち大名のくせにそういう代物を使っている溝口家は、よほど逼迫しているか、さもなくば根っから吝嗇な家風なのであろう。

芳兵衛が、出立前に調べておくことは……、と訊く。範正は、かくべつ江戸で調べることのない御用だ、という兄の言葉を伝えた。

「ご本家のおっしゃられたとおりだとは存じますけれども、なお念のため……」

では、ここへ溝口屋敷を受け持っている手代を呼んでくれ、と範正は頼んだ。

いかにも利口そうな手代が奥座敷へやって来て範正の問いに答え、新発田藩士はみんな寛政元年の高替えを恨んでいる、と述べた。

「五十四年もむかしのことを、いまだにか」

親しい同役が寛政元年の生まれだった。この人は、もっと先のことだと思っていたのに、なんの手柄も立てぬうちに知命の歳を四つも越えてしまった、無念でならない、と正月以来愚痴をこぼしつづけている。だから範正は、即座に「五十四年も……」と言えたのである。

「はい。なんでも、そのとき……」

奥州の三郡と取り替えさせられた新発田領の田地は、表高こそ同じ二万石でも実収は五万石以上だった。

「むざむざと三万石ほど召し上げられたも同然の御仕打で、それ以来、新発田藩は……」

ようやく治水工事が成功して新田が増え、やれやれ、あれ以来の貧乏とも縁切りか、と愁眉を開いたのも束の間、またもや家臣たちの俸禄借上、大坂蔵元商人からの借金、領民たちへの才覚金や御用金の申し付けなどが以前どおりになってしまった。

「あれと申しますのは、すぐそこの……」

「新堀の御普請を仰せ付かったことだな」

「はい。溝口様の御家来衆は、新堀を見るのが厭だ、と申されまして、けっして十番中町の盛り場へは足をお向けになりません」

「ふうむ、さほどにか。あれは確か……」

新発田藩が江戸麻布新堀二十二町の改修工事を命ぜられたのは元禄十二年のことだ、と芳兵衛に教えてもらった。

「ざっと百四十年ほど以前でございますな」

算盤も使わず立ち所に「百四十年ほど」と言う芳兵衛を見やって、範正は舌を巻いた。

芝七軒町という紙問屋にしては場違いの町とは言え、この辺りでは珍しく間口の広い表店を構え、奉公人を十数人余りも使っている大店の主人親子が、なぜ「宰領」と呼ばれる御庭番の手先なんぞ好んで勤めるのか。なんら商売の得にならぬどころか、だいじな店を長いあいだ留守にするだけでも大損の筈だが……。

けっして公儀より恩顧を賜わっている商人ではない。たった一枚の半紙すら御買い上げいただいたことはないであろう。それどころか、正寸の半紙を売れ、と町方同心に威されたことすらあるらしい。むしろ公儀に対して反感を抱いている商人、と思わねばならぬ。

亡父に聞いたところによれば、当代の芳兵衛は初代の養子で、天明の大飢饉を逃れて命からがら江戸へ辿り着いた奥州の小前百姓だったのだそうだ。

「まいたび、とつぜんの御用で気の毒じゃが、なにぶん……」

範正は、まだ一抹の疑念が晴れぬながらも、「よろしゅう頼む」と栄太郎へ向かって頭を下げ、明朝七つに出立する、と告げた。

「このたびは呉服屋ということに……」

「紙問屋では不都合か」

栄太郎が、あそこは紙の産地でないし、わざわざ江戸から注文を取りに出向くほどの所でもないから怪しまれるだろう、と言った。

「では、安物を専ら商う古着屋にいたそう」
「殿様は見るからにお若くていらっしゃいますから若旦那とお呼びいたしましょう。てまえは手代ということに……」
わずか五十俵取りでも旗本の当主だから、身分が下の人たちは、みんな範正を「殿様」と呼ぶ。召し出されて小十人格御庭番を仰せ付かった日に亡父が、《殿様と呼びましょうかと女房言い》という川柳点の前句付を引き合いにして大笑いしたものである。
あのとき範正はまだ一人者だったが、もし妻帯後だったら、ほんとうに川柳点のような戯言を妻が口走ったかも知れない。いまでも妻は、範正へ「殿様」と呼び掛けるたび、くすぐったげな顔付をする。
「おぬしは始終『若旦那』と呼ばれ付けておる本物の若旦那じゃ。このほうへ『若旦那』と呼び掛けながら、おのれ自身が返事なんぞいたすなよ」
範正が亡父を真似て、さのみ面白くもない諧謔を言ってみたら、芳兵衛と栄太郎は、いっしょうけんめいに笑ってくれた。

四

しょっちゅう紙の仕入れに諸国の産地を巡るので栄太郎は旅慣れている。その点では打って付けの宰領だった。

宿場へ着けば一目で宿屋の善し悪しを見分けたし、怪しげな飯盛女なんぞ近付けなかった。範正が恥ずかしくなるほど立派な字を宿帳へ書く。どうやら学問では栄太郎のほうが上らしい。それでいて腕っ節も強く、会津領の峠道で酔っぱらっている馬子に絡まれたときは、ゆうに二十貫以上もあろうかと思われる荒くれ男を気絶するまで叩きのめした。
範正は、すっかり町人に成り済ましているけれども、道中差の中身だけは町人向きのやわな〝こけ威し〟ではない。先祖が戦国の世に敵を斬り倒した剛刀である。御庭番はみんな小太刀を遣う。そして、いつでも脇差を町人用の道中差に見せ掛けられるよう別の拵えを用意しておくのだ。
「きさまが行李に括り付けておる道中差は、いやに太いな。中身を抜いて見せろ」
国境で、名目は幕府の道中奉行支配ながら実務は藩府に任されている関所の役人が要求した。一瞬、どきりとしたが、その役人は刀を見る目がなかったとみえて無事だった。やがて新発田城本丸の隅櫓が見えてきた。
「若旦那。やっぱり、てっぺんのところが木っ端葺きのまんまでございますよ」
栄太郎は、そばに人がいないときでも「若旦那」と呼び掛ける。範正は、町人言葉を操ることが苦手なので、なるべく大きな声を出さないように気を付けているのだが、このときばかりは思わず大声を発してしまった。
「やっ。なるほど禿げ茶瓶さながらじゃ」
旗本は御家人と違って老若にかかわらず、「……じゃ」と言う習わしだった。もしも、いま

の声を江戸に住み慣れた者が聞けば、こいつは町人に姿を変えてはいるが武士だ、それも御目見得以上の直参つまり旗本だな、と正体を見破ったに違いない。そのことを栄太郎に注意された範正は、もう幾度目かの苦笑いをしながら頭を掻いた。

「まず宿を決めよう。ひもじゅうてならぬ」

「へい。存外、宿屋がたくさんございますねえ。てまえも初めての土地で……」

ざっと城下を見て歩き、町屋並のなかで最も武家地に近い小体な宿屋を選んだ。

「おめえさんがた江戸の人は口が奢ってえなさるすけ、お気の毒ですろも……」

たいした料理は食膳に載せられない、と宿屋の亭主が断わりを述べてから、うやうやしく懐から出した一枚の書き付けを読めと言う。

「あれえ、この紙は信濃屋の……」

徳用半紙だ、と栄太郎が笑っている。

なぜ寸法を測りもしないのに一目で分かるのか、と訊いたら、漉き目の縦横が逆になっているのだ、と教えてくれた。まさか直筆ではないだろうが、藩主の名儀で御触が書いてある。

——たとい正月の来客でも一汁二菜より多く振舞ってはならぬ。葬礼仏事にも酒を用いてはならぬ。村役人の寄合も酒を出すな。唄歌い、三味線弾き、祭文語り、軍談師などの芸人は入国させぬ。百姓町人は半幅袖の着物を用いよ。女は半幅帯を締めること。むかしは藁で束ねていたのだから髪飾などは無用にせよ。日傘、ぶら提灯は禁ずる。平常は朝夕の二度だけ粥か雑炊を食べ、けっして堅い飯を食べるな。耕作時の百姓は雑飯を食べてもよいが握り飯は田植の

折に限る。等々……。

「これはまた厳しい御触でございますねえ」

「雑飯ってのはぜんたいどんな飯なんだい」

だいぶ耳が遠そうな亭主に大声で訊いたら、ごく少量の米に大根、菜っ葉、粟、稗の類いを混ぜて炊く飯だが、他国の旅人には米だけの飯を食べさせてもよいことになっているから心配するな、と訛の強い言葉で答えた。

「らろも……」

御菜は二品に限られている、それでも年始客なみのもてなしなのだから……、と言いながら御触書を押しいただいて下がった。

「もはや探索の余地はないぞ。いま一度、近くより城を眺めて、すぐさま江戸へ戻ろう」

「でも、それじゃあ、あんまり……」

宿屋の夕餉は旨かった。一粒ずつ光っている白い米の飯と、大切りにして焼いた甘塩の鮭と、生鮭、里芋、銀杏、慈姑、牛蒡、人参、蒟蒻などを賽の目に刻んで薄醤油で煮た羹だけの二品だったが、よその土地の旅籠で出される見た目の豪勢な料理よりも遥かに旨かった。羹は「小煮物」と呼ばれている由、亭主が教えてくれた。隣の長岡領・新潟町では同じものを「のっぺ」と呼んでいるそうだ。

じつは安い古着の注文を取ろうと思って来たのだが、どうも見込みがなさそうなので、あした城下を見物してから会津のほうへ引き返す、と範正は出立の時刻を告げた。

「どんがい値が……」

亭主は、どんなに値が安くても江戸の古着を当地で売り捌くことは無理だ、と言った。

ことしになって町人たちはおろか、やっとこすっとこ一人だちしている小百姓までが才覚金を差し出したのに、もしも噂どおり新発田領が十万石に高直しされたら、それ相応の海防御備を命ぜられるから、また才覚金を工面しなければならなくなる。

「ふんとらったら……」

本来、殿様が十万石の大名になれば、隣国長岡藩七万四千石の牧野様を一挙に追い越すわけだから、われわれ領民も当然よろこぶべきことなのだが……、と亭主は声を潜めた。

そうなると、海防御備のほか参勤交代の供揃いも、いまより立派にせねばならぬし、また姫様御輿入れの費用も嵩む、と溜息をついた。

「お殿様がまだお若いのに、そんな先のことまで心配してたら頭が禿げちまうぜ」

栄太郎にからかわれた亭主は、いま二十四歳の殿様に八歳の姫君様がおられるので輿入先の決まるのもそう先のことではない、と口を尖らせる。

「だったら、おちおちしちゃあいられないねえ」と栄太郎は素直に相槌を打って宥めた。

そういう心配もさることながら、小前の百姓たちはもっと可哀相だ、と亭主が眉根を寄せた。

せんだって新津組という地域の大庄屋が城へ呼び出されて、このごろ小前百姓の出稼ぎが目に余るから厳重に取り締まれ、と城代家老に叱られたのだそうだ。

「そりゃあ……」

出稼ぎではなくて、じつは欠落なんだろう、と範正が口を挟んだら、亭主は大きくかむりを振って、みんな、もう少し辛抱していれば暮らし向きの楽になることを知っているから、けっして欠落なんぞしない、と断言した。

当時の農民は転業と移住の自由がなかった。百姓の子に生まれた人は生涯その土地で百姓仕事をつづけなければならない。よその土地へ移住しようとした人は「欠落者」と決め付けられて、当人と家族は無論、五人組や名主まで重く罰せられたのである。

また当時の農民は自分の土地を所有していなかった。領主が支配する土地で耕作する権利を持っているに過ぎないのである。が、その耕作権の移転はあった。おのれの怠惰や、うちつづく凶作で貧窮した人たちは耕作権を抵当にして富農や富裕な町人から金を借りる。ほぼ十年で返済できなければ抵当流れとなり、その農民は家族もろとも小前つまり小作人にされてしまう。

「ここにも大地主がいるんだろう」

「へい。ばかげに太い旦那様らったら……」

とっても大きな地主は市島、白勢の両家で、それぞれ千町歩以上も持っていると言う。

そういう大地主にだけ才覚金や御用金を申し付ければいいのに……、と栄太郎が水を向けたところ、亭主はつぎのように言った。

もちろん市島、白勢の両家が、いの一番に莫大な金を差し出しているけれども、この両家の先祖は治水と新田の開拓に格別の力を尽くしたから田地を拝領したので、よその藩の大地主のように百姓たちから借金のかたに取り上げたのではない。つまり領主にとっても領民たちにと

っても恩人の子孫だから、そうたびたび金を出させるわけにはゆかぬのである。

「ふうむ、なるほど。小前の百姓たちも恩義を感じておるゆえ、この新発田領の百姓どもは一揆なんぞいたさぬのじゃな」

うっかり、また旗本言葉を遣ってしまった範正が栄太郎に脇腹を突かれ、はっと口を噤んだけれども、この年寄の亭主はもうだいぶ耄碌しているとみえて、いささかも怪訝な顔など見せず、いつの飢饉でも両家が率先して大量の米を御救小屋へ運び込んだ、と口をきわめて誉め称え、あんたがたは知らないだろうが、いまから三十五年ほど以前に……、と言い出した。

文化四年、露西亜の軍艦が蝦夷地の択捉島へやって来たとき以来、新発田藩は領内の海岸と、佐渡島沿岸の海防御備を仰せ付かっている。それで殿様、家臣たち、領民たちがみんな粗末な着物、食べ物を忍んで露西亜の襲来に備えているのだ。あんたがたは江戸へ戻ったら、ちっとも商いのできない貧乏藩だったなんぞと言い触らさないでくれ、われわれのおかげで江戸の人々も枕を高くしていられるのだから。

「よう分かった。けっして新発田の悪口なんぞ言わぬ」

範正が相場以上の祝儀を弾むと、この年寄は相好をくずしてよろこび、そのうち藩府の進めている殖産が順調に運んで、城下の景気も好くなったら、さっそく手紙で知らせてやるから古着をどっさり売りに来い、みんなに勧めてやろう、と愛想を言った。

「ぜひとも、そうあって欲しいものじゃな」

またもや範正の口から旗本言葉が出たのは、この年寄の話に痛く感銘したからである。

「若旦那。若旦那ったら……」

しきりに栄太郎が脇腹を小突いたり、袖を引っ張ったりしても、まるで範正は意に介さなかった。

たとい実収が表高の何倍あろうとも、いま溝口家へ高直しを命じさせてはならぬ、と思った。こんな善政を布いている大名に出費を増やさせることは結局、大公儀の御為に、ひいては天下万民の為にならぬ、と思案を決めた。

五

ぐっすりと眠った。また鮭と小煮物を食べたい、ぜひ朝餉の膳にも載せてくれ、と頼んでおいたので、もう一度賞味することができた。小煮物が一段と美味だった。

「手紙が行ったら、ふんとに来てくだせえ」

「うむ。まいりたいのう。達者で暮らせよ」

旅装束を整えて往来へ踏み出した範正は、またもや栄太郎に言葉使いを窘められた。

「さように喧しゅう申すな」

「ほれ、また……」

「だれも聞いておらぬわ」

「いいえ。後ろから物売りがまいります」

なるほど、「鰊の昆布巻、要りませんかいねい」という女の売り声が聞こえてくる。

「あの女子がわれらの話し声を気に掛けるわけがない。もはや、このたびの御用にはなんら内密の探索など要らぬことが相分かった。確かに城の屋根は禿げ茶瓶にござりました、と申し上げるだけじゃ」

「しかし、若旦那。わざと瓦を葺いてないのかも知れませんし……」

栄太郎は、いちおう調べなければ……、と進言する。ひごろ温和な範正が珍しく声を荒げて応えた。

「だまれ。きさま、宰領の分際で、ことごとしげに要らぬ差出口を申すな」

「へい。申しわけございません。けれども若旦那、ごらんなさいまし。てっぺんに瓦を載せてないのは表から見え易いところだけでございますよ。やっぱり、わざと……」

「さようなことは疾うに分かっておるわえ」

禅寺の多い城下町だとみえ、向こうから一列になって托鉢の僧たちがやって来る。

範正は僧たちの誦経に負けないよう声を張り上げて、わずかに葺き残してある隅櫓の瓦くらいは、いかに勝手が苦しくとも買えぬわけがないだろう、が、さように復命すれば、たちまち重職がたの耳へ這入り、そのかたがたは得たり賢しとばかりに新発田藩の高直しを決めてしまう、と言った。

「栄太郎、われら御庭番を岡っ引紛いの密偵なんぞと勘違いいたすなよ」

「それは十分に心得てございます。あっ」

いきなり栄太郎が身を寄せて来たので、どうした、と質したら、いま擦れ違って行った托鉢僧たちから殺気を感じたのだと言う。

範正は大口を開いて呵々大笑した。

「ばかばかしいことを申すな。おぬし、わが兄上のお供をして大坂へまいったときは、その勘を働かせて事無きを得たそうじゃが、いまのごとき思いをば『疑心暗鬼』と申すのじゃぞ。たとい禿げ茶瓶さながらの隅櫓が、わざと逼迫ぶりを喧伝せしむるためであったとしても、けっして大公儀の御為にならぬ曲事ではない。さすれば、われらの命を付け狙う謂れもない道理。さように軽はずみなことをいたす粗忽者に城代家老の勤まるわけがないわ」

昆布巻売りの女が追い越しざまに鋭い一瞥をくれて行った、と栄太郎に囁かれて範正は、また笑った。城の大手門が近付いてきた。

どこの藩でも藩主の江戸参勤中は城ないし陣屋の警衛が緩い。ここも例外ではなかった。かなり大きな門番小屋の中には、のんびりと腰掛けに跨がり、六尺棒に縋って朝から舟を漕いでいる足軽がたった一人いるだけだった。無遠慮に近寄って門内を覗き込んだ範正が、とびきり大きな嚔をしたのに、ぴくりともしない。こんな寒い朝方、火桶も置いてない小屋で居眠りなんぞしているのはかえって怪しい、と声を潜めて訝る栄太郎に、もっと素直になれ、と言って範正は笑った。

「北国に生まれ育った者は、これしきの寒さなんぞ平気の平左なのじゃ」

「でございましょうかねえ。あたしの目には震えているように見えますけれど……」

栄太郎は、だいぶ気分を害した様子であるが、むくれて口をきかなくなるような男ではない。おれより六つも年上で、しかも遥かに裕福な大店の跡取り息子が、なぜ……、と範正にはそのことのほうがよほど訝しかった。

「若旦那。とにかく……」

申し上げる、申し上げないは別として、どこぞに同じ瓦が隠してないかどうか探ってみよう、という栄太郎の進言も笑って斥けた範正は、ずんずん城下を通り抜けて、もと来た越後街道を会津のほうへ向かった。

「やっぱり、このまま江戸へ帰るんですか」

「さよう。御上は、速やかに戻れ、と仰せられたのじゃ。ひょっとして、おぬし……」

色白で美しい土地の商売女と一夜ねんごろにいたしたいのか、と訊かれた栄太郎は、とんでもない、と怒り出した。

「なれば足を速めるぞ」

会津領へ這入るまでは道中差を腰に差して歩こう、としきりに言う栄太郎へ、臆病者め、と叱咤の声を浴びせながら道を急いだ。

きのう範正の道中差を改めた関所の役人は、もう二人の顔を忘れてしまったのか、どうしてこんなに早く戻るのだ、などと訊かなかった。

どんよりと曇り、いまにも雪が舞い下りて来そうな空は峠を越えるまで晴れなかった。会津城下を経て宇都宮より奥州道中を急いだ。

千住大橋を渡り終えれば江戸である。

範正は、さりげなく栄太郎と別れて真っ直ぐ御城へ向かった。詰所で衣服と髷を直して、御側御用取次に帰着の届けをした。

「御駕籠台下へまいれ」

将軍は、速やかに戻れ、と命じたことなどけろりと忘れて、もう戻ってまいったのか、と意外そうな語調で宣うた。

「やはり主膳の城は禿げ茶瓶であったか」

「ははっ。まさしく勝手向き困難なるがため、いまだ木っ端葺きにござりました」

「そうか。大儀であった。誉めて取らすぞ」

「ははっ。ありがたき幸せに存じ奉りまする」

範正が下城して御長屋へ戻ると、まったく思いがけない手紙が待っていた。封じ紙の裏を返して見るなり、さしも沈着な範正も心の臓が音を立てて躍った。新発田の宿屋で見せられた御触書と同じ筆跡で、「なほひろより」と書いてあったのである。手紙は冒頭に、たがいの後難を避けるため読み終えたら火中へ投じてくれ、と念を押し、つぎのようなことが気さくに認めてあった。

――貴下の英明な復命のおかげで、わが家も当分のあいだは高直しを免れそうだ。いずれ十万石くらいに直されるだろうが、それまでに勝手元の余裕を拵えておく。貴下のような幕臣を重用なされば大公儀はもとより、大公儀を宗主と仰ぐ諸侯も安泰でございましょう、と先刻、

老中がたへ申し上げておいた。貴下は新発田の小煮物と鮭をたいそうに気に入ったようだが、いつでも本所の下屋敷へ訪ねてまいれば馳走する。そのとき、ぜひとも脇差を見せてくれ。さぞかし名のある刀匠が鍛えた業物に相違ない、と国許より申し越してまいったゆえ……。

範正は漉き目の縦横が逆になっている寸詰りの半紙に書かれた溝口主膳正直溥の手紙を燃やしながら、役者が一枚上だな、と一言だけ呟いた。

あの宿屋の老耄亭主が新発田藩の密偵だということなんぞ即座に見抜いていたし、栄太郎よりずっと早く托鉢僧たちから殺気を感じ取っていた。だから、ことさら声を張り上げて、やがて帰府したら復命しようと思っていることを告げてやったのだが……。

天保十三年の師走も近い。

こののち村垣与三郎範正は従五位下に叙任されて「淡路守」と称し、安政七年一月（三月、万延と改元）、日米修好通商条約批准書交換のための副使として正使・新見伊勢守正興、目付・小栗豊後守忠順らと共に亜米利加合衆国へ派遣された。

神変卍飛脚

宮崎　惇

一

三国山脈と関東山脈が合するところ、信州鳥居峠がある。

北から数えて、四阿山、烏帽子岳、三方ガ峰、高峰山、黒斑山、そして浅間山と、峻険が連なり、東へ方向を転ずるに従って次第に高くなり、やがて碓氷の難険から上州へ続いていく。活火山の山系である。

その鳥居峠が、南へ烈しく清流へ落ち込み複雑多岐な地形をあやなす角間の渓谷。死んだ無数の噴火口が、切り立った断崖の連なる奇岩奇石のそこここに温泉を噴出させ、霧を巻き起した。

時に天文十四年六月。

淫靡な口臭と、脂粉の芳香が、闇のなかにかおった。

粘い腰がよく動き、目眩く恍惚感を誘う。

胸の下で喘ぎ、呻き、身もだえる女の裸身を、左衛門佐は飽くことなく嘗めねぶった。

「ああ」

女は叫び、身体を弓なりに反らせた。

噴きだすおびただしい汗が、左衛門佐を浅黒い締まった素肌から滑り落す。

「去なせとう、去なせとうござりませぬ」

喘ぎあえぎ、女はひしと腕を左衛門佐の頸に巻き、乳房を押しつけ股を絡んだ。
「わしも去にとうはない」
「誓って迎えに」
「迎えに」
「来てくれまするな」
「かならず」
「――悲しい」
ひきつるような吐息を何度も洩し、女は輪転した。豊かな黒髪が床に乱れ、うねった。
二人はまた激しい抱擁のなかへ溺れ込んでいった。
眼を眉型に細め、忘我の声の尾をひいた女から左衛門佐は離れた。
女の身体が崩れて、太り肉の腿が大きく覗く。
「騙しはせぬでありましょうな？　待ちきれませぬ」
嬌声をふるわせ、指先をそり返らせた手が左衛門佐を追って、空をかいた。
「わしとて同じことじゃ。明夜また」
「とのさま」
声は虚しく、応えはなかった。
左衛門佐は、外へ踏み出していた。
部屋に漂う出湯の湿気を含んだ生ま暖かい夜気が、幽かにゆらいだ。

左衛門佐とは、信州佐久郡望月の郷の主、望月盛時をいう。左衛門佐、遠江守、のちに入道して印月斎と称す。
当時、佐久六カ城を支配し、武威強大なるものがあったが、二カ月前、岩尾城代真田弾正幸隆の仲介により、甲斐の武田晴信（信玄）に謁し、客分として幕下に参じた。
この挨拶と礼をかねて、小県郡真田の庄に弾正幸隆を訪れた左衛門佐だったが、すでに十日余も真田舘に滞在していた。
角間の湯治場で、己れのものとした美しい下婢と別れ難かったのである。
子授けの神湯と、古くから伝えられるだけあって、ここの出湯は一種の催淫作用があるらしい。
夜毎、左衛門佐は真田舘から女の元に通いづめ、肉欲に溺惑した。
時刻は、子ノ刻（夜中の零時）になろうとしていた。
角間渓谷から真田舘まで半里（二キロ）とない。
まもなく鬱蒼たる木立にかこまれた真田舘の土塀が、闇の彼方に沈んで見えた。
熱くとろけそうな女陰の感覚を、もう一度反芻し、小鼻をくすんと鳴らして笑うと、左衛門佐は、馬を早めようとした。
そのときだった。
ふいに、東南の空に燐光を発した大きな火球が現われ、青白い光跡を曳いて狂ったように突進してくるのが見えた。

「おっ」

思わず左衛門佐は馬の手綱をしぼり、薄雲に覆われた暗い頭上を仰いだ。

ふらふら墜落して来たかと思うと、翻って垂直に上昇し、鋭い角度で横に滑り、波状に飛行を続け、再び降下するその奇怪な火球の動きは、めまぐるしかった。

あきらかに流星ではない。

「面妖な」

鐙を踏んばって馬上に伸びあがり、瞳を凝らした左衛門佐が、刀に手をかけた刹那、突如、白熱した火球から夜空を裂いて閃光がたばしった。

ご、ごごーっ……すさまじいばかりの空気の振動が、全身をしめつけた。

天は、一瞬、物凄い火焔に染った。

恐怖に竿立ちになる馬を立て直した左衛門佐は、三方に飛散した火球の小塊の一つが、己れめがけて落下してくるのを認め、絶望の息をのんだ。

が、それは錯覚だった。

その小火球は、はるかな頭上を飛び越えて、くらい林の向うへ消えた。

と同時に、地面をゆるがすにぶい衝撃が響いて来た。

そのあたりの暗闇に何やら陽炎のようなものが、何条も揺れて立ち昇るのが望めた。

しばらく心気をととのえつつ、ぼんやり眺めていた左衛門佐の顔が、急に蒼白となった。

それが、角間の湯治場付近と気付いたからである。

「まん……」

女の名を叫ぶと、左衛門佐は手綱をかえして、馬腹を蹴った。

静かな谷あいの湯治場は、みるも無残に破壊され、地獄の針の山を想わせるごとく、変り果てていた。

えぐられた渓谷の岩肌に、無数に口をあける小さな廃坑のような穴からは、無気味な血の色をした煙が、ゆらゆら細く長くとぐろを巻いてたなびき、たち込める熱気に衣裳が燻りだす始末だった。

完全に黒焦げになった人々の死骸は、傍を歩くと、脆い木炭のように、がさっがさっと形を崩した。

いまだ、全身から水蒸気をあげて、ぐつぐつ煮えたぎって転がっている死骸も多くあった。

豊富な湯量を誇っていた温泉は、跡かたもなく、蒸発している。

このようななかにありながら、まんは生きていた。

表面が溶けてガラス化し、どろどろと垂れ固っている高さ二丈（六・六メートル）ほどの巨巌のかげから、己れを呼ぶか細い女の声を聴き、左衛門佐は駆け寄った。

譫言のごとく左衛門佐を呼ぶ女の裸身が、うつ伏せになって、そこにあった。

薄雲が切れ、下弦の月がのぞいた。

「まん」

抱きかかえた左衛門佐は、しばし呼吸するのも忘れ、女を凝視した。

梅雨空にけぶる月光に窺える顔かたち、すべて、まぎれもないまんに違いなかったが、長くしなやかな黒髪は、目も醒めるような金髪の巻毛に変り、浅黒い皮膚は白絹か氷のごとく透きとおって、肉感的な唇の紅さがひときわ美しく鮮かだった。

そして、虚ろに開かれ焦点を結ばない瞳も珊瑚色に変化し、赤々ときらめいていた。その眼は死んでいたのである。

左衛門佐盛時が、真田舘を辞し望月へ戻ったのは、一日経てである。

左衛門佐の懇請により、女はそのまま真田舘に飼われたが、翌年三月、男の子を難産し、産み落すと同時に他界した。

髪の毛の濃い、利発そうな嬰児だったが、ただ、頭の頂きに生えた一握りの金髪の巻毛が、人々の眉をひそめさせた。

佐助と名付けられる。

ほどなく佐助は、左衛門佐の手から、近江国甲賀郡にある甲賀忍五十三家の筆頭、望月出雲守盛昌に預けられ、忍術を仕込まれることになる。

左衛門佐は自身忍者ではないが、甲賀望月家の本系として、多数の甲賀者に絶大な力を及ぼしていた。

甲賀流忍術の始祖甲賀三郎こと望月三郎兼家が、この信州望月郷から出ている為である。

二

さて、忍術修業についてであるが、巷間伝えられるところによると、忍者の子は、普通、三歳から修業に入り、十歳までに、六無（無色、無形、無跡、無声、無息、無臭）、四有（脱胎、飛行、昇天、縮地）と称される基本技を修得しなければならないとされている。

具体的にいえば、巾半間、長さ三間の濡れた紙を地面に拡げ、その上を足形をつけずに渡ることから、山間の水溜りへ蓆一枚を乗せ、落ちないよう渡り、次は水面に浮かせた紙三枚、更には紙一枚の上を、破らず歩き渡る体重滅却術。一日（十時間）で四十里走る速歩術。前後左右三間、高跳び九尺の跳躍術。当身で仮死する絶息術。刀槍で斬刺され、あるいは数十里の道を駆け抜けても呼吸を乱さず、気配を悟らせない整息術。五体の関節をばらばらにする傀儡術。三十分も水中に息する潜水術。闇の中で物を視る暗視術。重さ十数貫のものを、手または足の拇指、人差指で持ちあげ、三十分以上耐える術などである。

これらを十歳になっても体得できぬものは、忍者としての素質なしとされ、棄てられるか、殺された。十中六、七がその運命を辿ったという。

六無四有の術の修業に耐え得たものに、はじめて、日、月、湖、雲、霧、雷、電、風、雪、木、草、火、煙、土、屋、金、石、水、湯、禽、獣、虫遁など天地人三才三十法の隠形遁法、変装術、投毒術、察気術、忍具術、盆景術、城の見取図製作法、諸国の方言風俗、催眠術、九

字結印が教えられる。それは、灼熱の岩上に骨を削り、寒夜に血をしぼる、言語に絶する荒業苦行であった。

かくして、人の心の虚に生棲し、物の影に躍る人怪、化性のものとなり得るのである。

だが、佐助だけは例外で、それら系統だった正規の修業を、殆どしなかった。

理由がある。

甲賀に来て一年余経た某日のこと。

その日も暗いうちから、油日嶽山中では、あらしこと呼ばれる下忍のたまごたちが、ぎだんの術の修業に懸命だった。いずれも、五歳から六歳になる童子で、すでに水に浮かせた紙一枚の上を歩く段階に入っている。

しかし、ただでさえ破れやすい紙のこと、水分をたっぷり吸ったその上を、破らず歩き渡ることは、至難だった。誰一人、満足に渡り切るものは、ない。

「未熟ものめが」

指導に当っている望月左源太の笞が唸り、打擲に失神するものが続出した。

左源太は、当時、甲賀随一をうたわれた名忍で、出雲守盛昌の従弟にあたる。

ずぶっ、ずぶっと紙に穴をあけては水中へ足を突っ込み、平衡を失い、不様に落ち込むあらしこたち。

あどけない笑い声が、はじけた。

いつの間に来ていたのか、佐助である。

左源太の足もとに、ちょこんと腰をおろし、大きな口をあけて、おかしそうに笑い転げている。丸い顔に、くりくり動く栗鼠のような眼が可愛い。いまだ三歳になっていない。

左源太は瞠目し、頬をこわばらせた。

甲賀随一の忍びと自他ともに許す己れの身近へ、まったく気配を感じさせず、これほど近づいたものが、今まであったか。

否。

まさしく、音なく臭いなき忍びの神髄の見事な具現であった。

それも、三歳にもみたぬ幼児がである。

一瞬の怖れは、突如、怒りに変化した。

「何を笑うかっ」

一閃した笞が、佐助を薙ぎあげた。

が、躱したとも思えぬのに、佐助の身体はそこにはなく、あとには、素早く草叢へ潜り込もうとしている黒大蟻が一匹。

まるで、佐助が、その小さな生き物に変身したような錯覚をおぼえ、左源太は頭を振った。

その間も、あらしこたちは紙を破り、水飛沫をあげるに余念がない。

——何処へいった？

左源太は視線を配った。

「あッ」

地上に投影された己れの影の左肩に……。

佐助が、いた。

笈を躱しながら左源太の死角を縫って跳ね飛び、背へ止ったものらしい。これは、のちのち佐助の得意技となる。

佐助の重さは、毛一筋ほどにも感じられなかった。

――ふ、不覚じゃっ。

悲鳴に近い叫びをあげ、左源太は佐助の足首をつかむが早いか、びゅうびゅう二、三度振り廻し、ぱっと放り投げた。

佐助の身体は、あらしこたちが、ぎだんの術を修練している方三間の溜池めがけ、毬のように飛んだ。

今しも、あらしこの一人が、紙を水面に浮べたところだった。

そこへ弧を描いて落下した佐助は、転瞬、身を立て直した。ふんわり、その浮紙の上へ舞い降りる。浮紙は、急速に水を吸っていたが、破れるどころか、そよとも動かず、佐助を乗せて静まり返っていた。

佐助の頭の金色の巻毛が、風に嬲られ、かすかに揺れた。

あらしこたちは勿論、さすがの左源太も、しばらく啞然として、佐助の小さな丸い身体を凝視した。

「――生まれながらの魔性か」

知らず、笈が、ほろり地に落ちた。

それをよそに、佐助は何ごともなかったごとく、すたすた浮紙を渡り切ると、兎でも見つけたか、眼を輝かせて、油日嶽の奥へ駆け込んでいった。

やがて、佐助も三歳の春を迎える。しかし、出雲守も左源太も、忍びの修練をせい、とは言わなかった。

佐助は、これまでと同様、相変らず、猿、山犬、鹿など山のけものを遊び相手にして、観音山、飯道寺山、岩尾山、油日嶽、高畑山を跋渉。断崖を駆け登り、飛び降り、樹から樹を跳び伝い、渓谷の滝壷に魚と戯れ、火中に横たわり、飽きると、油日嶽山頂に突き出た一朶の岩上に結跏趺坐し、数日間、禅定三昧に入るを常とした。その度に、金髪の巻毛が逆立つのが、奇怪だった。

九年が流れた。

この異様な佐助の修業を、終始ひそかに窺見していた左源太は、岩上で念を凝らしている佐助の姿が、時折、幻か霞のごとく薄れたり、或いは、不意にふっとかき消えたかと思うと、また唐突に現われたりするのを見て、目を疑った。このような隠形の術は、甲賀、伊賀はおろか、いかなる忍法にも、聞いたことがない。畏怖がふるえを呼んだものか、いつか左源太は、小刻みに慄えはじめていた。

「いかにもこの術は、天下ひろしといえども、わしの他には」

左源太の心を読んだのであろう、ある日、嗤いを含んだ佐助の声が響いた。

そして、これが、己れの念の力の作用で、遠近に関係なく、行きたい場所へ、たちどころに出没できる、空間転位の神術であることを、明かした。

「故に、術盗みしようとて、不可能」

いつもの左源太の窺伺を、岩上で振り向きもせず佐助は皮肉り、更に、公方（足利十三代将軍）義輝が、またまた三好長慶、松永久秀に追われ、京師を逃れたのを、今、目撃して来たところだ、と告げた。少し前、消えたときのことを言っているに違いない。

一刻（二時間）後、佐助の言のごとく、義輝が、近江観音寺城の六角氏を頼り、東坂本の常在寺へ入ったとの報せを受け、左源太は思わず、甲賀の守神たる摩利支天を拝した。

佐助が、如何なる堅城要害と雖も忍び入らずということなし、と讃えられ、甲賀三郎の再来と噂されるようになったのは、十五歳の夏である。甲賀流神妙の秘伝は、悉く、薬籠にあった。数年して、父印月斎（左衛門佐盛時、入道）のもとへ帰ったが、出生を慮かり、望月でなく、上月姓を称した。

しかし、その身の軽きこと猿猴もおよばぬところから、誰言うともなく、

「猿飛」

と呼び、いつしか慣いとなった。

のち、父の誼から真田弾正、つづいて昌幸の手のものとして、縦横に活躍することになる。

三

光陰移り、天正十年春三月。

織田、徳川の連合軍は、怒濤のごとく甲州の山野に押し寄せた。

その蹂躙のあとには、梅のほころぶ里も残雪をかぶった山稜もなかった。

武田軍兵士の屍体が累々と重なり、捨てられた武田菱の旗指物が、泥にまみれて転がっていた。

十日の夜半——。

すでに大半の軍勢は討たれ、或いは逃亡し、武田勝頼父子が精根まったくつき果て田野にたどりついたときには、従う家臣は十数人。あとは力にならぬ婦女子のみであった。

田野は天目山の麓、民家がたった十数戸という寒村である。しかし、この田野も、もはや敵の包囲のうちにあった。

織田の将、滝川一益の部隊が接近し、鉄砲を射ち込んだ。

「まだ小山田の援軍は来ぬかっ」

悲痛な面持で訊く勝頼の頬一面に拡がった漆黒の鬚が、ぶるぶると顫えた。

幔幕の囲いのなかに、勝頼を中心に居並ぶ家臣たちのいずれの鎧も、ちぎれ、破れ、戦いの激しさを物語っている。

じっと目をつむり、勝頼は信州小県の戸石城にいる真田昌幸の顔を思い浮べた。

――昌幸、そちの申す通りに致さば、かくの如き仕儀には至らなんだのう。許せい。

閉じた瞼から涙があふれた。

過る二月末、諏訪上ノ原に於ける軍議で、

真田安房守昌幸は、戦況が武田方に不利であることを説き、上州吾妻の岩櫃城へひとたび退き、その上で越後の上杉景勝に援けを求め、更に小田原の北条氏直と手を握る策を進言した。

秋山紀伊守、武田左馬介、浦野左衛門らが賛意を示し、跡部尾張守、城織部正、小山田兵衛らが反対した。

譜代の臣といっても昌幸は、父一徳斎（弾正、入道）幸隆に続いて二代目、いつ裏切らぬとも限らないと言うのである。

一たん決まった上州行きも、この反対でとりやめとなった。

そして結果は……。

反対の主唱者であった小山田兵衛の一党が、突如、反旗を翻したのである。

どどどっ……どどっ、滝川勢に加えて小山田勢の銃撃に、矢弾は間断なく空に呻った。

――もはや、これまで。

勝頼以下、皆が観念した。

――うむ、そうじゃ。房州（昌幸）に武田の隠し金を遺そうかい。死んでいくわしにはもう用はない。

かっと眼を見開いた勝頼は、腰に差していた黄金造りの短刀を引き抜いた。

武田の隠し金とは、多くの金山、銀山を開発した武田信玄入道が、甲武信ケ岳山中奥深く隠した莫大な財宝、軍資金である。

信玄は、その秘密を一振りの短刀に秘め、御旗、楯無しの鎧、義弘の太刀とともに武田家重代の家宝とした。

勝頼が取り出したのが、それだ。

「平太夫っ、平太夫はおるかっ」

「はっ、おん前に」

闇のなかから、ひらり一人の忍び装束の影が現われ、勝頼の足下へ平伏した。

百足組と呼ばれる武田忍び衆の透波で、満月平太夫。秘宝を隠した采配者でもある。

「これを、信州戸石城の真田安房守へ届けてくれぬか。勝頼が形見じゃと申してな」

「かしこまってそろ」

寸刻――。

満月平太夫は、闇にまぎれて武田の陣屋を脱け出していった。

が、そのあとを、ひそかに追った一つの影があった。

やはり、忍びの装束を着けている。

身体を地上低く倒した平太夫は、木陰から木陰を、つつつと拾って走った。方向も一定せず、速力も緩急織りまぜる狐走りという忍びの走法である。いかなるものも幻惑され、目で追うこ

とは難しい。

途中まで追った怪影も、遂に見失い、

「ちぇっ」

と小さく、いまいましげに舌打ちし、立止まった。

――平太夫め、勝頼から何を言いつかって、何処へ行きおったか？

不審な表情で覆面をとった。

げじげじ眉毛の、一癖も二癖もある面構えの男だ。

美濃の渡り透波、変化六平という。

平太夫と同じ百足組の組者だが、数日前より行方不明を装い、手下の下忍どもと、戦さのどさくさに盗みを働いていた。

餓狼のような鋭い視線で、平太夫の消えた闇の彼方を睨み、首をかしげた。

翌十一日。

信玄のあとを受けて日本の項羽と称された甲州の梟雄武田四郎勝頼も、織田信忠の軍勢五千の包囲のうちに、従容として割腹。

従うもの、嫡子信勝、秋山紀伊守、跡部尾張守父子、小原下総守、長坂釣干らと、それぞれの夫人たち。悲壮古今に絶する最期を遂げた。

ここに、武田家は、天目山の露と消えたのである。

四

それから更に七年経た夏。

東に奥多摩の山脈、西に金峰山、八ケ岳、南に秀麗富士の高嶺、北に噴煙漂わす浅間山を仰ぎ、武蔵、甲斐、信濃の三国にまたがり、そそり立つ甲武信ケ岳の昼さがりである。

密集する檜、椹などの木々で、昼なお暗い山中を行く山伏修験者の一群があった。

その数十一。

薄気味悪い声で啼く鳥や獣、樹上からポタポタ落ちる蛭、原始林の道なき道も気にかける様子もなく、身軽に岩を跳び、草藪を薙ぎ、熊笹を分けて進む。

いずれも無言。異様な速力で、風のように突っ走って行く。

「おっ、谷川の音ぞ」

先頭を切っていた棟梁らしい修験者が、手をあげて一行を制した。

巨大な男だ。背丈も七尺（二・三メートル）を越えよう。手足の筋骨荒々しく、すさまじいばかりの黒髭が、長い顔面を剛々しく覆っていた。鼻も高く、眼尻が逆さに裂けているのが、天狗か仁王を想わせる。

続く山伏たちが、まるで小人に見えるほどであった。

うつ伏せになり、大地に耳をつけていた一人が、立ちあがり、

「まさしく」頷いた。

ニタリ、巨きな体軀の怪修験者は笑った。きゅっと曲った唇の端に、左右四本の牙が鋭く剝きだした。いよいよ天狗である。

「竜神の滝も近いらしいの、六平」

「へい」

合点したのは、山伏姿に見をやつしているが、元武田百足組の透波、変化六平に相違なかった。げじげじ眉毛は、変っていない。

方向を見定めるや、奇怪な山伏の一群は足の速度を早めた。

やがて原始林が途絶え、明るい陽射しが、一瞬、目を奪った。

緑の照り返しが、まぶしい。

「おかしら、家じゃ」

ゆるい丘陵の向うに、小さな丸木小屋が見えた。

周囲に僅かばかりの畑が、耕されている。谷川から引いたものらしい竹筒が、澄んだ音をたてて水を落していた。

緑葉のはなつ香が、強烈に鼻を刺す。

「あれか、陽炎の小屋とは」

天狗が呟いた。

「間違いござらん」

並んで立った変化六平が応えた。天狗の胸もとにも達しない。

「真田から奪って来た宝刀の謎を、あの陽炎が知っているというのだな」

「いかにも。さもなくば誰が好きこのんで、このような山間僻地に住いしますものか。陽炎め、小諸城で武田典厩（信豊）ともども討死した夫平太夫の遺命を受け、秘宝の陰警護をつづけていることは明らか」

「なんとしても宝刀の謎につき、口を割らせねばな。だが相手は聞えた稀代のくノ一（女忍）。手強いかもしれぬ」

「風魔小太郎ともあろうおひとが、気の弱い。お前さまの妖法をもってすれば、たかが一匹のくノ一を料理するなど造作もありますまい……なんなら、わしが先ず物見を」

「やってくれるか。美濃透波の名人、変化の六平じきじきのものみとは恐縮じゃ」

風魔小太郎と呼ばれた異相の化物修験者は、唇をゆがめて四本の牙をのぞかせた。

風魔は、関東乱波として名高い。

小田原の北条氏に飼われる忍びの一党で、天正七年、駿河国黄瀬川を挟んで北条勢と武田勢が対陣した折、毎夜、浮島ガ原の武田陣へ風のごとく忍び入り、

人を生け捕り
つなぎ馬を放し
寝首を掻き
火をつけ

等々、夜襲攪乱を行ない、遂には武田勢をして、北条氏と戦いらしい戦いもさせず、敗走させた。

もとは、平安末期、大陸から流れつき、牛馬を追って山脈伝いに南下し、関東に定着した遊牧民で風魔一族というが、その縦横無尽なゲリラ活動に、風の魔物と怖れられ、それが風魔の謂となった。

小太郎は、その族長。

天文十四年六月、三歳のおり、箱根明神ヶ岳の山中で迷子となり、近くに落下した流星の怪光を浴び、全身火傷を負った。

名で示されるごとく小兵な小太郎が、異常な成育のうちに、天狗と見紛う変身を遂げたのは、それ以来のことである。

「ならば」

飛行するむささびに似た速さで駆けた変化六平は、ふわり丸木小屋に身を寄せた。

片膝をつき、耳を澄し、次の瞬間、宙に躍り、破れ戸を蹴破って、なかへ転がり込む。

同時に、寝具をはねのけ、ぱっと起きあがった者の手もとから、ひょっと放たれた黒い閃光が、危く身をかわした六平の左手首に、ぐざと突き刺さった。

「いずこの忍びじゃ」

しわがれた声が誰何した。

油断なく、六平は左手首に突き立つ手裏剣を抜いた。

武田家伝承の忍法甲陽流独特な、銀杏の葉型をした異様なものである。

伝うるところによれば、甲陽流は、武田信玄の命により馬場美濃守、山県三郎兵衛、真田昌幸（当時は武藤喜兵衛といっていた）が合議の上、僅少の者に限定して伝授した、といわれる甲州透波の秘技である。

「ほう、これはお珍しい、変化六平どのではないか」

噴く血汐を口に当てて嘗めながら、六平は床に坐って笑いかけている女を見つめ唖然とした。

そこには記憶の底に残っているあの陽炎の面影はなく、山姥といってよい老婆が坐っていた。

三十歳を、いくつも出ていない筈だった。

苛酷で長い山の暮しが、若く潑剌とした手練れのくノ一を、それまでに変えさせたのであろう。

病で伏していた様子だ。

「何用あってこの甲武信ケ岳へ」

「おお、これは失礼致した……陽炎どのも、御健在にて何より……実は」

気をとりなおし、変化六平は、あわてて懐中していた袱紗包みの黄金の短刀を取り出し、陽炎の前へ掲げた。

鞘のない抜き身である。欄の武田菱の紋章が、わずかな光を、ちらり反射し輝いた。

黄金の刀身に、

「竜神滝、杵木岩卍　水口　女陰結縄　投水開道」

の文字が、浮き彫りになって読めた。
「それは武田家滅亡の折、信州の真田安房守さまの御手に下された……」
陽炎は、ふっと暗く眉をひそめ、顔にかかる白髪を振った。
「いかにも。それがしは今、上田城におわす真田安房守家臣。天正十年来、たびかさなる北条、徳川との戦さに真田家の疲弊被い難く、竜神ガ滝の隠し金、探し参れとの安房守さま御諚にて、はるばる推参つかまつった次第」
「ならば、六平どのは真田甲賀組衆？」
陽炎の頬に嘲笑が走った。
「そもじが、秘宝の陰警護をつとめておられることも聞いて参った。案内願えますな」
六平の当推量に応えず、陽炎は、何と思ったか、無言で両掌を胸の上に組んだ。
左右の人差指と親指の指先をつけ、あとの四指は開く日輪ノ印だった。
「……」
訝しげな六平を陽炎は大きく笑いとばし、
「真田甲賀組衆なら、相の忍び印を早う見せてくだされ」
「うぬっ、痴れ者めが」
変化六平は、たじたじと後退した。
「見せられまいが……たわけ」
陽炎の欠けた歯の間から唾液が散った。

「その宝刀は、うまうま上田城より盗み来たったものであろうが、隠し文の謎が解けず、こなたへ舞い込んで来たか。笑止、笑止」
「ちぇい、小癪な戯言を」
「たとえ、その隠し文の謎を小賢しく解こうとも、わらわが居る限り秘宝は渡しはせぬぞ。まず、生きてこの小屋から出られると思うな」
言葉の終らぬうちだった。
変化六平は鋭い叫びをあげて二間を跳躍し、必殺の仕込杖を一颯した。
陽炎の姿が、縦にズズズとずれて霞んだ。
陽炎の座していた床の上へ六平は舞い降りる。
と、その六平が、
「ううっ」
と呻き、仕込杖を離すと、ぐらりよろめいた。顔中、突立つ無数の針——。
「ふふふ……甲陽流含み針の味は、いかがかの？」
天井の梁へ蝙蝠のように吸いついていた陽炎が嘲笑した。

五

「しゃらくさい真似をっ」

腰を低めた六平の手から、矢つぎ早やに、十字手裏剣が、繰り出された。
針を突き立て閉じられた右眼から血の糸が、したたっていた。
「無駄なことを」
瞬時、天井を蹴った陽炎は、猛禽が羽搏くように六平めがけ、
「きえーっ」
と躍り込みざま、懐中の鉢割刀を叩きつけた。
が、血を舞い立てたのけぞったのは、六平ではなく、当の陽炎だった。
左腕が、肩から落ちて床に転がった。
——ど、どうしたというのじゃ。己れで己れの腕を斬り落とすとは……。
斬ったのは六平ではない。
六平は、陽炎必殺の太刀風に失神し、うつ伏せに延びていた。仕込杖も、先刻離したまま、持っていない。
陽炎の鉢割刀は、たしかに六平の左肩へ打ちおろされた。それが、六平を斬らず、陽炎自身の腕を切断していたのである。
わけのわからぬことだった。
痛みも忘れ、陽炎は茫然と立ちつくしていた。心ノ臓の鼓動とともに、傷口から噴き出す血が、ばしゃっ、ばしゃっと飛沫をとばした。
怪事は、なおも続いた。

失神している六平が、延びたままの恰好で、ふわっと空中に浮び、
「おのれ！」
双眸を剝いた陽炎が、鉢割刀を手裏剣打ちするより早く、開けはなたれた戸口を、すーっと外へ飛び去ってしまったのだ。
追おうとして、一、二歩、前へ踏み出した陽炎は、片腕のない身体にバランスを崩し、ぐらりねじれるように倒れた。
どどどどっ……、丸木小屋が、突風に攫われるに似て、根こそぎ空中高く吹き飛ばされたのは、次の瞬間であった。
外では、風魔小太郎が、片手印を結んで、空飛ぶ丸木小屋を睨んでいた。
肩へ垂らした総髪が、風にあおられたごとく逆立つなかに、一握りの黄金の巻毛が、くっきり混って見えた。
天を突きあげる勢いで上昇した陽炎の小屋は、小太郎が片手印を動かすたびに、まるで意志のある生物のように回転し、飛びはね、振りおろすと同時に凄いスピードで落下し、地上に激突。木立の一角を薙ぎ倒して、木ッ葉微塵に砕け散った。
「いつ見ても、怖るべき妖法。これは人の業ではない」
意識を取り戻し、鮮血に濡れる顔面を振り立てた変化六平は、潰れた隻眼をしばたき、吐息をもらした。
「さて、そろそろ陽炎めに、道案内を願うとするか」

結印を解き、六平を見おろした小太郎の目が無気味に燃えた。
いつしかおさまっていた逆立つ髪の毛が、また、かすかにざわめいた。
「なんと、陽炎は……」
とたん、六平の顔をくまなく覆って突き刺さっていた数十本の吹き針が、皮膚に押し出されるように、一度に地上へこぼれ落ちた。
「おおよ、生きておるわい。むざむざ死なせるわけにはいかぬ。なにせ、秘宝の在処を知る唯一の手懸りじゃでの。小屋を空中にほうり投げたのも、陽炎をそこへ向かわせる方策よ」
「な、なるほど!!」
すっとんきょうな六平の驚きに、小太郎はかわいた笑声をはじけさせた。
「忍びのものの小屋に、抜け穴はつきもの。いま頃、陽炎は必死に竜神の滝へ急いでおろう。死期の迫ったものが、己れのもっとも心にかかるものへ、一歩でも近づいて、死のうとするのは、本能」
「風魔下忍衆の姿が見えぬわけじゃ。陽炎を追ってか……さすがは」
風の魔物の噂に恥じない布石であった。
杣道を、ひらひら舞うように歩きはじめた小太郎のあとに従いながら、六平は舌を巻いた。
まわりの雑木の枝々が、しきりに鳴り、山鳥の群れが騒ぎたてた。
風が強さを増して来ている。
——と、

「う」
小太郎が、何かうめいて静止した。
「隠れ身せい！」
声は足を止めた地点から聴えたが、すでに小太郎は、十数間離れた橡の木の幹の陰に蹲っていた。
いつ転身したのか、六平の忍びの修練で鍛えた眼にも止まらないほどの、驚くべき俊敏さだった。隻眼のせいではない。
——あっ。
とっさに六平は、二領楯をかぶって転がった。気息が絶え、そこに一個の岩が出現した。
二領楯とは、表柿色、裏灰色の風呂敷様の布である。
これまた、変化の異名通り、巧みな六平の変身ぶりであった。
陽炎の小屋近くに枝葉を繁らせる三かかえもある杉の梢から、風に吹かれて細かい葉が、一片、二片、三片……さらさら降った。それが地上数尺の辺まで落ちたとき、くるくる急速に廻転をはじめ、三つの小さな黒い旋風を巻いた。
その渦中に、朦朧と浮びあがる人影……。
奇怪なるかな次第に形を明確にし、黒い空気の渦が、ひたとおさまった瞬間、忽然と、ひとりの男を生んだ。
髪は無造作にたばね、粗末な袖なし羽織りを着、たっつけ袴に頑丈な太刀をはいている。

背は低く、色が黒い。白い歯と、人なつっこそうな敏捷に動く眼が、印象的だった。だが、その表情は、ときに幼く、またときには六、七十歳の年寄りにも見える変幻さを備えて、定かならない。

猿飛佐助であった。

形もとどめぬ木材の瓦礫と化した陽炎小屋に、かっと双眸を瞠き、

——まるで竜巻の通ったあとじゃ。陽炎どのは如何したか。

呟いた。

眉間に立皺が寄る。

木材の瓦礫のあいだに、ちらり覗ける血みどろの片腕。

「お」

佐助が凝視するのと、その片腕が、もぞもぞ動き出すのが、同時だった。

たばねた髪に混じる黄金の巻毛が、ばばばっと逆立ち蠢いた。

折り重なり、めり込み合った木材の隙間を何か爬虫類のように這い出た片腕は、磁石に吸引される鉄片そのまま、佐助の差し出した手へ、ひょいと飛び乗った。

「こ、こりゃあ、陽炎どのの左腕……しもうたっ。やはり、これは六平らの仕業だったかっ！遅かった……」

佐助は悲痛に呻いた。

六平が、謎の宝刀を上田城から盗み去ったのが二日前。よほど、あわてていたのか、鞘を落して逃走、それが半刻ほど前発見され、大騒ぎとなった。

佐助の統べる真田甲賀組への出仕を望んでいた変化六平が、上田城下から姿を消したのも二日前で、疑惑を増した。

六平は、もと武田勝頼の透波である。信玄の隠し金の秘密を知っており、奪う機会を狙っていたのではないか、というのだ。

佐助が急遽、甲武信ケ岳へ現われたのも、ここにあった。

——それにしても六平め、いかにしてこのような破壊を……。

眉をくもらせ、佐助はあらためて視線を、周囲に配った。

六

小太郎の推察のごとく、陽炎は、その頃、地下の抜け穴を這い出て、小屋から一丁余の渓間を流れる潺のほとりに、よろめく姿をひきずっていた。

密生する葦の根もとを洗う川面の水音が寂しい。

多量の出血に蒼白となった顔には、びっしり冷汗が玉をつくって、したたった。

——つ、つけられている……。

傷口をおさえ、ともすれば絶え入りそうになる心を、ふるいたたせて走っていた陽炎は、瞬間的にではあったが、背後に迫る緊迫感を感じとり、唇を噛みしめた。

といって、あたり一面、うるさいまでに鳴き立てる夏虫のすだきは、ただの一度も乱れない。よほどの忍びの手練れに違いなかった。

しかし、識外の識といおうか、長年鍛え抜き、研ぎすました鋭い神経は、たしかに尾行者の存在を、告げていた。

一人や二人ではない。

——六平の同類である。わらわが、秘宝の隠し在処へ行くを見越して、つけて来たか。……そうはさせぬぞえ。

会得した忍法奥儀のすべてを駆使して、あくまで阻止し、甲州透波らしい最期を。陽炎は覚悟した。

おだやかな心境だった。

地の草を擦って土の香高い窪地へ滑り込み、身を平たく伏せると、息をとめ、

——おんあにちやまりしえいそわか……

胸中に真言を誦し、隠形の印を結んだ。

一瞬の間であり、陽炎の姿は地上から、ふっとかき消えたように見えた。

——悪魔剛伏　怨敵退散　七難連滅　七復連生秘……。

完全に土を身体に溶かし込んでいる。瞠目すべき土遁の隠身であった。

気配をうかがう、耳を澄まし、鼻をきかせた。感覚という感覚が、ぴりぴり振動し、草いきれのなかの微妙な違いを読みとる。

いた……。

頷いた陽炎は、腰の袋を探り、ずるずる奇妙なものをひきずり出した。

糸でつないだ数本の小さな竹筒である。

懐の袖火の口を親指ではねあげ、その奇妙なものの先糸へ点じた。

忍術伝書には、袖火につき、

古い麻布をよく洗い晒して細く刻み、鍋炭、糊等を混合してこれを蒸焼にし、金筒に入れたるを、更に長さ五寸位の竹筒に入れ、布帛を巻き、口より火をつけて懐中す。

とある。

必要な場合は、蓋を開けて火を出し、用を達した。一度点火すれば、二昼夜は保つという。放火したり、火薬に火をつける場合、急場に間に合うので重宝した。いわゆる現在でいう懐炉であるが、ライターやマッチの役割を果した忍具といえる。

——それよっ。

眼を空に向け、地形をはかった陽炎は、いまさき感じた気配のあたりへ、火のついた奇妙なもの《石鼠》を放った。

轟っ。

一本の竹筒がはじけ、炎を発した。続いて轟っ、轟っ……。

石鼠は、つぎつぎに竹筒の火薬を爆発させ、のたうち、凄まじい閃光とともに、四方八方へとはね跳んだ。

「うわわっ」

絶叫が起り、一つの影が、よろよろ草叢から転がり出た。山伏修験者の装束を捨て、黒の忍び姿となった風魔である。

顔面を両手で覆っている。めまぐるしく飛びはね、旋回し、のたうつ石鼠の炎に、焼かれたものらしい。

思わず転身せんと腰をあげかけた、いくつもの影の姿が、樹の陰、岩の凹み、薮のなかなどに浮かびあがった。

「見たぞ！」

陽炎の掌の銀杏手裏剣が奔った。

「ぎゃっ」

「ううっ」

陽炎の銀杏手裏剣は、正確に二つの影の咽喉をかき切った。

血の霧が舞い立つ。

火薬を詰めた小さな竹筒を、いくつか導火線でつないだ《石鼠》。

敵忍の隠身を破るにつかう。

火を噴いてはね廻るこの竹筒の群れに、姿を隠しきれず、とび出してしまう。炎に追われ、或いは闇中で用いれば、強烈な火の光に、眼はくらむ。

轟っ、ひときわ激しく火柱を噴いて、石鼠は鎮まった。

静寂が来た。

他に気配は……ない。

と、思った。

ほっと吐息を洩らし、陽炎は転身していた岩陰から姿を現わした。

と、反射的に筋肉が緊張した。

地を凝視する。

まわりじゅう、びっしり撒かれた鉄菱が、鋭い棘を敷きつめていた。

——風魔か。

鉄菱の型で知れる。

あたりは深閑と静まり返っていたが、そこここに、こちらを窺っている梟のような影が認められた。すっかり包囲されたようだ。

わざと陽忍（姿を現わすこと）して見せているのであろう。

ひょうひょうと吹き過ぎる風の音が、無気味さを誘う。

——逃れようはないな。

眼の端で、身を護るべき地物を探した。

しかし、何もなかった。

ひょろっ……額をおさえた陽炎の足が乱れた。耐えに耐えていた気力が、急速に失われていくのを、陽炎は虚ろに感じとった。

膝の関節が、くたっとゆるんだ。
陽炎は、丸太ン棒のように転がった。
腕のなくなった左肩の、焼けつく疼きだけが、生きていることを思わせた。
「死なせてはならぬ」
音もなく四方から湧き、陽炎を囲んだ風魔たちは、頷きあった。
「おかしらが来るまでは」
一人が足で、陽炎の身体を、くわらりひっくり返した。
隻腕の陽炎の肉体は、何やらグロテスクな獣を見るように奇態だった。
「まこと死なせてもらっては困る。わしも、ちと用があるでの」
先刻まで陽炎が、その陰に身をひそめていた岩の上で声が起った。
ぎくと振り仰いだ風魔たちの目に、手槍をさげ、凝然と立つ男の姿が映った。
太刀を背負い、深編笠を左脇にかかえた旅侍だ。百日の蓬髪が、顔の大部分を隠し、歳も表情も読めない。
「い、伊賀の服部半蔵じゃっ」
殺気をみなぎらせ、ざざざっと散開した風魔たちのなかに声があった。
「ほう、わしを存じ寄りのものがあったか……誰じゃい」
ざんばらの蓬髪の陰から風魔たちを覗いた両眼が、蛇のそれのように、ぬめぬめと妖しく輝いた。

「風祭ノ典八だな。あれから三とせになるか、わしの主（徳川家康）が、北条氏政どのと会した折、氏政どの警護衆にまじっていた下忍だったのう」
言われ、典八は顔色を変えた。
――このおれが、左京太夫（氏政）さまの影供をつとめていたことを知るものは、頭領（風魔小太郎）しかいない筈……それを、どうして……。
「そちらは早雲ノ小市。陽炎を足蹴にしたは鷹ノ巣ノ巳之助。そして明神ノ藤三、水尾ノ孫兵衛、谷津ノ又平、足柄ノ三郎次。それに、陽炎の石鼠と手裏剣に死んだは天城ノ馬六、ならびに巳之助身うちの鷹ノ巣ノ彦十」
典八の他、誰も半蔵を知っているものはなかった。しかるに、半蔵は、すべて姓名を言い当てたのである。
「げっ」
七匹の風魔は、いまや完全に肝を奪われ、首をのばし、目をおどおどさせて半蔵をうかがった。
服部半蔵は、若冠十六歳で伊賀の忍び六、七十人を率い、宇土城を攻め落したほどの伊賀上忍。鬼半蔵の異名を持つ。
三河の徳川家康麾下にあり、今川攻略、姉川の合戦、三方ガ原の合戦、長篠の合戦、本能寺の変等々に、スパイ、ゲリラ活動を指揮、家康の耳目、手足となった。
いながらにして敵状を知悉し、扇一本で姿を消し、綱をひとりでに動かし、敵を縛するなど

の神技をもって、忍術名人とうたわれていた。
「陽炎をそのままに、退散願おうか。目ざわりだ」
半蔵は、いたずらっぽい忍び笑いを、口のなかでたてた。
「や、やはり、貴様も武田の秘宝を！」
典八の叫びは、悲鳴に近かった。
「まあな。つまらぬ考えを起さずと早々立ち去れい。おぬしらの心の中は、すべて見とおしじゃでな」
「くそーっ」
烈声をあげ、水尾ノ孫兵衛が草叢を跳ね、空に舞った。
風魔のむささび飛びだ。
必殺の鎖分銅が、横なぐりに半蔵を薙いだ。同時に左右、背後から三条の太刀風が巻き、滑空して旋回した。
風魔四方掛りといい、いかなる武芸練達の士も、これにかかったら逃れる術はないといわれる恐るべき攻撃法だった。
が、四方から襲いかかった鎖分銅、三条の太刀に、手応えはなかった。
どう躱したのか、半蔵は何ごともなかったように、相変らず岩上に立っていた。
そればかりか、その姿が、みるみるふくれ、いつしか雲つくような巨人と化していく。
「幻術じゃ、あわてるな、恐れるな!!」

そう叱咤しあいながらも、風魔たちは、しらず後へすさった。
「幻術のう、ためしてみぬか」
半蔵の言葉には、嗤いさえ含まれていた。
「な、なにっ」
「どうやら素直に陽炎を渡してもらえぬようじゃな。仕方がない。馬六、彦十のあとを追って地獄へ行ってもらおう」
巨人半蔵は、右手にだらりとさげていた手槍の穂先を、風魔たちの頭上へ、ついとむけた。
手槍が茫とかすみ、百本、いや千本にも万本にも見えて振動した。
それだけだった。
断末魔も呻きもなく、七匹の風魔の首と手足が、一斉に胴を離れ、熟した花弁が舞うごとく、ぱらぱら四方に散った。
実体の半蔵は、それを渓川を見おろす断崖の上で、眺めていた。
ぼうぼうたる埃にまみれた蓬髪をそそけだて、それに混る黄金の巻毛を、激しくふるわせて——。
五歳のとき、伊賀白樫山中で飛来した火の球の化物を、退治しようとして受けた怪熱線のなごりだった。
天文十四年六月のことだ。
渓川で風魔七人を倒すと同時に、巨人半蔵の姿が、すーっと縮まって薄れ、空中をひと飛び

すると、断崖の上の半蔵の身体に、するり溶け込み、消えた。

七

こちらは陽炎小屋。

妖しく光る佐助の眼が、変化六平の化けた石にとまった。

顔を崩し、佐助は手にしていた陽炎の隻腕を、ひょいと投げた。

「六平っ、汝の変身破れたぞっ」

ひぇっ！　二領楯をはねあげ、躍りあがって逃げようとした六平は、次の一瞬、なんともいえぬ絶叫をしぼり出し、転倒した。

「ぎゃーっ」

血の気の失せた冷たい陽炎の左腕が、いつのまにか、がっきと六平の咽喉へ指を立て、つかみかかっていたのである。

恐怖のあまり六平は、くらいついた陽炎の左腕を引き離そうと、死にものぐるいで転げ廻った。

が、引っ張れば引っ張るほど、五本の冷たい指は、強く咽喉笛をしめつけ、くい込ませた。

呼吸が詰まった。

「陽炎どのは、竜神ガ滝……そうじゃったか」佐助は、心を読んだ。

もがく六平の懐中から、金色の刀身をきらめかせた武田菱の宝刀が、ぽろり落ちかけ、佐助の手へはねとんだ。

六平は動かなくなった。

——ちぇい。

橡の木の陰に観音隠れしていた風魔小太郎は、舌打ちし、唇に手を当てた。

止めていた呼吸をもらしつつ、まるめた唇で、ふーっと風を吹いた。黄金の巻毛が、逆立った。

と、それに呼応したごとく、西の林、東の藪、南の草叢などから、ざざざっと舞い立った山鳥の大群。

「おっ」

目を剝いた佐助は、瞬間、事の重大さに気付き、顔色を変えた。

空間を、四方八方にうねうねとうねり、交錯し、乱舞し、荒れ狂う蜘蛛の糸のような眼に見えぬエネルギーの流れを、痺れるまでに脳に感じとったのである。

己れのものとは比較にならぬほど強力な念力波であった。

それが、山鳥の群れを遠隔操作している。

——なにものが!?

何処かに潜む己れと同じ超能力者の存在を、心で探り佐助は身構えた。

押し寄せる怒濤の響きに似た羽搏きの音が、重々しく被さって来た。頭上が、暗くかげった。

——そこだっ。

佐助の姿が消え、次の瞬間、小太郎の隠れ身する橡の木の梢に現われた。

「風魔小太郎……」

佐助は呼んだ。

根方に立つ小太郎の身体が硬直した。

「伊賀の猿飛か……久しぶりじゃ」

身じろぎせず、小太郎は応えた。

北条氏と真田氏の角逐のたびに、小太郎、佐助は処々であいまみえている。それをいう。

「いままで知らなんだが、おぬしにも黄金の巻毛があったとはの。これで戦場での、あの働きぶりが納得いったわ」

「ふん」

「陽炎小屋があのようなざまになった謎もな。関白殿下（豊臣秀吉）に対抗するための軍資金稼ぎか……関東の覇者北条家も落ちぶれたものよ」

己れの記憶、思考のすべてを、読み取られていることを悟り、小太郎は、とっさに、心を閉じた。

「ほい、何も読めなくなった……知られたか」

佐助は苦笑した。

「いずれにせよ、武田の秘宝を軍資金に当てようなど、無理なことよ」

「これでもか」

高く出せば五十町聞えるといわれる小太郎の声がとどろいた。

それとともに頭上に飛来して来ていた山鳥の大群が、どっと突風を巻き起した。

ごごごーっ。

あっというまもなく佐助は、吹雪のごとく降りそそぐ、何千何万とも知らぬ小鳥の羽毛の渦に押し包まれていた。

羽毛の旋風は佐助の耳目を奪い、鼻孔に貼りついて息をとめた。

羽毛のなかに没し、羽毛の塊と化した佐助は、橡の梢からぐらり転落し、地上に潰れた。

「口ほどにもない」

真っ赤な口腔をのぞかせて笑い、振りむいた小太郎の天狗顔が、次の刹那、はっと氷結した。

地上のどこにも佐助の姿どころか、あれほど舞い狂っていた無数の羽毛の一片だに、見当らなかったのである。

「口ほどにもない」

背後で、くすくす含み笑いがした。

傾いた陽が小太郎の巨軀に、ちょこんと止まっている佐助の影を、長く投じて見せていた。

「無理なことがわかったじゃろ。あきらめて小田原へ帰れやい」

言った佐助の黄金の巻毛が、くわっと怒張した。

「わ、わっ」

双眸を恐怖に瞠いた小太郎の姿が、ふいっとそこから消滅し、瞬余ののち、渺々たる大海のまっただなかへ、水煙をあげて落ち込んでいた。

気違いのように手足をばたつかせ、水面に浮きあがった小太郎は、

「し、信じられぬ――」

あえぎ、思わず、がぶっと水を飲んだ。

はるかな陸地に望める見慣れた富士の秀嶺、そして東西五十町、南北七十町に及ぶ壮大な小田原城の築地、井楼。

ここは、まさしく相模の海であった。

大小多くの船舶が、波に揺れて眺められた。

瞬きするあいだに、甲武信ケ岳から運ばれたらしいことを、小太郎は朧に理解した。

――猿飛、おそるべし。

ぞくっと背筋に戦慄が走った。

「あやつのあきれた超念力をつかわれては、何かと面倒だからな……さて、次は竜神ガ滝か」

あとに残った佐助は、へっと肩をすくめ、傍の大木の枝へ跳びあがるなり、たちまち木の葉隠れに姿を没していった。

どどどどっ……。

鳴動しつつ昼なお暗い千仞の谷へ落下する瀑布。

竜神ガ滝である。

西日を受けて滝壺に虹がかかっていた。

「さすがは武田信玄、秘宝の隠し場所としては、最適じゃな」

見おろし独り言したのは、服部半蔵だった。

虚ろな瞳を無表情に見開いた陽炎が、幽霊のごとく従っていた。

武田氏滅亡後、徳川家康が、日本一の精鋭をうたわれた武田の遺臣たちを、多く召し抱えたことは史実だ。

それら遺臣から話のつれづれに、信玄隠し金の噂を耳にした家康は、多大の興味を示し、半蔵に探索を命じた。三日前のことだった。

いながらにして千里の彼方を透視する人間レーダー半蔵が、秘宝の鍵を握る陽炎の存在をキャッチし、甲武信ケ岳へ走ったのは、それから間もない。

そして、あとはご存じの通りである。

「陽炎よ。もう一度、宝刀に刻まれてありし謎の隠し文を申せ」

半蔵の瞳の奥が、ちろちろ青白く燐光を放った。

「竜神滝　杵木岩卍　水口　女陰結縄　投水開道」

唾液の糸を唇の端にたらし、陽炎は土偶人形のように答える。

「この滝に杵木岩卍と称ぶ岩があるのか」

陽炎は頷いた。

「案内せい」

滝壺から舞い立つ霧が、時々顔に冷たくかかった。

陽も次第に西に傾きはじめている。

「早くせねば、日が暮れる」

陽炎は、飄々と先に立った。

そこは一方は底知れぬ渓、一方は剪りとった岩肌をのぞかせる滝壺の端だった。滝壺を打ち、それより更に谷間へ落ち込む三筋の瀑布は、岩壁を大きく刳って生々しい。

「卍か……」

渓に突き出る平らな杵木岩の一部に、小さく彫られた卍が、風化しかかって薄れていた。

「じゃが、これが何を意味しているのか」

「その卍の上に立ち、滝を見よ。水口が」

複雑な地形と光の作用のなせるわざか、卍の上以外では、まったく見えなかった滝壺の底が、飛び散る水しぶきにかすむ蜃気楼のごとく口をあけて、ぽっかり覗けた。

てらてら青い光を照り返す、三尺四方ぐらいの真四角な深淵だった。

そして、そのなかに半蔵は、くっきり目も覚める金塊の山を見た。気も遠くなりそうな、莫大な量の隠し金だ。

「おお」

喜びのあまり、半蔵は、忍びのものとしての心の冷静さを失い、我を忘れて岩を跳び伝い、

壺間近に降り立った。頭が、かっと赤熱して燃えていた。

黄金の巻毛を、ざわざわと逆立たせ、全身全霊の力をふりしぼり、可能な限りの念力波を、水底の金塊へ集中しようとした。

残る「女陰結縄　投水開道」の秘文を解かず、秘宝を強引に念力で吸い寄せようというのだ。

影がよぎり、念力波が乱れた。

――落ちつけ。

動揺を鎮め、再び半蔵は念を凝めた。

泡立ち逆流する水面が、さっと左右に割れ、一枚の紙片が、ひらひら舞い上って来た。

つかんで一瞥した半蔵は、大きく呻いた。

信玄公隠し金は真田家拝領のものにてそろ。よって一粒残らず上田城中へ運ぶもの也。欲しくば上田城にて見事奪われたし。いつでもお相手つかまつるべくそろ。

猿飛佐助

下手な文字が踊っていた。

「くそっ、猿飛め」

半蔵の怒りに、濡れた紙片は、ぼっと火を噴き、燃えながら水中へ落ちた。

――あの影が……。

一瞬の不覚だと半蔵は思った。

――あはははは……。

佐助の笑い声が、心に強く響いて来た。
どこにいる!?
探った半蔵の手から手槍が落ちた。
その笑いは、二十里離れた上田城から確かに伝わった来ていたのである。
水中に今の今まで見えていた金塊の山は影も形もなかった。
佐助に救われたのであろう、杵木岩の上の陽炎の姿も、消えていた。
急速に忍び寄る夕闇のなかで、半蔵は茫然と、立ちつくすばかりであった。

天文十四年六月、信州角間渓谷、箱根明神ケ岳、伊賀白樫山と、落下して来た火球が何であったか、それはわからない。
しかし、それが戦国期に於ける三人の超人を生む要因となったことは、偶然とはいえ否めない。
いまそれらの場所に立つと、かすかにガイガー計数管の針がふれるそうな。

最後の忍者——天正伊賀の乱

神坂次郎

一

隠の与次と音は、多くの伊賀の下忍たちがそうであったように、貧しい小作人の子に生まれ、五、六歳の頃から百地丹波の中忍、下神戸の小南に預けられた。ふたりはその日から、百地党の下忍としてさまざまな訓練をうけた。

ところが、身のこなしも軽捷な与次にくらべ、音の場合は見劣りがした。音は、頭の動きは聡かったが、あまりにも反応が素直で常人でありすぎた。

「音よ、この崖から跳んでみよ」

そういわれただけで音は、顔いっぱいに恐怖の表情を貼りつかせて、躰がこわばってしまうのである。

そんな音に、小南は火術をまなばせた。

映画や小説の世界に登場する忍者というのは、たいてい剽悍で、危難に直面しても瞬息の間に人外の化生にも似た秘術を展開して危地を脱するのだが、忍者といっても、忍術のすべてに長じた男が、そんなに多くいたわけではない。

たとえば、足腰はにぶくても商人や放下師に化けて敵地に潜入し、流言蜚語を放って後方攪乱するに巧みな者もおれば、毒薬にかけては天才に近い者、探索密偵に絶妙の術をもっている者も、城入りや夜襲に長じた者もいる。そのいずれもが忍びであることにかわりはない。

音の場合、火術が適していたようである。複雑な各種の硝薬の調合比も、いちど耳にしただけで忽ちそらんじ、音のつくりあげた薬玉（手榴弾）は、百地党の下忍たちの城攻めや夜襲などで凄まじい効果をあげた。

「いつものことじゃが、音やん。われの薬玉は絶妙じゃの」

雇われ戦さから帰ってくると、与次はきまって音の煙硝小屋に顔をだして喋っていく。常に無表情で他人に心をのぞかれるのを嫌う筈の伊賀者でありながら、どうしたことか与次は、音とは気が合うらしかった。音を相手に喋っていると、ほっとするものを覚えるのであろう。

「ところで音やん。ちかく信長めが伊賀攻めに繰り出すちゅう風説があるが、やってくると思うかよ？」

与次は板間に坐りこみ、音が薬玉の土器に火縄を差し込み、その上に折れ釘や鉄片を入れ、竹べらですくった硝薬をながしこんでいく手元を眺めながら、そんなことをいう。

「おもわぬな」

「どうしてじゃ」

「それァ諸国まわりをしとるお前のほうが、よう知っとるじゃろ」

「しかし、わしは来ると思うがの」

「何して？」

与次の喋りには、あまり意味がない。信長が秀吉であってもいいし、家康でも差し支えないのだ。つまり、与次は音と言葉をかわしてさえおれば気がすむのである。

「それにしても麦のやつ、どこで道草を食うちょるのか……ああ、腹ァ空った」

そういうと与次は、ごろりと板間に仰臥して、顎のはずれそうな大あくびをした。

与次の妹の麦は、いつもこの火の気のない小屋に茶を運んでくる。与次が来ているときは三人で、小屋の外の草の上にすわりこんで、稗や粟まじりのカテ飯をぼそぼそ喰うのであった。まずしい食事だが、はやくから父母を亡くした音には、その時間が愉しかった。

麦は音より五つ下の十六で、美人ではないが、少年のように快活な娘であった。いつか音は、二人で山の路を歩いていて、足をすべらせた麦の肩を抱きとめたことがあった。麦は一瞬、音の腕のなかでおびえたような表情をみせた。いまにも泣きだしそうな表情であった。ただそれだけのことであったが、音はその時の麦の顔を思い泛べると、甘酸っぱいものがこみあげてきて、胸が苦しくなる。

「遅いのう、あいつ」

仰臥したまま与次は、また、声をだした。

そのとき、小屋下の坂の道を急ぎ足でくる小さな足音がした。その足音は小走りで、なにかに追いたてられているような、切迫した感じであった。

「のろしが！」

麦は、声をふるわせた。

「お、織田の軍が攻めてくる！」

二

信長が伊賀の国に食指をのばして、すでに十年になる。

永禄十二年（一五六九）伊勢の国司・北畠具教を討った信長は、次子の北畠信雄を松ガ島城主にすえ伊勢一円を統轄させた。その当時信雄は、地侍の割拠している伊賀を抑えようとして丸山に城をかまえ、滝川勝雄をそこに据えた。ところが、これを知った伊賀地侍たちは俄かに群がり立ち、丸山城を夜襲した。その攻撃の酷烈さに堪らず、城将の滝川は城を捨て武器糧秣を置きざりにして遁走するという始末であった。

これに激怒した信雄は、みずから八千の軍兵を率いて伊賀の三方から侵入した。が、またしても手ひどい反撃にあって、脆くも敗走する。

以来、信長は伊賀を憎悪した。しかし、伊賀侍というものほど奇妙な相手はいなかった。まわりを嶮岨な山にかこまれたこの隠れ国は、甲賀まで含めても南北十里、東西わずか四、五里にすぎない。その山国に十年ものあいだ大軍を進駐させながら、織田軍は一度として勝利を摑んだことがないのである。なにしろ、勝とうにも相手には主将というものがない。伊賀は群雄割拠、この狭い地に六十ちかくの土豪（上忍）がひしめき、それぞれに屈強剽悍の中忍を従え下忍を飼い、諸国大名の需めに応じて間諜、謀略、暗殺などを請負い、その報酬でもって顎を支えているという無気味な、捉えどころのない異能集団なのである。伊賀侍は藪枯し（びんぼ

うかずら）に似ている。地下茎が長く地中に横走し、いっぽうを刈ると、いっぽうに蔓をのばす。手をつかねていると、藪をおおうばかりの勢いで群がり立つ。

「かれら伊賀者は……」と『伊乱記』にいう、

《鋭にして頑く、血気の勇を専らにして人に従うことなく、兵術を嗜み、殊に忍びの一筋励む。士農奴僕各国風として毎朝寅ノ刻に起きて午ノ刻を限り面々の家業に勤はげみ、牛ノ刻より後は軍術兵道を稽古し、別けて惻隠術（忍術）を習いて是を長練す。上代より伊賀の遺風として其の古の御色多由也より謀術を伝えて、楯岡の道順、伊賀太郎兵衛、高山次郎太郎、小串、大串、城戸なんどといえる名器のもの国中に充満して、其の流今に至るまでしのびの通力を伝え、如何なる堅城要害と雖も忍び入らずということなし。他国にても伊賀忍とてこれを重宝せり》

伊賀者は、諸国大名に雇われはするが、食禄によって家臣にならず、束縛されることを嫌った。こんな気風が信長の気にいらないのであろう。

「おのれ魑魅の類め！」

滝川、信雄と重なる敗北にじりじりしていた信長は、遂に伊賀討滅を決意し、諸将を安土にあつめ軍議をひらいた。ところが信長は、その直後、にわかに発病。数日後平癒した信長は、伊賀攻略の軍団をひきいて進発。すると、またしても発病、馬から転げ落ちるという始末であった。信長の進軍は半日でおわった。安土に引きあげてきた途端、信長の病気はけろりと癒った。これには流石の信長も薄気味悪くなった。が、それでも信長は伊賀掃滅を断念しない。

《（伊賀の国の）猛威を振う狂者を始め邪儀に募る愚族を誅殺し、根を裁ち、葉を枯し》

と鏖殺令を発し、信雄に伊賀断滅を命じた。信長の行動に妥協はない。完全主義者の潔癖をもった信長は、行く手に立ちふさがる敵に対する憎悪も酷烈で、微塵の容赦もない。

「かの地に生けるもの、百姓はおろか走獣といえども生からすべからず！」

こうして四万六千の織田軍団が出陣する。時に天正九年（一五八一）九月二日である。

安土を発った織田軍団は、三方面六手に分かれて進撃した。

伊勢地口からは、北畠中将信雄を大将に滝川一益ら一万騎。

鈴鹿峠からは、丹羽長秀ら一万四千騎。

近江口から玉滝へは、蒲生氏郷以下七千騎。

甲賀、多羅尾からは、堀久太郎秀政の二千三百騎。

長谷からは、浅野長政の一万騎。

和州笠間口からは、筒井順慶の三千騎。

三

信長の下知をうけて安土を出た織田軍団の行動は、その日のうちに伊賀にもたらされた。

「血迷うたか信長！」

「戦さじゃ、信長討伐じゃ！」

諜者からの報に、伊賀の地侍たちは激昂し、沸きたった。

このうえは寸刻の猶予もならなかった。いまに雲霞のような大軍が伊賀を押し包んで襲いかかってくるのだ。

「狼煙をあげよ！　陣触れせい！」

音と与次の二人が、山腹の煙硝小屋から百地砦に足を急がせていたのも、恰度、そのころであった。

喰代の百地砦は、遠くからみると何の変哲もない小さな山の上にある。与次たちは足早やに丸木橋をわたり、切通しをすぎた。その先は杉や松の林や灌木がびっしりと生い茂った迷路のような細い坂道である。この道は巧妙に計算されていて、登ってくる者の姿は砦から一目だが、歩いていく者には先の見当がつかない。道だと思って辿っていくと灌木の茂みに突き当ったり、曲りくねっている道を歩いていくうちに、砦への方角も距離もわからなくなってしまうという仕組みである。

ふたりが、砦の百地屋敷に着いたとき、すでに広場は急を知って馳けつけた男たちであふれていた。具足に身を固めたもの、野良布子に大刀をぶちこみシバキ（叩き）槍をかついだ者、さまざまな恰好の下忍たちが詰めていたが、誰一人私語する者もなく、砦のなかは嘘のように静寂であった。

屋敷では軍議がひらかれていた。開け放した座敷の真ん中には百地丹波、それを囲んで中忍の下神戸の小南、高山の次郎太郎、山田八右衛門といった老練の忍者たちが坐りこんでいた。

軍議は長くつづいた。その重苦しい空気は、目前に迫った信長との対決が容易でないことを、広場の下忍たちに告げているようであった。四万六千の織田軍団を迎え撃つ伊賀地侍群はわずか四千である。兵力も装備も、とうてい問題になる数ではない。鉄砲を主力として平野の大会戦に長じた織田軍が、視界のきかぬ狭隘な伊賀の局地戦で、果たしてどれだけの威力を発揮できるかという点はあるにしても、これを反撃しようとする伊賀者たちが頼みとするのは、地の利と忍びの術と、ただそれだけなのである。

しかし、いずれにしても今は、全力をふるって戦うしかなかった。すでに織田軍は目前に迫りつつあるのだ。

四

国境の六つの峠に満ちた織田軍が、喊声をあげて伊賀盆地に乱入したのは九月二十七日である。

〈伊賀の者どもを擂りつぶせ！〉

信長はそう命じている。一人も生かすことを許さなかった。織田四万六千の軍兵は、主君から与えられた虐殺の業務を忠実に遂行した。民家を焼き社寺堂塔に火を放ち、僧俗、女こどもの別なく、目に触れるかぎりの人間を手当りしだいに殺戮して進んだ。黒煙は伊賀の山野をおおい、殺人は酸鼻をきわめた。その大軍の行く手には絶叫と血の霧が噴きあがり、通過した後

の焼土にはおびただしい死骸が散乱していた。

これはもう戦さというより屠殺であった。

伊勢地口から侵入した滝川一益軍は、喰代百地砦南一里、比自岐谷に押し入り金泉寺、浄瑠璃寺を襲って火をかけ、僧を殺して火中に投じ、稚児、下男の輩にいたるまで一人漏らさず斬殺した。いっぽう、古山七郷に進撃する織田信澄の軍兵は、猪田の庄を破り柏尾村木田の砦に迫って粉砕。砦に籠る伊賀侍、竹原山城、広田新八はじめ男女老若数百を斬殺した。

しかし、これらの場合はまだよかった。悲運なのは柘植口、玉滝口、多羅尾口からの織田軍に直面した伊賀勢であった。怒濤のような織田軍団の進撃に戦慄して裏切者があらわれたのである。

玉滝村の耳須弥次郎
上柘植の福地伊予
島ヶ原村の増地小源太

である。かれらはいちはやく織田軍に降伏、帰順を申し出て、みずから伊賀掃滅の道案内に立った。このため、この方面の間道、隠し砦や婦女子幼児を避難させている隠れ所まであばかれ、織田軍の急襲をうけて潰滅した。伊賀勢は、いたるところで敗退した。

「おのれ、身の虫（裏切者）の外道め！」

伊賀者たちは歯がみした。

が、統一部隊を編成せず、族党ごとに各個に戦う習性をもつ地侍たちが、伊賀一国にあふれ

た織田軍に歯向うには奇襲、夜襲のゲリラ戦しかなかった。下忍たちは、夜陰にまぎれて音もなく陣屋にあらわれ、陣舎を焼き軍兵を殺傷し、井戸に毒を投じ、あるときは主将の首を掻こうと本陣に突入したこともあった。しかし、それだけの反撃では巨大な織田軍団を抑えることはできない。信長は伊賀攻略のために、当時の伊賀国の人口（約九万）の半分にあたる軍兵を投入しているのだ。織田軍は、侵入後わずか二日で伊賀の中心部、上野の西の長田郷、比自山に迫った。

比自山の砦には、長田七郷の百田藤兵衛、朝屋村の福喜田将監、音羽村の城戸、新堂の太郎ら十一人が旗頭となり、それに従う地侍百三十六人、角ノ坊ら法師武者百余人、下忍、雑人五百、妻婢幼女ら二千七百が、土塁を掻きあげ逆茂木をめぐらして立籠っている。

包囲軍の総攻撃がはじまったのは、九月二十九日の早朝であった。蒲生氏郷、筒井順慶、脇坂甚内、堀秀政らの軍勢は陣鉦、軍貝の音と共に武者声をあげて攻めのぼった。

ところが、喊声をまきあげ逆茂木を踏み越え躍り越えて突撃した姿が、一瞬、ひとかたまりになって草むぐらの中に吸いこまれてしまった。同時に、そのあたりから武者たちの絶叫が噴きあがった。そこには無数の底深い穴が掘られていた。落ちれば命はなかった。穴のなかには斜に削いだ青竹が贄をもとめて牙を鳴らしていた。青竹は武者たちの腿を腹を容赦もなく突き刺し、えぐった。後続の攻撃軍はたじろいだ。その途端、木かげや岩かげから凄まじい音がした。銃弾が炸裂し矢が唸り、武者たちは弾けるように薙ぎ倒された。

「わっ、伏兵じゃ！」

攻撃軍は悲鳴をあげて潰走した。

この敗走に、烈火のごとく怒った堀秀政は、その夜ひそかに、裏手の間道から攻めのぼった。奇襲に狼狽して伊賀勢は崩れたった。

「いまだ、攻め陥せ！」

勢いに乗じた攻撃軍は、揉みに揉んで攻めのぼった。その瞬間、頭上の急斜面から岩塊、大木が唸りをあげて転げ落ちてきた。

「げっ！」

伊賀軍の敗走は擬態であった。そう思ったときはすでに遅い。大石に圧し潰され、大木にはねとばされている。次々に攻め上ってくる武者たちも、後から来る味方に押されて動きがとれず、足を踏みはずして谷底へ転落していった。

——こうして九月がすぎ、十月にはいった。その朔日の夜、おりからの時雨をついて伊賀勢は、上野の南半里にある筒井順慶の長岡山本陣へ忍び寄った。

伊賀勢は浅宇田から吉富左近、久米口からは福地仁右衛門、四十九院口から山路源八と三手に分かれ、子ノ上刻（午後十一時頃）を合図に襲いかかった。

喊声もあげず足音もたてず、三方の闇の中から突進してくる伊賀勢に筒井本陣は仰天した。あわてて松明をつけようとした。が、時雨とつよい山風に吹き消されて用をなさない。暗みのなかで混乱がおこり、軍兵たちの絶叫が更に混乱を拡げた。恐怖にかられた筒井軍は、一寸先もわからぬ闇の中で敵味方の区別もなく同士討ちをはじめた。伊賀勢は、合言葉をたよりに、

敵を突き伏せ断ち裂き、血しぶきを浴びて暴れ狂った。

すさまじい夜戦であった。

そのうち、筒井の軍兵で心利いた者が八幡宮、釈迦堂に火を放った。火は、山風にあおられて忽ち社殿、堂塔に燃えひろがり、巨大な火の柱となって噴きあがった。しかし、すでに筒井軍は収拾のつかないほどに潰乱している。

〈もはや、いかぬか〉

あまりの敗北に、順慶は《タダ茫然ト、今ハ生害ノ外ニ方便ナキカ》と覚悟したほどであったという。

この時、順慶の家臣、菊川清九郎は妙計をたて、軍兵三百を借りうけている。伊賀笠部生まれの菊川は、このあたりの地形に明るい。菊川に率いられ山すそを伝って脱けだした軍兵は、箕谷、勧進ノ辻から久米にまわって伊賀勢の背後に出た。そして、手に手に松明をかかげて鬨の声をあげた。

「さては、織田の援軍が来たか」

伊賀勢は、あわてて兵をまとめ、比自山砦にひきあげていった。

本陣の夜襲で筒井軍に痛手を与えたが、伊賀勢の損傷も大きい。度かさなる合戦で、すでに半数を失い、糧米も残り乏しい。

「このうえは、砦を捨てて散ろう」

ということになった。

二日の深夜、裏山から峰づたいに逃れ出た砦の者たちは、京、大和、河内、近江路と、それぞれに知るべをたよって落ちのびていった。

いっぽう、伊賀勢の脱出を知らぬ蒲生、筒井はじめ丹羽、滝川、堀の軍は、三日の早朝、比自山の麓に兵をすすめ、水も洩らさぬ包囲陣を布いた。やがて、軍貝をひびかせ、潮鳴りのような武者声をあげながら四方から攻め上っていった。ところが、砦では物音一つしない。織田の武者たちは、

《山上静カナルトハ、伊賀ノ曲者、寄手ニ油断ヲ見スル計略ゾ、ソレ冑ノ鉢ヲ傾ケヨ、大石大木ノ用心セヨ》

と、なおも警戒して登っていった。と、砦はすでに蛻の殻で、古ぼけたお堂に鼻の欠けた木仏が一つ坐っていただけであった。

五

伊賀勢の果敢な反撃も物量のまえには次つぎに潰れ、比自山の砦が陥ちたあと、伊賀の拠点は柏原砦ただ一つになった。

柏原は名張の南一里、竜口の百地屋敷から北へ山中一里の地にある。名張の地侍たちは、ここに砦をかまえて最後の抗戦をおこなった。

柏原砦に立籠るもの柏原の滝野十郎、竜口の百地新之丞、同太郎左衛門、それに喰代から駆

けつけた百地丹波ら上忍、中忍の下神戸の小南はじめ四百三十八人。下忍では与次、音ら《間忍ノ術ヲ得タルモノ数十人》、雑人千二百余、あわせて千六百人であった。

十月八日卯ノ刻（午前六時頃）、柏原砦を包囲した織田軍の諸将、織田信澄、蒲生氏郷、筒井順慶、丹羽長秀、滝川一益、浅野長政、藤堂将監、生駒雅楽頭、糟谷内膳正は一斉に総攻撃をかけた。

柏原峠は東に山をひかえ、三方は喬木の樹林に囲まれている。伊賀勢はその大木の梢を切りそろえて高櫓を組み、その櫓の上から矢を放ち鉄砲を射ちかけ射ちかけ凄まじい反撃をした。

そんなあいだにも、樹林のなかを縫いくぐり忍び寄った伊賀者たちが、入れかわり立ちかわり突撃していく。

織田軍は悲鳴をあげた。それはそうだ。いくら矢や鉄砲を浴びせかけても、樹林にさえぎられて伊賀勢にとどかないのだ。攻撃しようにも攻撃しようがないのである。

「退け、退け！」

織田軍は、あわてて兵を退いた。そして砦を遠巻きに包囲陣を張り、糧道を断って兵糧攻めにでた。

こうなると籠城軍は不利である。砦の中は千六百の伊賀武者と、それに《妻子、童等記スルニイトマナク》といわれたほど、人であふれている。それらの一日の糧米でさえ並大抵の量ではない。

「やはり、砦を捨てるしかあるまい」

だが、足弱な女こどもを連れて脱出するのは容易でない。

伊賀侍たちは協議した。そのうち一つの案がでた。夜を待って敵の背後に出て松明をかざし、伊賀の援軍が来たと動揺するところを、砦から出た突撃隊が急襲する。で、その隙に女たちを逃がしてやろう……というのであった。

しかし、この計画は挫折した。伊賀者たちの手の内を、織田軍は読みとっていたからである。

「そのことなら任せておけ……わしが忍組でやるわ」

下神戸の小南は、配下の下忍たちを呼び集めると、懐中から見取図をとりだし、草の上にひろげた。

「皆、これをよう く目の底にいれておけ」

図は、丹羽長秀が本陣にしている簗瀬の、新三郎兵衛屋敷のものであった。

「音よ」

「へえ」

「われは、この門前の道に埋め火（地雷火）、おなじく道脇の……よいか、ここだぞ……この地蔵堂の裏に百雷銃」

「与次」

「へえ」

「われは、屋敷うち申の方の長屋に火術」

小南は、八人の下忍の名を次々によび、指で一つひとつ部署をさした。いいおわると小南は、

「出立の刻限は四ツ……くれぐれも申しておくが、事がおわれば長居はすな、てんでに他国へ逃散せよ」

四ツ（午後十時）に砦を発った音たち九人は、暗みのなかをひたひたと簗瀬にむかった。

音は、茜色の装束に闇をにじませたまま地に貼りつき、眼だけを前方のかがり火にむけていた。

あかあかと燃えるかがり火の光りは、ここまではとどかない。音は、しずかに苦無で土を掘りはじめた。やがて、その穴に埋め火を伏せ、うっすらと土をかぶせた。

埋め火は方一尺、高さ三寸の木箱の中に、火薬、鉄片、折れ釘などを入れたもので、火をつけた香を蓋の裏に取り付けておく。これを踏むと、薄板の蓋が割れて、香の火が火薬に燃えうつって爆発する仕掛けになっている。

埋め火を伏せおわると、音は地べたを這って地蔵堂にいった。

〈よし、いくか！〉

音は、腰の附竹の火を百雷銃の火縄に点けると、暗みの中を突っ走った。二十四、五間も走ったころ、音は右手の草むらにとびこんだ。

と、しばらくして爆発音がした。それはまるで十人ほどの銃手が、一斉に引き金をひいたような銃声であった。

「わっ、夜討ちじゃ！」

銃声に数人の番士たちが叫びをあげ、槍をかざして往還に走りでてきた。それが最期であった。次の瞬間、轟音と共に番士たちの肉塊が虚空に爆け飛んだ。

「出合え！　夜討ちじゃ！」

丹羽の軍兵は、悲鳴とも呶号ともつかぬ声をあげて本陣のなかを走りまわった。

火は、本陣の庇を舐め、白いけむりを噴きだしていた。すでに長屋は焼きくずれ、藁屋根の土蔵は火むらを逆だて、火のなかに跳梁する伊賀者たちの姿を焙り出した。

六

音は、走った。

もうすぐ与次も走ってくる。そして、織田軍にむかって黒つなみのように押し出していく伊賀勢のうしろから、麦もやってくる筈であった。音は走りつづけた。砦を出るとき、与次と三人で落ち合う場所をきめていた。

「竜口から大和へぬける国境の、樫の木のある薬師堂」であった。

音が薬師堂に辿りついたとき、与次も麦の姿もなかった。音は、忍び装束を脱ぐと、着込んでいた野良布子の百姓すがたとなった。そして、樫の木の根方に坐りこんだ。しばらくすると、星あかりの道を人が通りはじめた。砦から逃げてきた女や子供や、老人たちのようであった。二、三人連れている者も、一人だけの者もいる。みんな黙って、追われるような、ひどく疲れたような足どりであった。槍をかついだ者や、具足の草ずりを鳴らしていく若者もいた。

捨てかまりのお蘭

新宮正春

一かたまりの群れが通りすぎても、ふたりの姿は見えなかった。

麦が来たのは、小半刻ほど後であった。逃げてくる途中、足をくじいたのだという。

「行こうか」

「うん」

与次の姿の見えないことを、麦も訊かなかったし音もいわなかった。与次は、丹羽の本陣で死んだのであろう。音は背を向けてかがみ「おぶされ」といった。音は、麦を背にして歩きだした。音の首筋に、生あたたかいものがながれた。麦の涙であった。音は黙って歩いた。

この先、どこへ行くという目処もなかった。が、それでもよかった。音は、麦をゆすりあげた。麦の重みが音には快かった。音は、行く手をみた。夜があけはじめたようであった。

いまは廃道になったが、根来、風吹峠の旧道に沿った寒村に、薬種商を営む音川家がある。むかし伊賀から移り住んだと伝承える音川家に、赤錆びた尺余の管槍があった。管槍は穂先の短い、柄が五尺ほどにのびる携帯用の槍である。恣な推測をゆるして貰えるなら、この音川を『伊乱記』（三巻・百地織之助）に一ヶ所だけ現われてくる下忍〝音〟の流亡の末につむいでみたい。百地丹波が根来寺に逃れ住んだように、音と麦もまた、この葛城山中の里でひっそりと、薬草を採り山畑を耕し、おだやかに世をすごしたのかもしれない。

一

お蘭は、きゅっと音をたてて帯を解いた。草木染めの着物の裾が割れ、白いふくらはぎがのぞいた。

風呂場の窓から、やわらかい日差しが差し込んでいる。逆光のなかで、お蘭のふくらはぎに生えた柔毛が、ぼうっと霞んで見えた。

この春で、お蘭は数えで十八になる。

胸乳がつんと張りだし、琵琶型の腰のあたりも、このところ急に肉置きが豊かになってきた。

「腰のものをとり、洗い場にしゃがむのじゃ。そう……、こちらに向けて、もそっと腰を上げて……」

と、女あるじの千代が命じた。

声に、容赦のないひびきがこもっている。というより、人に命令することに慣れ切った声だった。

人呼んで古御館のお方さま――。

浅間の山ひだふかく入った、信州小県郡禰津村の古ぼけた屋敷の女あるじである。

かつてこの地は、信濃源氏の一族である滋野氏の領地だった。鎌倉時代には二十三家に分かれたが、南北朝になって、そのなかの望月、海野、禰津の三家をはじめ、多くは南朝方につい

た。

戦国の世となって、甲斐に姻戚の武田信玄が興り、越後の上杉謙信と信濃でたびたび戦うようになると、滋野氏は武田方に加わり、手を砕いて戦った。

一族のなかで、代々騎射の名家として知られたのが、望月の一党である。

望月六十騎といわれた屈強の騎馬軍団は、つねに武田勢の先陣をうけたまわって、敵を蹴散らした。

当主の盛時は、信玄の甥にあたり、北佐久郡にある望月城主でもあった。だが、永禄四年（一五六一）、川中島の合戦で、先頭を疾駆していた盛時は、一弾を胸に受けて討ち死した。

この盛時の室が、千代である。

千代は、名門禰津家の出で、二つ上の姉は信玄の側室となっている。それだけに、盛時が討ち死して喪が明けてから、信玄はこまごまと千代の面倒を見た。

そうしながらも、万事に抜かりのない信玄は、千代の利用価値に目をつけるのを忘れなかった。

千代に武田の諜報網をたばねさせたのである。

千代の生家である禰津家は、むかしから諏訪社を通じて伊勢山田と密接な関係をもっていた。諸国を回遊する熊野の山伏や、伊勢神宮の札を配って歩く歩き巫女たちが、前々から出入りしていた家系である。

しかも、嫁ぎ先の望月家の本家滋野氏は、もとはといえばト占の徒である。のちには、一族

のものが諏訪信仰をひろめるため国々をめぐり歩いたが、そのせいもあって他国に顔がきく。望月家そのものも、甲賀忍びをたばねる望月家と深く関わっていて、これまた上方と太いパイプをもっていた。

信玄は、やもめとなった千代に朱印状を与えて、甲斐、信濃二国の巫女頭を命じるとともに、ひそかに手の者を集めさせた。

手の者といっても、そのほとんどは若く美しい女だった。

くノ一である。

いわば、そのくノ一たちのアジトにあたるのが禰津村の古御館だった。

千代は、ここに各地から捨て子や孤児など身寄りのない少女ばかりを集め、巫女の技を仕込んだ。口寄せ、祈禱、それに木偶を祭ったり、黒犬の頭を拝んだりする呪術の法である。

巫女には神社に属し、白衣の緋の袴で舞いを奉納する女神官と、神社を離れ、厚化粧で春をひさぎながら諸国をまわる歩き巫女のふた通りがある。

千代が力を入れて養成したのは、歩き巫女のほうだった。地方によっては、ワカとか座頭とも呼ばれる売春婦で、千代は少女たちが初潮を見るころから、ありとあらゆる閨の技巧を教え込んだ。

彼女たちは、戦さの支度で騒々しい諸国の町や村へ散り、ときには城攻めの陣中へも出向いて、あらくれ男に抱かれた。

そのたびに、千代のもとには生の情報が届けられ、それがすぐさま甲府躑躅ヶ崎の信玄の居

館へと通報される仕組みだった。歩き巫女から歩き巫女へと渡る連絡のつけ方も訓練されていた。

それればかりではなく、諸国に散った歩き巫女たちは、千代からの指示で流言飛語をとばして人心をまどわしたり、敵陣に放火したりもした。

旅から帰ってくる彼女たちは、禰津村の一角にある集落でひと休みしたあと、また千代に命じられるまま、旅に出ていった。

その集落がある場所は、だれいうとなく、ノノウ小路と呼ばれていた。

ノノウ小路の上にそびえる古御館は、信玄の命によってつくられたくノ一の養成所であり、そこからすでに百人ちかい女が巣立っていた。

お蘭も、そのひとりだった。

駿河の花沢あたりの生まれらしいということだけは、千代の身のまわりの世話をしている老女から聞いたが、ふた親がまだいきているのかどうか、いっさい分からなかった。

とにかく、お蘭は物心がついたときにはもうノノウ小路にいた。

二

「お蘭、早う……」

と、千代が催促した。

女あるじがいらだっているときは、お蘭には声の調子でわかる。

齢はお蘭よりひとまわり上だが、化粧がたくみなのか、千代は齢よりもずっと若く見える。

千代は、ほっそりした白い手を桶に汲んだ湯にひたし、手拭をしぼった。

そのしぐさに、なんともいえない気品がある。気品だけではなく、同性のお蘭から見ても、目もとにぞくっとするような艶っぽさがあった。

「は、はい……」

お蘭は、おずおずと腰巻をとった。

正座したまま、わずかに腰を浮かし、上体を倒す。

「それではよう見えぬ。もそっと腰を高う上げ、足をひらくのじゃ……」

女あるじの千代の命令は、ここでは絶対である。

お蘭は命じられたとおり、荒削りの松の板をならべただけの洗い場に両手をついた。

背中を反らせて、女あるじに恥ずかしい部分がよく見えるよう、両足をひらく。

けものの体位をとったお蘭の背後に、千代は片膝をついた。

「……それでよい」

そういって、千代はじっとお蘭の秘部をみつめた。

お蘭の下腹部が、せつなげに上下した。

千代は、鼻先を秘部に近づけ、においをかいだ。

「教えたとおりに、手入れいたしているようじゃな。男をたぶらかすには、まずにおいが肝心

ぞ」

と、千代はいい、薄茶色にすぼまったお蘭の菊門を、指で撫でた。

「……それに、かたちも整えておいたほうがよい」

千代は、しぼった手拭でお蘭のはざまのひだひだを丁寧に拭った。

「あ……」

お蘭の背中が、反った。

ひくっ、と菊門がすぼまった。

鳥が喉をあけたような朱い腔口をのぞかせたお蘭のはざまからは、たったいま手拭で拭ったばかりだというのに、もうねっとりとした液があふれでている。

千代は、その液をすくいとって、においをかぎ、

「このにおいが、男衆にはこたえられぬのじゃ。風魔の好き者をひきつけるには、なににもまして、このなんともいえぬ女臭さがものをいう」

と、満足そうにうなずいた。

洗い場の軽石を二つ取り上げて、菊門のまわりの縮れた毛をはさむと、それを慎重な手つきで摺り切った。はざまのまわりに長く伸びた余分な毛も、そうやって摺り切る。

かたちを整える、というのは、毛切れをしないよう余計な陰毛を軽石で除く作業のことだった。

ひと通りその作業が終わると、千代は帯に挟んでいた貝殻を取りだした。

塗り薬を詰める貝殻である。

貝には、墨で、

竜――、

という文字がしるされている。

お蘭は、その貝殻の色とかたちに見覚えがあった。

「お館さま……」

洗い場に両手をついたままで、お蘭は顔をねじまげて女あるじを見上げた。

「……そ、それは？」

千代は、うなずいて、

「熊若が使うておった甲賀秘伝の塗り薬よ。おまえは、だれよりもこの薬の効き目をようわきまえておるはずじゃ。これを使えば、こたびの相手は、一も二もなく、おまえに擦り寄ってまいる」

確信ありげにそういった。

貝殻に入った塗り薬は、甲賀でつくられた媚薬で、女の秘部に塗り込むと、えもいわれぬ芳香を放ち、男を誘う。

もとはといえば、馬の種付けのさい、牡馬をいきりたたせるための薬であり、体温で溶けると、独特のにおいを放つ。

「すると、こたびの仕事の相手は？」

と、お蘭は息をのんだ。

甲賀秘伝の媚薬のにおいをかいだだけで、擦り寄ってくる風魔の忍びといえば、人一倍鼻が利くあの男以外にない。

「……あ、あの風魔きっての手練として鳴らした……」

名前は、あえて口にしない。

その男がこれまでこなしてきた仕事のすさまじさは、このあたりでは知らぬ者はない。名前だけでも、お蘭のような若いくノ一を戦慄させるに十分だった。

「さすがに、お蘭はするどい」

と、千代は、もう一度うなずいて、

「……もう、相手については、およその見当はついておるようじゃな」

「は、はい……」

「そのとおり、相手は風魔随一の手練、変化の馬平じゃ。あやつをおまえに仕留めてもらう」

無造作に、千代がいった。

「でも、お蘭などには、とうてい手が出せぬ相手でござります。お館さま」

と、お蘭は身じろぎした。

その背中をそっと撫でて、なだめるような口調で千代がつづけた。

「たしかに油断のならぬ相手ではあるが、この千代が手塩にかけて仕込んだおまえの腕ならば、まず仕損じることはあるまい」

「……」

「それに、馬平はおまえのここを……」

と、千代は指先を下に滑らし、かるくお蘭のはざまを突いた。

「……たれよりも早うねぶって、おまえに気をやらせたあの熊若の仇でもある。さいわい、変化の馬平は、おまえと熊若の仲を知らぬゆえ、存分に料理できるというもの」

三

お蘭とは何度も枕をかわした熊若は、甲州きっての軒猿といわれた男だった。

武田軍団には、総大将の信玄に近侍する奥近習の下に横奉行五人、耳聞六人が配置されていた。

横奉行というのは、横目付、すなわち監察役のことで、耳聞は情報収集のための忍びの者である。

他国から有能な人材を登用することで知られた信玄は、とくに諜報活動を重く見た。

甲斐は山国であり、騎兵を中心とする武田軍団の機動力を最大限に生かすには、なによりも敵の動静についての正確な情報が必要だったからである。

熊若は、かつては横奉行の山本勘助の下に使われていた耳聞で、別名を、

耳長の熊若、

といった。

文字どおり、遠国の情報を聞き漏らすことのない耳の持ち主だった。これには、ごくわずかなお国訛りから、生国を聞き分け、さらにその訛りを自在に真似できるという特技が大きくものをいった。

お蘭が閨のつれづれに聞いたところでは、熊若は甲賀竜法師の生まれで、幼いころから薬の行商で諸国を歩いた、という。

そのころ一緒に甲賀を出てきた忍び仲間が、いまは織田や徳川に雇われている。彼らとひそかに会って情報を交換するのも、熊若の仕事のうちだった。

「わしはな、お蘭……」

と、胸乳を揉みながら、熊若がふと遠い目をしたのを、お蘭は思いだした。

「……甲賀には、奪口術というて、諸国の言葉を聞き分け、そのわずかなちがいを聞きとめて覚え込む秘術があってな。竜法師の年寄りから、もう毎日のように口移しで叩き込まれたものよ」

甲賀には、望月小平太という高名な忍びの名人がいた。奪口術を修得するかたわら、反りのない忍び刀や苦無などの道具の使い方を、その小平太から教わった、とも熊若はいった。

「技、というても、わしなどたいしたことはない」

熊若は咳ばらいをして、枕元の印籠から貝殻に詰めたあの塗り薬をとりだしたものだった。

「……ただ、おなごを泣かす技には、少々の心得がある。この薬さえあればな」

と、熊若は貝殻のなかの黒っぽい塗り薬をちょっぴり指先につけ、それをお蘭の秘部になすりつけた。

手慣れた熊若の指は、すばやくお蘭のはざまをかすめ、薄桃色の固い突起となって肉の鞘から突きだしている核でとまった。

「うっ……」

そのとたん、なんともいえぬ快感に体じゅうをつらぬかれ、お蘭はするどい声を上げていた。

「すぐに、このあたりが溶ろけたように相成る」

そういって、熊若はふくれあがった核を指の腹でこすった。

「……もう堪忍してくだされ」

むずがゆいような、体の奥底から熱くなるような不思議な感覚に、お蘭はうめいた。

「この秘薬はな、お蘭」

と、熊若はゆるゆると指を動かしながら、恩を着せた。

「……齢とって、ここが乾き切った牝馬でもたちまち濡れるほどの効き目がある。人間のおなごには、もったいのうて、めったに使わぬ秘薬ぞ」

「ど、どこから、これを？」

あえぎながら、お蘭がきいた。

「これか」

熊若がいった。

「……わしは、これを伊勢の朝熊岳にある明王院さまより戴いてまいった。明王院さまのお札を配りながら、いろんな土地を歩いてほかの薬を売り、ときには医者の真似ごともするのが、わしのなりわいよ」

「よくも、そのようなしらじらしい嘘をつけるもの……」

「そうか。ついここがノノウ小路なのを失念いたしておったわ」

と、熊若は苦笑し、

「……おまえも承知しとるように、むろん、それは表向きで、まことの仕事は、耳聞よ。城や砦を固める人数とか、兵糧の多寡、それに兵馬の動きを逐一さぐりだすのがわしの本業だが、こたびはちと違う力仕事を仰せつかった」

「力仕事というと？」

「ああ。耳を使わんで、刀を振りまわす仕儀に相成るやも知れぬ」

と、熊若はにやりと笑った。笑うと、少年のような目になる。

お蘭は、そういうときの熊若がいとおしかった。

「相手は、織田どのに雇われておる風魔の連中よ。奴らが、躑躅ヶ崎の館におられる御坊丸さまを奪い返しにくる、という噂を、おまえも耳にしたことがあろう？」

「いいや……」

と、お蘭は内心、耳長の熊若の情報収集能力に舌を巻いた。

御坊丸、というのは、織田信長の五男で、遠山景任の養子に迎えられた少年である。

三方ヶ原の戦いで、信玄が織田・徳川連合軍を打ち破って、刑部の宿で年を明かしていたとき、信玄の宿将秋山信友は、景任が守る岩村城を攻め落とした。

この戦いで、景任は左脇腹を槍で刺され、苦しみ抜いて死に、捕らえられた御坊丸は人質として躑躅ヶ崎の館に護送された。

以後、御坊丸は、甲斐の山野を眺めて日を送っている。

もと地下人で、諏訪にある武田家の直轄地の収納にあたっていた諏訪春芳と、京都からきた元町人の松木桂琳という茶人が、いま交代で世話をしている、という。

もしもこの御坊丸を信長に奪い返されたら、上洛を狙う信玄にとっては最大の切り札を失うことになる――。

熊若は、その企みを阻止するために選ばれた。

「なに、こっちは風魔の奴らをおびきだすのが仕事よ。案ずることはない。これがうまくいけば、お蘭、おまえの許にももっとしげしげ通うてこられるぞ」

熊若は、たくみに指を使いながらお蘭にいった。

だが――。

それっきり、熊若は帰ってこなかった。

四

「のう、お蘭」
と、女あるじの千代がそそのかすようにいった。
「……熊若の死にざまは、それはむごいものであった。両眼を潰され、さらに……」
千代は、ちょっとためらってから、
「……口のなかには、熊若自慢の逸物がねじ込まれておった。おまえのこの柔肌が知っておる逸物をな」
「……」
「いずれも、変化の馬平がじきじきに手を下したのを示す印じゃ。つまりは、われら望月党への挑戦状……」
千代は不意に言葉を切り、唇を噛んだ。
そのこめかみに、ふとい血の管がくっきりと浮き出しているのを、お蘭は見た。
誇り高い千代には、熊若がしばしば望月家に出入りしているのを知りながら、敢えて処刑したことが許せないのだろう。それを、千代は風魔の挑戦状と受け取ったのである。
「なんとしても、馬平に吠え面かかせたい」
と、千代はくぐもった声でつぶやいた。

「……さいわい、風魔の連中の定宿は、当方には分かっておる。そこを出て躑躅ヶ崎のお館に向かう前に、馬平めを処分したい。あやつは姿を自在に変えるほか、つぶて打ちがたくみじゃ。熊若の両眼を潰したのも、馬平のつぶてに間違いない」
風呂場での調べをすませた千代は、居室でお蘭と向き合っている。
この部屋の違い棚の上には漆塗りの文箱が載っている。そのなかには、千代の体臭がしみこんだ張り形が二本、納まっている。
その一本を使って、千代みずから幼かったお蘭の破瓜をすませたのだった。部屋の畳のどこかに、そのときの血のしみが残っているはずだった。
そのころ、固いつぼみのようだった乳房も、いまは重たげに着物の胸もとを持ち上げている。
「お館さま……」
お蘭がたずねた。
「……その場所へは、ほかに男衆ではどなた様が行かれますので？」
歩き巫女として情報を集めるのとは、仕事の中身が違う。また、こういうとき、必ず何人かの屈強な手練と組ませ、単独行動はさせないのが千代のやり方だった。
「案ずることはない」
と、美しい女あるじは答えた。
「……すでに馬場美濃守さまにお願いし、手配りはすんでおる。選りすぐりの刀術の達者が三人、お蘭をそれとなく護ってくれるはずじゃ。それと、もうひとり……」

急に秘密めかした声音になって、千代は意外なことをお蘭の耳元でささやいた。
「……風魔の忍びのなかには、こちらに内通している者が何人かおるが、そのひとりが今度の甲府行きに同行しておって、その者が手引きしてくれる手はずになっている。風魔は銭の多寡で主を変える、というが、まこと、その通りじゃ」
「で、お館さま。手引きしてくれるその者の名前は？」
「花沢の十蔵……」
と、千代は歌うようにいった。
「花沢、でございますか？」
お蘭は、首をかしげた。
花沢、という言葉には懐かしいひびきがあった。千代付きの老女から、駿河の花沢という地名を聞いたのは、もうずいぶん前のことだが、とにかく、そこでお蘭は生まれたらしいのである。
「どうかしたのかえ？」
千代がきいた。
「いえ……」
ただなんとなく、気持のどこかにその花沢という言葉がひっかかっただけだった。
かぶりを振るお蘭を、よく光る眼でじっとみつめて、千代はまたしても意外なことを口にした。

「その十蔵とやらいう男が、おまえの実の父親だと申したら、お蘭はどう致す？」
「……」
「銭でおまえを売った不実な父親じゃ。いまさら親子の縁などはない。こたびの仕事で、十蔵と口を利くことがあったとしても、おまえは素知らぬ顔をしておればよい。十蔵はおまえが実の娘なのを知らぬし、また、そう名乗ったとしても、あの男は信じはすまい」
「それは、あたしがいくつのときでございましたか？」
と、お蘭は膝をにじらせた。
そんなお蘭から、つと目をそらして、
「この千代が、いまのお蘭くらいの齢であったから、二つ三つかであったと思う。おまえの母御は、そのときすでに去んでいた」
と、千代がこたえた。
「母が……」
お蘭は、鼻をすすった。
「言わずもがなのことを、つい言うてしもうたかも知れぬ。が、父御の十蔵は、おまえを捨てた愚かな男なのは覚えておいてよい」
「はい……」
「かというて、十蔵の不実を恨んではならぬぞ。風魔の一党は、その頭目である変化の馬平をはじめとして、みな十蔵のように人の情けをわきまえぬ輩ばかりと思うておくのじゃ」

銭次第で主を変え、仲間を売るのが、風魔の持ち味とすれば、頭目の馬平も、もとは駿河の今川家についていた男だった。

その後、越後の上杉家に乗り換え、功名をたてた。

川中島の合戦のさい、謙信は妻女山に陣を張ったが、馬平はこのとき、霞の段七という武田方の三つ者頭を仕留め、感状までもらっている。

三つ者、つまり信玄配下の間忍の元締でもあった霞の段七は、なんとかして馬平をおびきだそうと策を練り、山の麓にある風魔一門の宿所に矢文を放った。

「図らずも敵味方に別れてはいるが、馬平どのも飛び加藤の一門と知り、懐かしく存ずる。ついては今夜子の半刻（夜一時）ごろ、謙信公本陣登り口にてお待ちいただきたい。公の御首を戴きに参る」

というのが、霞の段七がしたためた矢文の文面だった。

馬平は、段七より一枚うわ手だった。

三つ者たちが登り口に罠を張る前に、馬平はすばやく峠道の入り口から離れた大木にのぼり、その上で待機した。

黒装束に身を固めた霞の段七と、その配下の忍び四人が、ことごとく羅切され、おのれの逸物を口にねじ込まれた姿で発見されたのは、その翌朝のことだった。

まだ息があった段七ら五人は、番卒によって飛び加藤の雇い主だった長野業正の陣屋に送られた。翌日、武田側の海津城から見渡せる河原に、槍で串刺しにされた五つの死体がさらされ

ていた。

こういうふうに相手の裏をかくのは、変化の馬平の常套手段だったが、それより、馬平という異能の忍びをきわだたせているのは、余人に真似のできない特技の持ち主であることだった。

そもそも変化の馬平の異名は、岩にも木にもなり、馬を走らせば、乗った姿が見えないところから命名されたものである。

「よいか、お蘭……」

力づけるように、千代は声をはげました。

「……馬平は、一里離れたところからでも、人が来るのを察する玄妙な力をもっているが、これとて人の何倍か鼻が利くだけのこと。隠れるのがたくみなのも、人の体臭で近づくのが分かるからじゃ。つまり、あやつを犬と思えばなんでもない。その鼻のよさが逆に落とし穴となるとは、まさか馬平も気づいてはいまい。これを使うて……」

と、千代はさっきの塗り薬をお蘭に手渡した。

「……あやつをたぶらかすのが、おまえの役目じゃ」

お蘭は、貝殻に詰められた媚薬を帯の間にはさんだ。

物心ついたころから、この女あるじの命ずるままに体を動かしてきた。それ以外のことは考えたこともなかった。

だが、熊若の無残な死にざまを聞かされ、さらに自分を売り飛ばしたという不実な父親のことを聞かされて、自分の体のどこか奥深いところで、何かが音もなく弾けたような気がお蘭に

はした。

いま風魔の一党は、上杉家から北条家へと主家の鞍替えをしていたはずだが、さっきの千代の話では、こんどは登り調子の織田家に狙いを切り換えているらしい。

落ち目の北条家を見限って、おのれの能力を織田方に売り込むには、信長が溺愛している御坊丸を奪還して手土産の代わりにすれば一挙両得、おそらく信長からもらう恩賞も、莫大なものになるだろう——。

それは、いかにもあざとい風魔が考えそうな策だったが、なぜだかお蘭は、そういうことにもうこれまでのような興味も、関心も失っていた。

五

お蘭は、いつものように歩き巫女の格好をして、ノノウ小路を出発した。

歩き巫女は、尼とは違って、黒髪を長く伸ばしている。おまけに、顔と襟足に白粉を塗り、唇には紅を引いている。

髪に、お蘭は鉄製の笄(こうがい)を二本刺していた。先端がするどく尖った笄である。

その笄を片手で押えて、お蘭は足をはやめた。

甲府をへて、右左口峠を越え、古関、本栖を抜けて駿河をめざす、いわゆる中道往還を使うことになっている。

この道は、甲州と駿州とを短距離で結ぶ重要な道路だった。

駿河へは、富士の西麓を通って吉原へ出る。若彦路と河内路の中間を通るので、中道といわれたこの道筋は、九一色衆が守っていた。

甲府から、富士講の信者のなりをした男が三人、一定の距離を置いて、見え隠れに後を追ってきた。

いずれも屈強な体つきで、腰をずしりと沈ませた歩き方だった。

馬場美濃守が手配した、という選りすぐりの刀術使いなのは間違いない。

「強そうな侍……」

千代の話によれば、風魔の一党が甲府の躑躅ヶ崎館をめざしてやって来るのも、この中道往還だった。

どこで遭遇するかも分かっていた。

花沢の十蔵からの通報によって、変化の馬平たちが駿河を出た日にちと刻限は、前もってつかんでいた。あとは、お蘭の歩度から計算して、遭遇しそうな場所を割り出せばいいだけだった。

それでなくても、馬平たちが泊まる場所があらかじめ分かっているのである。

お蘭は、急がなかった。

後に続く警護の侍たちも、急がなかった。だが、侍たちにぴったりつけられているため、お蘭には困ったことが起きていた。

途中で尿意を催しても、道べりで小用をたすわけにはいかないのである。
我慢し切れなくなったお蘭は、ちょっとした木立を見つけて、そこですばやく用をたした。
「富士講とは、うまく考えたもの……」
いまさらながら、信玄の宿将たちの悪知恵に近い偽装工作の巧妙さに、お蘭は笑いだしたくなった。
富士の西麓を通る中道往還を通るのだから、富士講の信者の格好をしていても、いぶかる人はいない。
また、仕込杖を携えていても、それを見咎められることもない。富士講に、杖はつきものだからである。
ひょっとしたら、と、お蘭は思った。
警戒厳重な躑躅ヶ崎の居館で、風魔の一党を待ち伏せしたほうが確実に捕らえることができるのに、そうはせず、少数の手練に始末させようとするのは、宿将たちの間の権力争いが絡んでいるからかも知れない。
たぶん、古御館の千代と、馬場美濃守とはなにかの利害関係で結ばれているのだろう。ふたりがこの件を自分たちだけの功名手柄に使おうとしているのは、まず確実だった。
「ああ……」
柔らかそうな草の葉を手でもみほぐし、それで下腹部を拭いたさい、いつもと違う感触に、思わずお蘭は声を出した。

千代に軽石で除毛された秘部が、外へむき出しになっているようで、それほど強く拭いたつもりではないのに、肉のひだのあたりに痛みが残った。その痛みが、古御館を出るさい、千代からあらためて念を押されたことを、お蘭に思いださせた。
「お蘭、よう聞きや」
と、千代は、こういったのだった。
「……万が一、手筈が狂うてその場から逃げねばならぬ事態が出来たら、そのときは、加勢の侍たちにあとを任せ、すぐさまここへ戻ってくるのじゃ。よいか、お蘭、たとえ侍たちを見殺しにすることになっても、気にするではない。例の十蔵も、見殺しにして差しつかえない。この千代にとって、そなたは実の娘のようなもの。そのこと、心に留めておいてくりゃれ」
さらに、こうも付け加えたのである。
「……実の父親である十蔵は、そなたにとって、おそらく殺しても飽き足らぬであろうが、そこはぐっとこらえることじゃ。よいな？」
一度どころか、二度まで「そなた」と、千代に呼ばれたのは、お蘭にはこのときが最初だった。

六

夜になって、お蘭はめざす堂宇が見えるあたりを通過した。

それは、駿河までの行程のなかばを来たあたりの村にあった。正確にいえば、村はずれの道ばたに朽ちかけている古い堂宇だった。

十蔵の通報では、今宵、変化の馬平とその手の者は、ここで一夜を過ごし、躑躅ヶ崎の館の襲撃計画を練る手筈になっている、ということだった。

先に甲府に潜入している別働隊が、躑躅ヶ崎の館の堀に沿って建っている宿将たちの居館に火を放つと同時に、館のなかに乱入して御坊丸を助け出す計画だという。

いま信玄は、大軍を率いて遠江の刑部に滞陣している。そのため躑躅ヶ崎の館は極端に手薄であり、館を守る兵も、第一線で働いたことのない若い小姓か、老兵がほとんどだった。

変化の馬平なら、堀を越えて警護の士を一撃で仆し、その衣服を剝いで警護の士そのものになりきるくらい何でもない。

お蘭は、一夜の宿をさがしている歩き巫女のふりをすることに決めていた。花沢の十蔵が、手引きしてくれる手筈だったが、もし十蔵がいなくても、なかに入り込む自信がお蘭にはあった。

「まずは、人数をたしかめて……」

お蘭は焦らなかった。

遠くから堂のなかを見透かして、話し声でおよその見当をつける。

内部にいるのは男が五人か六人、そのうちのひとりは、仲間から「猿」と呼ばれていることが分かった。

お蘭は、静かに笄を抜きだし、指の腹でするどい切っ先に触れた。

この先端には、血の管に流れ込めばたちまち神経が麻痺する毒を塗っている。

千代に仕込まれて、お蘭は三間以内ならまず的をはずさない腕をもっている。

お蘭は首を動かさず、眼だけを左右に走らせて、堂のまわりに潜んでいる者がいないか、すばやく調べた。

いるのは、甲府から後を追ってきた富士講姿の刀術使いだけだった。彼らも息を詰め、こっちの様子をうかがっている。

三人の刀術使いは、それぞれ堂から離れた木や積み藁の陰に潜んでいた。

「さてと……」

そう小声でいってから、お蘭は帯の間にはさんでいた貝殻を開け、なかから黒っぽい塗り薬を指でひとすくい取った。

その指を、ゆっくりと秘部に差し入れる。

「うっ……」

じわっと秘部の奥が熱くなり、やがて耐え切れないほどのむずがゆさが体を走った。あふれだしたものが、内股をつつっと伝わって地面にしたたり落ちた。

においはさほど強くはないが、それでも、濃密な雌の体臭が闇のなかに広がっていくのが分かる。

お蘭は、よろめきながら堂に向かって歩きだした。

堂の近くまで来たとき、不意になかからぎぎっと扉が開いた。
「何者だ！」
錆びた声が浴びせられ、その場にお蘭はこおりついたように立ち止まった。
「待て、猿……。女ではないか」
別の声があがった。
「これは、これは……。なにかと思うたら、この辺に多い歩き巫女ではござらぬか」
と、もうひとりの男が、腰をかがめてお蘭の方に顔を突き出した。
「十蔵、おぬしの知り合いか？」
錆びた声の主がきいた。
「へ」
十蔵と呼ばれた初老の男は、さらにふかぶかと腰をかがめ、
「……なかに招じ入れ、酒など注いでもろうてはいかがで？」
と、堂内の仲間にうかがいをたてた。
「それも……」
よかろう、と言いかけた猿の言葉が、途中でとぎれた。
富士講を装った一人が潜んでいる木がゆさゆさと揺れ、ついで、押し殺してはいるが、明らかに断末魔の悲鳴と分かる短い叫び声が上がったからである。
木の陰から、富士講の男がひとり、喉を押えて歩きだしてきた。

白衣の胸のあたりが、黒く染まっている。よろよろと歩いてきた男は、足が宙に浮いているのに、あたかもまだ地面の上を歩いているかのように、手足を前後に動かした。
喉が、ぱっくり裂けていた。
「あ、あれは……」
お蘭は、闇のなかを疾走するもののけのような黒い物体を、ちらっと視界の端にとらえた。
音もなく、最初の富士講の男の喉を切り裂いたものの正体が、これだった。
変化の馬平――、
もう間違いはなかった。
馬平は、堂内にはいず、いたとしてもお蘭が姿を見せると同時に、堂から抜け出て、外の木の陰に潜んでいた富士講の男を襲ったのである。
抜き合わせるひまもないほど、その襲撃が不意を突いたものだったのは、喉を切り裂かれた男の姿を見れば分かる。
と――、
積み藁の陰から、もうひとりの富士講の男が飛び出してきた。
その手に、仕込杖の刃が光った。
ふたり目の刀術使いは、何度か修羅場をくぐり抜けてきたことがあるらしく、体のこなしがすばやかった。
走ってきた余勢を駆って、いきなり堂の縁側まで跳躍し、跳んだときにはさっきまで錆びた

声でしゃべっていた猿の首をはねていた。
そのまま、返す刀で十蔵を斬ろうとした。
刹那。
鈍い物音がして、ふたり目の富士講の男の頭蓋が割れた。
脳しょうが、散った。
頭蓋を割ったのは、闇のなかを一直線に飛んできた拳大の石塊だった。
つづいて、最後の富士講の男が、堂の縁の下から不意に姿を現わした。
「参れっ！」
闇の奥から飛来するつぶてを警戒しつつ、その男はゆっくりと堂のなかに足を踏み入れた。
憂――。
仕込杖の鞘が、かわいた音をたてた。
男は、たくみに仕込杖を操り、堂内にいたあきんど姿の風魔を袈裟掛けに斬って捨てた。
「くらえっ！」
もうひとり、宗匠ふうのこしらえをした風魔は、その瞬間、忍び刀で反撃した。
忍び独特の刀法である。
斬った勢いのまま、体が前のめりになった男は、下からのすばやい斬撃を避け切れなかった。
「ちっ！」
声とともに、男の片腕が宙を飛んだ。

宗匠ふうの風魔は、忍び刀を持ち変えて、体当たりをかました。
破れ障子をはねとばして、ふたりはもつれあったまま、縁の下に落ちた。
やがて――。
あたりを静寂が包んだ。
「ほほう、なんともいえぬ佳い香りだな。え？　お蘭」
縁の下から、声が沸いた。
眉毛のないぬめっとした顔。五十がらみの小柄な男が、お蘭に向かって汚い歯をむき出した。
「……体内に仕込んだその秘薬を、このわしが知らぬとでも思うたか。望月のお千代どのも、考えが甘い」
「……」
「むしろ、そのにおいで助かったは当方よ。闇にまぎれて、この堂に近づこうとしても、においで所在が知れるわ。おかげで、このまま躑躅ヶ崎へ直行できるというものよ」
変化の馬平である。
「……それに、われらの動きをつぶさに古御館まで知らせておった諜者も、おかげで割れた。礼を申さねばならぬの、のう、十蔵」
はっ、と十蔵の背筋がこわばった。
馬平は、いわば二重の罠を仕掛けていたのである。においを振り撒くお蘭を囮に、内通者の面を割る、というのも、馬平の狙いだったのである。

「皮肉なことに、実の親娘が十何年ぶりで出会うて、出会うたそのときが今生の別れとなるとはな」

と、馬平はあざけった。

「実の娘？」

十蔵がきいた。

「知らぬが仏だの、十蔵……。おぬしはな、このわしに娘を人質に取られるのを嫌うて、生まれたばかりの子をひそかに人に預けた。預かった奴は、ほどなく別の男に売り渡し、その後もその子は転々と人手に渡ったあげく、二つのときに望月のお千代どのが育てることと相成った。知らぬが仏、というはそのことよ」

と、馬平がいった。

配下の者を信じない馬平は、風魔一党に入れるにあたって、配下からそれぞれ人質を取った。万一の離反を防ぐためである。

「お父……」

お蘭は、つぶやいた。

いまにして、出発する前に女あるじの千代がくどくどと念を押した謎が解けた。

銭で娘を売り渡した不実な父親、というのは、お蘭を奪われたくない千代の嘘だった。

「おまえが……」

眼をしょぼつかせて、花沢の十蔵は娘の顔をみつめた。

「今生の別れ、というたであろうが……」

冷ややかな声で、馬平がいい、懐中から石塊を二個、取りだした。

「さて、いずれが先かの？」

いいながら、すっとその腕を上げる。

距離は、ほぼ五間。

この距離なら、続けさまに石を投げて、ふたりの頭蓋を砕くのは容易だろう。

馬平の足が、じりっと動いた。

「に、逃げるんだ！」

不意に、十蔵が動いた。

いまにも石を投げようとしていた馬平に向かって突進する。十蔵は素手である。

「愚かな……」

と、つぶやいた馬平の顔色がくもった。

十蔵が絶望的な突進を開始すると同時に、横合いからだっとお蘭が飛びだした。

しゅっ――、

鋼色の光が、馬平の眼を射た。

とっさに、馬平は手にした石をお蘭めがけて投げた。

同時に、その眼にふかぶかと鉄の笄が突き刺さっていた。

「す、捨てかまりか」

馬平は、そうつぶやいてどうと仆れた。

体が麻痺していく前に、馬平は最後の力をふりしぼって投げた石塊が、お蘭の前額部にめり込んでいるのを見た。

天正九年（一五八一）十一月、十七歳となった御坊丸は、織田方との人質交換によって信長の居城安土城へ送還された。甲府躑躅ヶ崎には九年間いたことになる。御坊丸はその後、元服して織田源三郎勝長と名乗り、犬山城を任された。が、翌年八月、本能寺の変で信長とともに闘死した。

くノ一崩れ

早乙女貢

一

馬場は広い。江戸の市中ではやはりこれだけのものはもとめられない。紀州和歌山の城内、三ノ丸の馬場であった。大納言頼宣（よりのぶ）は、すでに初老に入っていたが、なお、矍鑠（かくしゃく）たる壮健な体軀を誇っている。その秘密は、この毎朝の乗馬にあるらしかった。

若年のころから欠かさなかった日課である。

厩には名馬が数十頭並んでいる。その日その日の気分によって、馬を選ぶ。半刻ほど馬を責め、人馬ともびっしょりと汗をかく。この汗をしぼることが、美食に肥満したからだを健かに調整しているようであった。

少々の雨や雪なら、日課をやめるようなことはない。江戸とちがって、雪は少ない。雨の多い紀州である。

その朝も、小雨が降った。夜明け前である。頼宣が自鳴鐘の音で眼をさまし、厩にまわったときは、主の意にこたえるように、雨雲は去っていた。かえって、冷んやりとした雨気が、早朝の風を一層、すがすがしく爽やかなものにしている。

「いいおしめりだな」

頼宣は近習にともなく、言った。

「はい」近習は控え目に返事をする。

徳川家康の子に生れ、暴発的な気性は、戦国の荒涼なる殺伐の余燼を曳いていてお だやかと見えても、いつ、激するかわからない。

近時、徳川家康に対して、ことごとに反感を示していることは近臣の誰でもが知っている。常時おそばに仕える者にとっては、主君の機嫌のいいことは、この上なく有難い。

もっとも、頼宣は壮健だから寝起きはいい。適度に胥ののったおもては、髭の剃り痕も青々として、鷲鼻も、濃い眉も、ぎょろりと光る眼もすべて大ぶりで武将らしい、威厳に満ちた立派な顔立ちである。狡猾な狸面の家康に似ているところは鼻梁くらいなものか。

壮大な気宇をあらわしている。自ら南海の竜と称し、南竜と署名する頼宣を容れるには、紀伊五十五万五千石はいささか狭い……。

広大な馬場も、この頼宣が充分に気を責めるにふさわしい。馬場の土は、通り雨にほどよくしめり、土埃りをおさえている。いつものように、普駈け、早駈けに二、三周したあと、調子が出てくると、荒駈けに移った。

近習たちは、馬場の東の入口に控えて御用命を待っている。馬の口取り、草履とり、太刀持ち小姓など、七、八人である。楕円をなした馬場は塵埃除けの松木立ちが周辺の土手に植えてあり、中央には那智の黒石が敷きつめてあるのも、紀州城ならではのことであった。

この朝、頼宣が選んだのは、栗毛の逸物である。荒駈けして西の端まで一気に走ると右廻りに馬首をむけようとした。

とたんに、何におどろいたか、栗毛は、はげしく嘶いて棒立ちになった。

「どう、どう、どう……なんとしたぞ」

落馬しなかったのは、頼宣なればこそである。

漸く乗り鎮めた頼宣が、はっとしたのは、ほどよく湿った土の上に、どこからともなくさらさらと砂埃りが吹きよせてきたからだ。

まだ夜は明けきらない。闇を残した土手のかげと、湿り気で、やや黒ずんだ土の上に、その砂埃りは異様に白々と見えた。

ものに驚かぬ頼宣が、手綱をとめたのはその無心に吹き寄せられたと見えた砂が、見るみる、字となったことである。

その砂文字は、はっきりと、

——ひだり。

と、読めた。それだけであった。砂埃りははたりと止んでいた。

「ヒダリ……こ、これはなんじゃ」

愕然と瞠目して砂文字を凝視する頼宣の視界に、夜気の名残りのような黒い影が、ふわりと入った。

黒いけむりが、ひとかたまりになって、そこへ吹き寄せた感じだった。影は、そこへ静かにうずくまった。無言である。

一時の驚きは、すぐにさめた。

（忍びノ者だ……）

このような大胆で、ひそかな出現は、かれら以外にない。敵ならば、目の前にあらわれることなく目的をとげるだろう。

「根来か」

〈はい……〉

「何者だ」

〈堂八にござりまする〉

声は、影から聞えない。少し離れた松の根方からも、梢からも聞えてくるようである。

が、これは、影——根来組の堂八の口から洩れ出るものに相違ない。

「江戸に潜っていたのだな」

〈はい。大事を耳にいたしましたるゆえ、急ぎもどりましてござりまする〉

「大事とは？」

頼宣は、砂文字を見た。

（ヒダリ？……）

その眼の動き、思惟がわかったように、

〈左様でござります〉

「……」

〈ヒダリ、とだけしかわかりませぬ〉

「そやつが？」

〈豆州の命を受けて、御当地へ潜入したことを突きとめましてござる〉

「ぬ！　不埒な……」頼宣の太い眉尻がびりびりとふるえて、「松平伊豆めが、おれを探りにか」

〈はい……〉

忍者には昂奮がなかった。感激も、怒りも哀しみも——そうした余分の感情のすべてを喪失しているようであった。

非人間的な克己心のもとに、はじめて忍のワザが達成するのであろう。そのワザを会得したとき、すなわち、忍びノ者として一人前になったとき、かれの感情は枯死している。その透徹した感覚は、相手の心情の動きを敏く感取する。

堂八は、主の意に応えるように、

〈ふとどきなことにござります〉

「老中づれが、余を探るとは、伊豆め……何を企んでのことか」

〈……〉

「目的はなんじゃ、そこまではわからぬか」

〈喜十らが手は尽くしておりまするが……あるいは〉

「あるいはとは？」

〈由比の一件ではないかと存じまする〉

「うむ……目をつけてか。張孔堂め尻尾を出したか」

〈いえ、豆州とても、確証を握ったわけではござりませぬ。ただ、牧野兵庫どの一件を取り上げてのことかと〉

「兵庫め！　だが、それだけで……」猪首をかしげて、頼宣は、「御用部屋の連中のなかでは、頭のきれる豆州がことじゃ。世間では智慧伊豆と噂しているそうな」

分厚な、いかにも精力的な唇を歪めて、かッと、青痰を吐いた。

「猪小才な頭で、おれを罪せんとか。して、そのヒダリなる者、当城下へまぎれこんだと？」

〈豆州の手なることは明白でござりまするが、もはや入っておるか否かは、しかとは〉

「何を愚図愚図しておる。七里目付にも厳重に達し、木戸改め宿改めを急げ」

〈御意……〉

「寺社とても目を放すな、ことに高野山は、な。宿場を洗うのじゃ」

命令して馬を進めようとするのへ、

〈ヒダリとやらの目的がたとえ、御身辺を探るにあるとしても、万一のこともござりますれば、組の者両三人、御身辺守護にお付け下されまするよう〉

「余のことなら案じることはない」

〈万一、ということもござりまする。されば、六兵衛、丹次、小弓……以上、三名をもって人垣と……〉

「わかった。去ね」頼宣は顎をしゃくった。

腹立たしいものが、胸の底から沸いてくる。不快な情報を洩らした、その男の影すら、憎いような気がした。恐いもの知らずに育った頼宣が憤激したときは家臣たちも怖れて近寄らない。

〈御免下されませい〉

堂八の影は、すーっと夜の名残りを慕うように、松の下陰へ流れた。

馬を走らせようとしてふと気がついてみると、いつの間にか、砂文字も消えていた。

二

紀州根来流忍法は、山岳宗教たる役ノ行者に発していて、その忍法のすべては神仏混淆の熱烈な信仰を基とし、したがって密教の恐るべき秘法が伝承されている。伊賀や甲賀の技巧的忍法とはかなりちがっていたわけである。

熊野三山の神秘に比すべき根来寺の伝統が破壊されたのは、羽柴秀吉の紀州攻めのときである。根来衆もとより頑強に抵抗したが、大軍をもっての猛攻には遂に、大伝法院炎上し、根来忍法は壊滅したかに見えた。

抵抗した者のほとんどを失い、僅かに、根来流を後に伝えたのは、諸国へ派遣されていた者たちである。

元和五年七月、駿府から移封されるや、頼宣は、根来衆の野にひそめる者を召抱えることにした。というのは、根来衆の本流はすでに、家康によって公儀隠密へ召抱えられていたからである。

かれらは愛染殿根来大膳、和泉坊、師一坊、無玉坊、鳴神左衛門、赤堀某など二百余人、浜松城暁水ノ間に於て家康に拝謁し、成瀬吉右衛門正一が、これを執達したという。

正一はのちの隼人正正成である。頼直の兄義直の付家老として、犬山城主となったのは周知のことだが、根来組の者は同心として大公儀の所管となっている。伊賀甲賀の同心よりは、特に一人扶持多く支給されるという厚遇だったという。

したがって、紀州内に残っていた根来の流れを汲む者とは、すでに異なっていたのである。

頼宣がかれらを召抱えたのは、別段、他意はなかった。乱世の余燼消えやらぬころ、忍者を召抱えるのは大名として当然だし、御連枝としての重責からいっても、これは西国外様雄藩への圧えとしての必然であった。

が、徳川幕府はじまって半世紀。大敵豊臣家はほろび、吉利支丹による島原の乱もあっけなく終熄して、世は泰平になってきている。

頼宣の老いてますますさかんな気性は、嘗て、明の鄭成功が、新興の清を討たんとして日本に援軍をもとめてきたとき、

「余が総大将となって、清国へ赴かん」

と言いだし、御用部屋をあわてさせたほどだった。

家康の子のなかでは、もっとも結城秀康に似ていたという。気性としては越後少将忠輝に酷似していて、本多正信などは、

「御気性ことのほか猛く……」

と、顰蹙することが尠くなかった。

それが乱世の宿命といってしまえばそれまでだが、家康ほど、実子に叛逆された男も少ない。九人の男子のうち、忠吉と信吉は二十歳そこそこで死んでいるから別としても、長子の信康に叛かれ、秀康も養父の秀吉に懐いて実父家康には叛意を抱いていたし、忠輝は謀叛を企てたという理由で配流されている。

こう見てくると、いずれも、青壮のころの子はみんな、父にこころよい気持は持っていなかったことになる。信吉、忠吉の二人の死因もおかしくなってくるが、これは確証はない。ただ、二人とも討死ではない。おもてむきは病死ということになっている。二十一と二十三である。この若さで前後して死んでいるのも、疑うに足りる。

したがって、そのころの子としては、秀忠だけが、父に忠実だったともいえる。

尾張大納言となった義直が七番目、頼宣が八番目、九番目の頼房が水戸中納言である。頼宣が気性が、荒く猛々しいのも、非業に死んだ兄たちに似ているのはしかたがない。

ただ惜しむらくは、

「遅く生れすぎたことじゃ」

本人もいい、人々にも、そう歎じた。英邁な気性は、乱世の大名としてこそ光り輝くのであって、泰平の世では、脾肉の歎を喞つばかりだ。

御用部屋が恐れたのは、そのエネルギーの向う方角であった。

その好戦的気性は、西国雄藩を圧えるにはまことに幸いで、紀伊が枢要な地であることは、

海路と熊野路からの、東漸を防ぐにある。味方としては気丈夫だが、一たん、敵にまわせばどうなるか。

御用部屋の心痛はそこにあったのである。

家康が存命なればもとより、問題はまずない。秀忠の生きているうちも、まだよかった。が、三代目となってくるとちがってくる。

御用部屋の心痛は、この家光の代からであった。頼宣から見れば青二才だ。甥っ子である。本家と分家のちがいだけで、武将としても政治力からしても、

（嘴の黄色い……）

若僧としか思えない。

それに、頼宣にはただ一人、頭の上らなかったすぐの兄尾張大納言義直が去年、死んだ。東照神君家康公のお血すじとしては、もっとも、濃い、お方ということになる。

家光にはけむたい叔父御だし、御用部屋では始末におえない存在だった。こうした本家分家の関係では、もはや、御親子の情、うんぬんで、安泰は信じられない。

（むしろ、何か起して下さるほうがよいのだ）

老中筆頭松平伊豆守信綱は、そう考えていた。

（叩き潰すなら、わしの目の黒いうちに）

家系安泰のためには、しかたがない。

頼宣の行動は、ただに気性が荒いというだけではない。公儀にわざと楯つくようなことばかりする。

城の普請を無断でしたというだけで福島正則が配流され加藤忠広も除封されるという、大々名でも、外様は意識的に取潰しているのだが、それらのあぶれた浪人を、頼宣は、どんどん召抱えているのだ。

名ある浪人を高禄をもって召抱えるだけでなく、福島浪人の村上彦右衛門義清には総軍の武者奉行仰付けらる、と聞えては、故意に御用部屋に挑戦しているとしか思えない。

（取潰せるものなら、やってみろ）

頼宣の態度は、そう言っているように見える。

その上に、伊豆守たちが、前から注目していた浪人軍学者の由比張孔堂正雪が上方をまわって、大納言頼宣に目通りしている。

伊豆守が放った忍者の報告では、

「お墨付を賜わったようでございます」

という。これも、御用部屋にとっては聞き捨てならぬことだったのである。

山師といわれ、素性知れぬ浪人の由比張孔堂の門弟は三千人を号している。かれの軍学に心服している旗本大名は尠くない。

御親藩たる紀州殿が師弟の礼をとったという噂が伝わると、待っていましたとばかり、牛込榎町の由比道場前に駕を連ねる大名旗本が増えたものだ。

伊豆守が、ただ苦々しい思いというだけで済まされなく感じたのは、家老牧野兵庫頭長虎の訴人の一件であった。牧野兵庫は六千石を賜わる家老職で、頼宣の寵厚かったが、堀部某と争論あって頼宣の裁断をこころよからず思い出奔し、京に隠れた。

そして松平伊豆守にあてて、頼宣卿には陰謀のきざし有之――と訴人に及んだのである。

伊豆守も、こう表立っては、隠しておけないから、一応、頼宣に知らせてきた。驚いた頼宣は、すかさず呼びかえすと田辺へ配流にしてしまった。去年十一月のことだ。表面は、伊豆守も訴人の件を信じないふりを装っていたが、内心、手をまわして探索していたのであろう。

伊豆守の手ノ者が、紀伊に潜入、それもヒダリ、と名までわかったのは、やはり手がらといわねばならない。

三

「――ヒダリ……」

と、六兵衛が呟いた。鼻の頭に皺を寄せて、

「名前かな？」

「ウム、そうであろ」

と、丹次が答えた。小兵である。五尺に足りぬ。髪が赤茶けているが、名前はそのゆえではない。二十歳くらいにも見え、どうかすると四十過ぎにも見える。

「名だとすると、珍妙だの」

「そうもいえぬさ、昔、そんな男がいた」

「ほう」

「百年ばかし、前だな。伊賀にな、居たという」

「ヒダリ、か」

「名だとすると……妙だな、姓かな、名ではあるまい、姓であろ、左という字を……」

「当て推量は忍びノ道ではない」

六兵衛は鹿爪らしく言った。

「ま、名でも姓でもよい。ともあれ、ヒダリというやつが御城下へ潜入してきておるということじゃ、小弓よ」

「あい……」

「そのヒダリ――誰が耳にしてか」

「十内どの」

「ふむ……豆州の口からか」

「あい」

「仔細は？」

「――伊豆守が屋敷に忍び入り、老中方との話を洩れ聞いた由にござります」

「ヒダリ……とだけか」

「お話の途中に、伊賀同心に嗅ぎつけられて……果てましたれば」
「ウム。それだけしか伝え得なんだわけか」
「そうらしいの」と、丹次がうなずいて、「堂八どののもとへ戻ってくるのが精一杯だったらしい。あと一言、聞きたいところよのう」
「服部半蔵が支配下の同心どもに、ヒダリ、とやらの名は？」
「聞かぬ。百年も前の名人の名をけがすのを恐れてのことであろう」
「いないか？」
「いない」
二人は顔を見あわせ、それから、どちらからとなく、うすら笑いを洩らした。
名なぞ、どうでもよかった。要は、そやつを見つけ、とらえ、目的を阻む。それだけだ。
「目的は？　殿のお命か？」
「いや」と、丹次が眉をぴくりとさせた。「豆州の懸念は、御謀叛のことよ、牧野兵庫訴人の一件の裏づけをするためであろう」
「殿が御謀叛？　ばかな」
「おぬしが否んでもはじまらぬ。あちらでは疑うているのじゃ」
「根も葉もない」
「そうかな」
「おい。きさま、何を言う」

「どちらとも、しれぬ、と申しておる。先年由比張孔堂がまいったとき、お墨付を下されたとか下されぬとか……」
「ウム。そんな噂があったな」
「その真偽をたしかめるのが目的であろう、万ガ一、徒党御謀叛の証拠でもあれば……御家はどうなるか」
「まさか」
「何がまさかじゃ、御謀叛など……」
「いや、いかなることがあっても、御三家ゆえと」
「さて……そのことは智慧伊豆に聞くが早いわい」
「ともあれ、御身辺を守ることじゃナ」
「いのちに代えてもじゃ。われらは、そのために奉公しておる、忍びのワザをもって」
「安いお扶持でな……」
「きさま！」と、六兵衛は、くわっと眼をむいて、「左様なことを申してよいのか」
「悪けりゃ、やめるわさ」
丹次はしょぼしょぼと眼を伏せた。
「たとえお扶持は安かろうとも、われら一同、殿の恩寵を蒙っておる。安い高いなど、言えたことか」
「言わぬよ」

「二度と口にするな」語尾が低くなって、「小弓がいうのならわかるがな……」

六兵衛はふりかえった。小弓はさっきから黙って爪を噛んでいた。

四

頼宣の気性は荒かったが、単純豪快な戦国の武将によくある型で、根は淡泊であった。内政に就ても、重箱の隅を楊子でせせくるようなことはしない。家老や奉行に些末のことは一任して、大まかな手綱だけをとっている。頼宣の治世は蓍聞だった。大君言行録をはじめとして、祖公記、南陽語叢、紀士雅語など古文書に、頼宣の英邁な言行が窺える。

何しろ五十万五千石という大藩だからかれの善政が必ずしも末端まで行きわたらない。

小弓の名を聞いたとき、

（聞きおぼえがある名だ……）

と、思ったのは事実である。が、それ以上に、興味を引くことはなかった。

幕府のお定めでは、百石に一人、という士分の制限があるが、ざっと数えても五千人という大世帯だ。石高のほかに、山と酒を持つ紀伊は裕福である。小者まで入れると、一万人内外の家来がいる勘定になる。末端までとても覚えきれるものではない。

忍者の名なども、堂八ほか四、五人しかしらぬ。おおむね、それで用は足りた。小弓の名を聞いたとき、ふと記憶の糸がひっかかったが、あえてたぐり寄せる必要も感じなかったのであ

る。

三人は本丸御殿の御寝所の近くで、外敵に備えることにした。

「そのほうらに見張られていては、ろくろく眠りもならぬ」

と、笑った。

たとえ、伊豆守の黒い手〝ヒダリ〟が入ってきても、頼宣を害するなどとは信じられなかったのである。

頼宣は四十八歳になっていた。当時としてはすでに初老である。矍鑠（かくしゃく）とはしていたが、さすがにあのほうは連夜というほどではなかった。

その夜も、一人で寝た。

中一つ置いて、常のように近習が宿直番で警戒している。たとえ、御国夫人と同衾することがあっても、当時はまだお添寝番などの、野暮な大奥作法は確立されてない。

ぐっすりと熟睡した頼宣が眼をさましたのはまだ暗いうちだった。健康な体軀は、眼ざめが早い。かれは庭へおりた。伊豆守の忍者のことはすっかり忘れていた。

まだ、乗馬の時刻には、少し早いようであった。池のあたりを散策しながら、政治のことを考えるのは、楽しい。

その足がふと止った。奥庭の中仕切にした建仁寺垣越しに巨松が見え、その梢に、猿のような影が見えたのである。

「何やつ！」

無礼な、と思ったときは、小柄を指にはさんでいた。

豪毅な頼宣である。近習らを呼ぶより早く、小柄は唸りを生じ、朝霧を裂いてその影に飛んでいる。

影はよろめいた。サーっと、おちてきた。小柄は、命中したとも見えなかったのである。

二丈ほどの高みから、ふわりと風を孕んだようにゆるやかに、頼宣の前に舞いおりた影は、

「おたわむれを」

と、片膝ついて、小柄を差し出したではないか。必殺の手裡剣をあざやかに受けとめていたのである。

「そちは……」

唖然たる頼宣の前で、影は、頭巾をはぎとった。白いおもてが、闇の中に浮んだ。

「小弓とやらか……」

「はい」

「知らざったぞ」

「――御手練のほど、恐れ入りましてござります」

手裡剣のことを言うのだろう。

「いま少しのところで、撃ち落されるところ、胆が冷えましてござります」

「受けとめたのは、みごとじゃ」

「いえ、袖止めにござりますれば」

と、筒袖をあげてみせた。二ノ腕すれすれに裂けていた。それにしても、巧みである。頼宣は内心、舌をまいた。

あらためて、この女忍を見ようとした。堂八の命令で、三人が拝謁したのもこの庭先だが、ほとんど一瞥したきりだったのである。

暁闇はまだ暗く、夜明けには間があった。女忍のおもてが、仄白く浮いている。はっとするほど美しかったのである。頼宣はあやしむように見た。異常な興味が、壮軀の四肢に客気をみなぎらせて、わいてきた。

「まいれ」と、頼宣は先へ立った。

戸を立てると、寝所は、夜の裡にもどった。

雪洞の絹地を透した柔らかい灯りのもとで頼宣は女忍小弓をあらためて、見た。

この場の雰囲気のせいもある。

金屏風といい、香炉といい、厚い褥といい、御三家にふさわしい豪奢、そのものである。香は、寝所の休らぎよりも、嬌めいた好奇心を煽る作用をしているようであった。この豪華な調度のなかで、黒ずくめの忍者装束はいかにもそぐわなかった。

その場ちがいな姿が、かえって頼宣を刺戟したのである。いうなれば、下賤の忍者を、寝所へ入れるということがすでに常軌を逸している。充足した壮軀がそれをもとめていたとすれば、これはやむを得ない。

いうまでもなく、女忍とても装束は男のそれである。黒ずくめの男装、その腰つき、胸のあ

たり、異様な、嬌めかしさ、一種、妖しい美しさが匂う。男装の麗人という言葉がある。M過剰の女性が男装するとき、女姿では隠されていた、あるいは隠れていた女らしさが、かえって匂い立つものだ。

頼宣は恐畏してうずくまっている小弓に異常な情感をおぼえた。忍ノ修業のきびしさが、小弓の筋肉のひきしまりかたを想像させてあまりあった。

「小弓」と、暫しの沈黙ののちに呼んだ声はかわいていた。

「近うまいれ」

「はい……」と、答えたまま動けぬ。

「許す。近う……」

「は、はい……」再三の上意。拒みようはない。小弓はするすると前へ出た。

「もそっと近う」

そのときはもう、隠しようもなく頼宣のおもては紅潮し、双眸はうるみ、熱を帯びた唇はわなわなとしていた。

小弓は、あえてさからわなかった。頼宣に抱きすくめられると、女忍の身を忘れ、一人の小娘に還って、膝をかたくし、

「お許し下さいまし……」と、抗いを見せた。

手ひどいものではない。スリ抜けようと思えば女忍の身、いつでもできた。それをせず、尋常の娘のような、恐怖と困惑と、哀愁をあらわに、かなしくもがく姿が、一層、男心をそそるものだということは、充分知っていた。

「愛いやつ……」

顔を仰向かせると、唇を合わせた。

両手が女体をまさぐり、勘どころをさがしながら、唇は女の甘い唾液を吸いたてていた。

花の紅唇は、男の分厚な唇にすぽりとかくれてしまうほど小さい。しなやかに腕が突っ張り、ひきしまった腰がうねって、軽い抵抗をつづけるのが、大納言頼宣には、ますます新鮮な感じだったのである。

完全に抱きすくめてしまうと、女のからだは、もう逃れようとはしなかった。欅肉の唇と舌の愛撫に応えて、大胆に舌がわけ入ってきた。しなやかな白い手が、強靱な革鞭か何かのように、頼宣の首にからんで、弓なりにそったからだは、おどろくべき粘着力で男のからだにまといついてくる。

これまでに何人の女を抱いたか数知れぬほどだが、こんな積極的な行動に出た女ははじめてであった。

誰もが——大納言の身分、御三家の権威におびえ、悚々として、終始コチコチに固くなっているのが多い。大納言頼宣の豪毅さは、その意味で、女を畏怖させ、真の男女の交りを知らなかったとさえいえる。

小弓は、よく撓う、蛇のようなからだで、男の腰に肢をからめていった。不思議なのは、その行為のうちに、たっつけ袴がいつしか紐を解き、ずりさがって、筒袖の前がひらき、半ば裸

身となっていたことであった。

目くらめくような情念が、頼宣をとらえていた。おのれの手が、紐を解いたのでもなく、あえかな春草をかきわけた意識もない。

舌がひき千切れるばかりの応酬と、甘い心地よさは、まだそこに至らなかったはずである。が、すでに、女は男を容れている。

ほどよく湿潤した女体の肉襞は、喜悦にふるえおののいて、裸根を迎えていた。さしたる時間を要さぬ、須臾の後に頼宣は、血をしぼりとられるような快美の呻きをほとばしらせている。

その声は、庭の地虫たちの耳にも聞こえたのであった。

その少し前から、庭前には地虫が忍び寄っていた。一は屋根から怪鳥のように舞いおり、一は池中から、ぽかりと浮びあがったのである。

どちらから呼んだのでもなく、招きあったわけでもない。屋上からおり立ったのは六兵衛、池から出たのは丹次。二人は顔を見あう近さにくると、にやりと眼を笑わせた。

〈——こりゃどうじゃ〉

〈なんとな……〉

忍び声が、そんなことを言った。おどろきが、そんな慨歎でしかあらわれなかった。

〈殿も、お好きなことよ〉

〈この由、堂八どのへ……〉

〈ウム、お知らせせにゃなるまい。が、まあ急ぐこともない〉

〈様子を……〉

〈小弓には悪いが、見ねば〉

〈掟がある。敵の胸元へ入るは、肌を許すも否めぬ。が、これは〉

〈さりとて……殿じゃ、小弓も否めまい。苦しいところよ〉

〈見ざったか〉

と、丹次の眼は、いまの立場を忘れた男の執拗な輝きをちらりと見せた。

〈小弓め、姿をあらわしたとき、殿の心を誘う淫ノ気を放ったぞ〉

〈まさか〉

〈いや、おれには見えた〉

〈おぬし……目の誤りじゃろ〉

〈いや、見た〉

と、丹次は退かぬ。ふわふわと、六兵衛は忍び笑いして、

〈惚れたな、汝れは〉

〈う……そ、そうではない。忍の役目に忠実なだけじゃ。たしかに小弓の素振り、女忍として、許されぬ仕儀〉

〈小弓を左様な淫奔だと思うのかい〉

〈おぬしは知らぬ。江戸では若衆歌舞伎の色子と遊んだりしておるぞ〉
〈ほ……〉
これは、たしかに初耳だったのである。
〈すんでのことに、掟によって死なせるばかりであった。が、改心したゆえ〉
〈許したのか〉
〈うむ。いささかの手がらもあった。豆州の屋敷から、紀州家に関する覚え書などを写しとってきたりしたゆえ〉
〈なるほど〉
〈ヒダリ、のこともあって、御身辺大事ゆえこちらへまわされた……堂八どのの真意は、やはり江戸へ置きたくないのであろう、江戸は誘惑が多すぎる〉
〈若衆か……〉
六兵衛はにたりと眼をほそめた。
〈いつまでも小娘と思うていたが……のう、丹よ。小弓の姉を覚えているかい〉
〈――忘れた〉
〈へ、真弓のことぞ、汝は惚れていたくせに〉
〈忘れたと申しておる。忘れねばならぬことじゃ〉
〈あ、そういう意味か。……殿もお忘れになってであろうな。真弓は殿が勢州で鷹野遊ばされた折りに、手籠めになされ、それがもとで井戸に身を投げて死んだ……〉

「よせ！」
はげしく、丹次は遮った。思わず、尋常の声が洩れたのである。
はっとしたが、屋内までは聞えなかったらしい。屋内からは、はげしくからまりあった男女の息使いが洩れてくるばかりであった。
丹次はおのれの心の乱れを愧じながらも、六兵衛の無駄口を憎む気持が強かった。
〈くだらぬことは言うまい。もはや十年も前のことを〉
〈十年、なるほどそんなになるかなア……が、さ、何年経っても、小弓にはたった一人の姉のことじゃ、忘れられまいに〉
〈じゃから、昔のことを、何をいまさら。十年一昔と申す。いつまで昔のことをくよくよ思うて何とする〉
〈忘れたかな、小弓が〉
〈忘れたろ、まだ七つ八つのことじゃ。それに真弓は女忍ではなかった。ただの山伏の娘。根来の流れは汲んでいたが……環境が違えば、過去は忘れられる〉
〈そうかのう、女の姉妹というものは、男にはない睦まじさがあるゆえ……〉
〈よせというのに〉
〈わかったわかった〉
〈こうしている間に、ヒダリとやらが近づいているかもしれぬ〉
〈外廻り、見てくるか。汝は〉

〈おれもゆく〉

丹次には、惚れた小弓の、あらわな痴態を連想させる息づかいは、聞くに耐えなかったのであろう。

地虫二匹。暁闇のなかを散った。

その気配は、小弓がすでに感じとっている。頼宣が生れてはじめてといいたいほどの恍惚のなかに沈んだあと、はだけられた着物をあわせ、袴をなおして、身支度をととのえるや、床の千鳥棚にすり寄った。

螺鈿高蒔絵の手文庫がある。小弓は手をのばした。蓋をあけて、中をあらためた。失望が、おもてにひろがった。

五

その後、丹次も六兵衛も、小弓の姿を見ることができなかった。小弓は和歌山から消えた。紀伊のうちのことなら、目の届かざるところない忍者の組織をもってしても、小弓の行方は杳としてわからなかった。

忍者たちの憶測は、

「姉のことを思いだしたのであろう。先に姉が殿のお手を拒んで死んだにも関らず妹がお褥を濡らす廻りあわせを愧じたのであろう」

そう見る者が多かった。

「いや、姉のことを怨んで、殿に危害を加えんとして果さなかったのかもしれぬ」

と、見る者も中にはいた。

その説はしかし、納得されなかった。豪毅とはいえ、頼宣は小弓の肌に溺れている。交媾の余裕からいえば、小弓に分がある。況や女忍である。刺す気ならば、充分、できたはずであった。

小弓が、立ち去ったのを頼宣は知らない。情に溺れて陶酔におちたあと、何があったか、何を言ったかも知らない。ただ、言えることは頼宣が身に一創も受けていないことであった。

小弓が肌を許したことは、むろん他の家臣たちの耳には入らなかった。忍者たちは、おのれのなかまの恥を洩らす者は居なかったのである。

もっとも苦しんだのは堂八であろう。謎の忍者ヒダリを警戒することと、女忍の謎の失踪は、重くかれにのしかかってきた。

その二つとも謎を孕んだまま、春は爛けていった。

頼宣の日常には格別の変化はなかった。頼宣にとっては、一女忍の失踪は、さしたる意味ではなかったようである。むろんあの夜の目くらめくような歓喜を、ふたたび望む気はあったが、失踪したとあればしかたはない。女に不自由する身分ではなかった。

ヒダリ、の影も、一向にあらわれなかった。

あの話は聞き違いでないかとすら思わざるを得ないほどであった。二月の半ば、彼岸桜がほころびるころ、頼宣は出府した。

この慶安四年は卯年だから、紀伊家は参勤交替で出府の年にあたる。三月と定っているのをひと月早くしたのは、将軍家光が病に倒れ重態だという知らせを受けとったからであった。家光が死んだのは二タ月あまりの後、四月二十日である。二十九日という説もある。

幕閣は狼狽した。

まだ家光は死ぬ年齢ではなかった。幕府はまだ三代目、泰平がもたらされたといっても天下には反徳川の気風が残っている。外様大名などもいつ叛旗を翻すかわからない。

三代というのは怨念の限度だという一般の常識からいっても、祖父の非業の怨みを抱いている者が尠くないわけである。

加えて、家光が後の将軍に比べて、英でていたせいもある。誰もが信頼し、依存していた将軍が突然死ねば後継者の選択に迷うのは当然であろう。西ノ丸の家綱はまだ十四歳にすぎない。

幕閣がいかに困惑したかは、家光の死を固く秘して発表しなかったことでもわかる。その日時の長ければ長いほど、幕閣の当惑のほどを示すものだ。

いつまでもしかし隠しきれるものではなかった。

一般に発表したのは三か月も過ぎてからである。が、千代田城内の騒然たる出入りは、世間に洩れずにはいない。機会を窺っていた由比張孔堂正雪が動きだしたのは、この三か月の間であった。

※

慶安四年辛卯四月二十九日大猷院殿過させ給ひて。某七月江戸にて浪人由井正雪叛逆をたくみ。紀伊大納言殿の仰と称し判形を似せ謀書を所々に遣し。丸橋忠弥芝原又左衛門以下数百人徒党し。御鉄炮の薬蔵の奉行川原重郎兵衛も是に与し。埋火にて遠くより火をさし徒党の者ども船にて海上に出る時。薬に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに。心替りしたる者三人有て訴へ出あらはれしかば。丸橋をはじめ生捕られ。正雪は駿河宮の町にて自害しけり。右の謀書を数通浪人どもの許に有ける故大臣集りて一大事と案じ煩ひ。とかく頼宣卿を殿中へ召して此書を出す外有べからず。其時様子あしかりなんには直に捕へ申せとて。くっきょうの兵をかくし置て出仕を待居たりしに。尾張中納言光友卿水戸中納言頼房卿も出仕有。此事を告申けるに尾張中納言何条かかる企有べきや是謀書にてあらんとなりしに。水戸中納言もいかにも左候ひなんとぞ宣ひける。されども各手に汗握る処に頼宣卿出仕有て座に付き給ひしかば、井伊直孝酒井忠勝松平信綱此度浪人どものたくみの次第を申述たる処に、阿部忠秋かの状を披露しけり。

頼宣卿残らず見給ひて気色うちとけて、返す返すも目出度こそ候へ。もはや何のおそるる事も候はず。其子細は彼の徒党の面々外様大名の判を似せ謀書を作りたらんには。三代の御恩を忘れもしや気ちがひて謀叛を企るとの疑も有べきに。我等が判を似せたる故事故なく治りたるなり。幼き公方の御身にてもし御疑ひもあらんには、我等只今国さし上げ、いかにも仰に従ひ奉るべし。天下安全にてこそあれと悦び面にあらはれて見えしかば。両公をはじめ一同に感じ誉ぬ人もなかりければ……。（常山紀談）

究境を機智できりぬけた頼宣は、丸に虎の印形を偽物でおし通したのである。が、内心、忸怩たるものがあった。由比正雪をして天下の争乱を起させ、頼宣がこれを鎮めて、将軍の権を掌握しようとした深謀によるものであったろう。

ただ、不審は、かれが捺印署名したお墨付は一通だったにもかかわらず、寸分違わぬ同じものが十二通も出てきたことである。かれは、それらの丸に虎の印が、まごうことなき本物であることに愕然とした。

署名のほうは明らかに偽筆。だが、印形は？　松平伊豆守が、かれのこじつけた詭弁に反駁しなかったのは、むしろ、十二通も同じものを見たゆえである。いかに頼宣が野心があるにしても、これほどの危険を犯すことはない。一通しかなかったら、頼宣の立場はもっと悪いものになっていたろう。真正の一通は、由比正雪が所持していたのである。切腹の直前に焼き捨てている。

疑問は没収された十二通であった。

思うに、これこそ、小弓の手になるものではなかったろうか。あの夜、小弓は正雪の密謀の証拠を捜した。それがないと知ったとき、この企みが湧いたに違いない。虎の印を奉書に捺し、江戸へ舞いもどって、正雪に売ったのであろう。浪士の糾合には、御三家の一たる大納言頼宣の印形は絶対であった。欣然として正雪がお墨付を模写したことは想像に難くない。

小弓の怨みは、ただに頼宣を刺すだけではあきたりず、紀伊五十五万石を地獄の道連れにしようとしたのではあるまいか。

頼宣とその血族の根絶が目的だったと思われる。だが、その目的は前述のように、印形の乱捺と頼宣の機智によって、崩れ去った。僅かに、小弓が慰むべきは、四代将軍に立った家綱が幼少のため、という理由で、頼宣が向う十年間、江戸に足止めを啖ったことである。大公儀不信の評判を起すことなく、頼宣を自縄自縛させた松平伊豆守信綱はやはり智慧伊豆の名に背かない。

真綿で首をしめるようなこの結末にさらに、紀州忍者のあがきを示すものは、半年ほど後伊豆守の上屋敷門前に、一人の女の死体が転がされていたことである。

女には首がなかった。

一糸まとわぬ裸身は、まだ若く、美しく、肉がしまって一片の贅肉もない。一点、弥次馬の興味を引いたのは、左の二ノ腕の内側に小さな短冊型の文身があったことである。黒枠のなかに、〝めノ九番〟と朱で彫られていた。

むろん、屋敷の者がすぐに取り片附けてしまったが、この噂は、ぱっと江戸中にひろがった。伊豆守の隠密であろうという噂がひとしきり町人たちの好奇心を満足させたが、町奉行所のお達しが出て、噂はやがて弾圧された。由比正雪の乱のことさえ、忙しい江戸っ子が忘れはじめていたその暮れのことであった。

めノ九番が、小弓だったかどうかはいまとなって知る由もない。が、私怨のために伊豆守の走狗となった小弓に合致する点が尠くないようである。断片的な情報の伝えた（ヒダリ）の意味も頷けるのである。

脱走

南條範夫

一

会議の席上には沈鬱な空気が停滞していた。問題の重大さが、出席者すべての心を重く押しつぶして、明快な結論を口に出させないのである。

七手組を代表して出席していた速水甲斐守は、後架にゆくため、そっと座を立った。広間の正面の障子は盗聴者防止のため、広く開け放してある。

速水は背を伸ばして長廊下を歩いた。左手の庭の巨きな石を一面に覆っている苔の濃い緑色が頭の一部を切り裂くような鋭さで目に浸みた。

――少し疲れたな。

何気なく右手に視線を移した。

広間の背後は納戸になっており、そこに通じる細い畳廊下が、庭の明るさとは対蹠的に、暗く、洞穴のように内部に向って長く伸びていた。

――あ。

と、速水が思わず足を止めた。その暗い畳廊下の奥に人影が動いたように感じたからである。

速水は、小走りにその方につき進んだ。

つき当って左に折れる角まできたが、誰もいない。左手の先に時計の間がある。そこまで行ってみたが、人影はなかった。

戻ってくる途中で、急に表情をこわばらせた。納戸の戸が少し開いているところがある。その隙間から人の声が聞こえた。広間で話している人たちの声である。

——ここから、盗み聞きができるのだ。

急いで家臣たちの詰所である遠侍にゆき、腹心の矢川勘兵衛を呼んだ。

——広間裏の納戸に怪しい者がひそんでいた。至急手配せい。

充分に手配りを命じた上、用を足してから広間に戻った。

会議は、それからも一時間ほど続いたが、結論はついに出ないままに終った。

「郡どの、しばらく」

速水は、皆と共に退出してゆこうとする郡主馬を呼びとめた。郡は、城内の警備の総責任者である。

——会議の模様を盗聴されたようだ。

という速水の言葉に、郡はきびしく顔をゆがめた。

結論はまだ出ていないとはいえ、討論の内容が関東方に知られることは拙いに決っている。関東方からの無法な要求——秀頼か淀殿が人質として江戸に在住するか、大坂城を明け渡して何れへか国替えをするか——を、やむを得ぬものとして受け入れるか、断乎拒絶するか、これが問題であった。

受け入れれば、豊臣家は完全に徳川家に臣従することとなる。拒絶すれば、家康は大軍を率いて大坂城を囲むであろう。

——屈服か、抗戦か。

その決断は容易に下せなかった。だが、いつまでも未決のままで過ごす訳にはゆかぬ。

——明日は、最後の決をとる。

今日の席上で、そう決定したのである。

「明日は、会議の席を変更し、万全の措置をとりましょう」

郡は、そう約束した。

遠侍に赴いた速水は、勘兵衛を呼んで、捜索の結果を訊ねた。

それらしき人影はついに見つからず、他に見た者もいないという。

「いや、確かに何者かいたのだ。明日は、郡どのの方でも充分の計画をするとの事であったが、その方も油断なく見張ってくれ」

「畏りました」

忠実な、勤勉な家臣は力強く受合った。

翌日の会議は、千畳敷で行われた。

千畳敷と呼ばれる大広間のある御殿は、東西二十五間、南北二十間という巨大なものであり、四面を広縁に囲まれているから、盗聴者の近づくことは至難である。

四方を開け放して、この千六百五十平方メートルの建物の真中に、十人足らずの者が首を集めて小声で話合うとすれば、話の内容が盗聴されることは、先ずないであろう。

列席者は、前日通り、織田有楽斎・大野治長・大野治房・木村長門・薄田兼相・渡辺内蔵

助・郡主馬・速水甲斐・細川讃岐らである。

はげしい議論が交わされた揚句、夕刻近くになって一応の決定が下された。

――関東方に対しては、なおこの上とも陳謝弁明の方法を講ずること、但し、その一方、開戦に備えて城の修築、食糧武器の購入、諸大名浪人衆への働きかけを強力に行うこと、というのである。

最終的に屈服する意思はない。せいぜい時を稼ぐために、陳弁恭順の態度をつづけよう、そしてその間に抗戦準備を固める。

「武備恭順――とでも言うのかの」

有楽斎が力のない声で言うと、みんなが、苦い笑いを洩らした。

「では、表面はあくまでも、下手に出て、平謝りに謝って、何とか条件をゆるめて貰うように嘆願するのだから、みなその積りで、行動して頂くことにしましょう」

大野治長が、そう言って会議の終結を宣言した。

千畳敷御殿の東側の梅林の方で、大きな声があがり、人が疾走し、怒声が走ったのは、それから一時間ほど後のことである。

郡主馬はすでに千畳敷の警備をといていたが、勘兵衛はひそかに見張りをつづけていた。そして、その効果があったのだ。

陽が落ちて、あたりが薄暗くなってから、千畳敷の東側梅林に伏せておいた見張りが、御殿からそっと忍び出てくる男をみつけ、追跡し、格闘し、逮捕したのである。

二

速水は引立てられてきた曲者を、じっと見詰めた。かなり頑強に抵抗したのであろう、顔にも手足にも傷を負い、血が流れていた。

「こやつ、御殿の装束の間から出て参りまして、お廊下からお庭に飛び下り、御梅林の中にかくれようとしたところを、見張りの三名でひっとらえたのでございます」

勘兵衛が報告した。

装束の間は、千畳敷御殿の東北の隅にある小さな部屋である。そこから二階に上れるようになっていた。

しかし、二階は会議の始まる前に何回も調べ、人気のないことは充分に確かめた筈だ。

――どこにひそんで、何をしていたか。

きびしく問い詰めたが、曲者は固く口をむすんで答えない。

速水は勘兵衛に燭台を持たせ、装束の間に行ってみた。

詳細に調べてゆくうちに、刀のこじりで押した床の間の天井の板が、動いた。

勘兵衛に目くばせする。

勘兵衛はすぐに、その天井板を外し、天井裏に飛びついた。

会議の行われた大広間の中心まで、何の障害もなく這ってゆけた。

曲者は、会議の開かれるよりずっと前に、ここから天井裏にもぐり込んでいたにちがいない。
速水は、詰所にかえり、再び曲者を目の前に引き据えさせた。
「千畳敷の天井裏にひそんでおったな、何もかも判っておる」
曲者は、ちらっと速水を見上げ、ふてぶてしい声で答えた。
「判っておるなら、聞かぬがよい」
「こやつ！」
勘兵衛が曲者の腰を蹴った。
速水はそれを目で制止した。
「誰に頼まれたのか」
「そんな事を言える筈はなかろう」
「ふん、しぶといの、痛い目に会うぞ」
「覚悟の上だ」
全く天晴れなものだった。
縛りあげられ、吊るされ、叩かれ、石を抱かされたが、頑として答えない。
左手の指先を、一本ずつ、金槌で力一杯にぶん殴ってつぶした時、何度か失神したが、それでも自白はしなかった。
「早く、殺せ」
と、呻いただけである。

速水は郡主馬に来て貰った。
郡は、警備の手ぬかりにひどく恐縮し、速水に何度も礼を言ったが、曲者の顔をしげしげと見た上、
「どうも見た事のない顔ですな。城内の者なら大抵、どこか見覚えているのだが」
と、首をふった。
「明日、こやつを、桜門の前で曝し、見覚えのある者に名乗り出るよう布告しましょう」
翌日朝、曲者を曝しものにすると、即座に、何人か名乗りでてきた。すべて、七手組の一人、青木民部の部下である。
——かの者は、先月、われわれの組に入って参ったもの、田付源太と名乗っています。
と言う。
「青木の組下か」
郡と速水は顔を見合せた。
速水にとっては同僚であるが、かねてから信用していない。関東方に買収されているのではないかという噂もあった。
現在、駿府に赴いている。
関東の受けが良いというので、選ばれて、陳弁使者として駿府の家康の処に行ったのだが、どういう訳か駿府にとどまったまま、未だに帰って来ない。
家康に軟禁されているのだともいうし、青木自身が、帰城を望んでいないらしいともいう。

「やはり、民部は――」
「さよう、噂通り駿府に内応していたのでしょうな」
「あの田付源太という奴は」
「民部が東下する前に、自分の組に入れ、城内の様子を探らせることにしたものと思われますな」
「伊賀者？」
「かも知れぬ」
「ほかにも、まだいる筈」
「それは勿論」
「もう少し、きゃつを叩いてみよう」
郡が加わって、改めて訊問が行われた。
「田付源太――青木民部の組下だな」
曲者は、目でうなずいた。
「民部に命令されたのか」
「ちがう」
源太は、はっきり否定した。
「民部どのは道具に使われただけだ、おれをただの足軽と思うて傭い入れただけだ」
「ふん、感心に主を庇うか」

「民部どのは、主ではない」
「では、まことの主人は誰か」
「しつこいな、言えぬと言うた筈」
「ほかにも、この城中に、仲間はいるのであろう」
「さあ、どうかな、いるとしても、それはそちらで調べること、おれは知らぬ」
ふてぶてしいというか、憎たらしいというか、散々に痛めつけられたことが少しもこたえていないような態度である。
――よし、死ぬほどの苦しみを与えて、どうしても白状させてやる。
勘兵衛が闘志を燃やした。
足の甲を鉄釘で貫いた。
右手の指を二本まで焼いた。
耳を切り落とした。
だが、答はいつも一つであった。
――早く殺せ。

三

源太は牢に放り込まれた。

痛みは全身をくまなく走り回り、気も狂うほどである。喉が渇いて、息も苦しい。
「水、水をくれ」
と、何度も訴えたが、厚い格子の外の牢番はそっぽを向いて返事もしてくれない。
二刻（四時間）経って、牢番が代った。
「水を――くれ」
だめとは思いながら、もう一度、頼んでみた。
新しい牢番は、あたりを見回し、そっと水を汲んできてくれた。
「忝（かたじけ）ない」
と、うめき声で礼を言うと、牢番は鍵を外して、牢の中にはいってきた。
懐中から塗り薬をとり出して、傷口に塗ってくれた。
「お主、どうしておれに――」
牢番の顔を見上げたが、全く見覚えのない顔である。
牢番は一言も答えずに、格子の外に出ると、また鍵をかけた。
翌日は一日中、放っておかれた。
その間に、親切な牢番は、二回、見張りを受持ったが、その度に傷の手当をし直してくれたり、食物や水を呉れた。相変らず無言のままであったが、夜になってやってきた時、交代の少し前に、初めて、
「何か欲しいものはないか」

と聞いた。
源太は、少し考え、対手（あいて）をちらっと見上げて、
「くり（栗）が欲しい」
と言った。
「そうか。やっぱり」
牢番はうなずいた。
くりは、いが（伊賀）を意味した。伊賀者が同じ仲間に対する符牒である。
「仲間なら、助けてやらずばなるまい」
「助けられるか」
「何とかやってみよう」
「お主に迷惑をかけては済まぬ」
「いや、おれもそろそろ逃げ出そうと思っていたところだ、一緒に逃げよう」
「お主はここで――」
「どの位の食糧と火薬が集められたかを調べていたのだ、大体の見当はついた」
「いつ、逃げる」
「お主、歩けるか」
「大丈夫だ」
「よし、では、明方、寅の刻（午前四時）おれの交代の時に」

「頼む」
「それまで、あの隅に丸まって、呻いているがいい」
くりの仲間は、交代で消えていった。
源太は、痛みに堪え兼ねるように、呻きつづけた。事実、痛みはまだ酷烈であったが、脱走の希望がその痛みを大きくやわらげていた。
むろん、安心はしていない。
あの牢番がどんな方法で脱出させるつもりか分らないが、この巨大な城の中から外に出ることは容易な事ではないだろう。
うまく外に出られたとしても、どこへ、どうやって行くのか。この打ちのめされたからだで果してあの男と一緒に逃げ了せることができるかどうか分らなかった。
だが、とに角、やってみるより他はない。
くり仲間のやってくるのを、一心に待ちこがれた。
七ツ（午前四時）を報らせる拍子木の音が、牢の外に響いた。
牢番が、交代した。
頭を少しもちあげ、灯りの下にくり仲間を認めた源太は、格子の方に寄っていった。
「できそうか」
「やってみる。本当に歩けるのだな」
「うむ」

仲間は、あたりを少し歩き回った上、鍵を外し、源太を牢の外に出した。
「これを着ろ」
黒い衣裳を用意してきていた。
「おれについて来い」
牢に沿って北に走った。
牢は本丸東側の一段下った帯曲輪にある。
北の行止りが石垣で、それをよじ登ると、山里丸に出る。樹々が深く、人目にはつきにくい。
豊国廟の背後から井戸の前に出た。
「濠を渉るぞ」
くり仲間が囁いた。
この辺り、濠は最も狭く、十二間（約二十四メートル）ぐらいだ。
石垣に縄がとりつけてあった。
そいつを伝って、音のしないように、水の中にはいった。
濠を泳ぎ渡って、対岸の石垣にとりついたが、高さは七、八メートルある。
疲れ切ったからだで、それをよじ登ることは不可能と思われた。
「そこにしっかり摑まっていろ」
仲間は先に独りで、石垣をよじのぼっていったが、間もなく、上から綱を垂らしてくれた。
あらかじめ、その辺りにかくしておいたらしい。

源太はその綱を腰に巻きつけ、上から引っぱり上げて貰った。
本丸からは脱出できたのだ。
辺りは真暗やみ、見咎める者もない。
仲間の後について、よろめきながら走りつづけた。
もう一度、水濠を渉った。
「大丈夫か」
「大丈夫だ」
「もう、あそこが、大和川だ、川に舟が用意してある」
仲間がそう言った時、銃声がとどろき、人々の走ってくる足音が聞こえた。

四

「伏せろ」
くり仲間が叫んだ。
源太がつきのめるようにからだを前に倒すと、仲間は同じように前に伏せながら、首をあげて、銃声のした方を窺った。
龕灯(がんどう)が遠くに光り、その光が大きく揺れているのは、その灯を手にした者が、こちらに向って走ってきているからだろう。むろん、銃を持った者も、一緒に走ってきているにちがいない。

「おい、先に川の方に走ってゆけ、おれがここで食い止める」
「おれだけ逃げる訳にはゆかぬ」
「ばか、お主がいては足手まといなのだ、先に行ってくれ、大丈夫、あとからゆく」
「すまぬ、行くぞ」
「川っぷちについたら、これを吹け」
小さな笛を手渡された。
源太はちょっと躊躇したが、灯りが急速に近づいてくるのを見て、走り出した。
息が苦しく、からだの中の傷が開いて血が流れ出ているような気がしたが、必死になって走った。
後をふり向くと、遠くで、刃(やいば)を打ち合う音が聞こえ、何人かが罵言を発していた。
源太は一息ついてから、笛を吹いた。
川上の方から、船頭姿の男が走ってきた。
「作左か」
と聞く。くり仲間の名だろう。
「いや、助けられた源太だ」
「作左は」
「あそこで闘っている。おれを助けるためにやってくれているのだ」
「心配するな、あいつは容易にやられる奴ではない、早く舟にのれ」

「しかし、あの男――作左を放って逃げるわけにはゆかない」
「そうだな、じゃ、舟の中で待とう」
男は源太を、大和川べりの舟の中に連れ込んだ。
「大分ひどくやられているな」
「なに、おれは大丈夫だ、それより作左は、本当に大丈夫かな」
「みろ、こっちへやってくる」
作左が、白刃を後方に引きながら走ってきた。
「おい、こっちだ」
「おお、源太は？」
「ここにいるぞ」
作左が船にころがり込んだ時、又、一発、銃声が聞こえ、鋭く空気を切って闇の中に弾丸が消えていった。
「それ、漕げッ」
作左と彼の仲間とは、力を併せて舟を漕ぐ。済まぬと思いながらも源太は、骨の髄まで疲れ切っており、痛みに責め抜かれて、横になったまま、起き上る力もない。
しばらく川を漕ぎ上った。
もう追ってくる様子も見えない。
対岸に舟をつけた。

三人は岸に上った。
「かごが待っている筈だ、ここで待っていてくれ」
船頭姿の仲間が消えていった。
「作左――というのだな、改めて礼を言わせて貰う」
「よせ、くり仲間として当然のことをしただけだ」
「かごを待たせてあるとか言ったが、よくそこまで手筈がついたな」
「お主の足じゃ、ここまでが精一杯、これ以上は歩けまい」
「残念ながら、その通りだ」
「だから、お主だけかごに乗せる」
「で、どこへ行くのだ」
「遠くへは行けぬ、伏見へゆく」
「えっ」
「心配するな、伏見の藤堂邸だ」
藤堂高虎は無二の関東方だ、伏見に別邸を持っている。
「いかに大坂方でも、藤堂邸に手出しはできぬ」
「そうだ――作左、お主、藤堂様の――」
「くり仲間は大抵、藤堂様の支配下にあるさ、お主は三河の別れか」
伊賀者は、上野城城代家老藤堂采女の支配下におかれていたが、服部半蔵に率いられた一部

は早くから三河に移って、爾来徳川家に直属してきている。
「そうだ、おれは大御所様の――」
源太がそう答えかけた時、船頭姿の男が、かごを連れて戻ってきた。
「源太、乗れ」
「すまぬ」
「急がすから、少し揺れるぞ。しっかりつかまっておれ」
かごが走り出した。
かごの傍について走っている作左が、
「危い、右へ――左へ」
と、時々注意しているのは、人目を避けているのだろう。
何度、いや、何十度、右に左に曲がったか分らない。源太は、方向感覚を喪った。これは伊賀者としては珍しいことである。疲労と苦痛の為であろう。
「少し休め」
かごが止った。
「疲れただろう。これを飲んで、一眠りするといい、もう間もなく伏見にはいる」
竹筒の酒をのませてくれた。
「もう急がなくてもいいだろう。ゆっくりやれ」
かごが再び動き出した。

酒が全身に回ってゆく。
――助かったのだ。
安心が源太の緊張を弛めた。いつの間にかうとうとと眠りに引き込まれていった。からだが限りなく深く沈んでゆくようだった。

五

眼が醒めた。眼の前が明るかった。
朝まで眠ってしまったのだ、或は気を喪っていたのかも知れない。
ちゃんとした部屋にいる。板敷に敷かれた薄べりの上の薄い蒲団に寝かされていた。
片方の縁側に面した障子が二枚開かれ、敷居の外に、作左が膝を両手でかかえ、ぼんやりと外を見ていた。
源太はその背に声をかけた。作左がふりむいて、
「お、眼がさめたか、ずいぶんよく眠っていたな」
「ここは、どこだ」
「伏見の藤堂様のお邸さ」
「そうか、よくここまで逃げて来られたな、まるで夢のようだ」
「全く、こんなにうまくゆくとは思わなかった、どうだ、起きられるか」

源太はからだを動かそうとしたが、猛烈な痛みに、思わず悲鳴をあげた。
「ちょっと、むりだな」
「昨日は亢奮し切っていたから動けたのだ。しばらく休むより仕方がないな」
「しかし、おれは――」
「ま、待て、今、何か食べものを持ってきてやる」
作左は気軽に立っていったが、しばらくすると、かゆと梅干と味噌汁とを膳にのせて運んできてくれた。
「とりあえずこれを。今に医師がくる。その上で食べ物を決めてくれるだろう」
「何から何まで、世話をかける」
「他人行儀はよせ、くり仲間だ。そういえば、大坂城内にお主の仲間は何人残っている。おれの仲間はあと一人、まもなく脱出してくるように手筈はつけたが」
「おれの仲間は二人」
「逃げられるのか、詮議はきびしくなっているぞ」
「いや、別に、そこまでは――」
「手筈をつけてやろう、所属と名を言ってくれ」
源太が躊躇していると、作左が、
「急ぎの情報がないのなら、放っておいてもよいかな、開戦までには何とか脱出してくるだろうから」

「二人とも、おれと同じ、急ぎの探索を命じられている」
「ならば、早く逃げた方がよい。お主のお蔭で隠密探しが厳しくなれば、見つかってひどい目に会うかも知れぬぞ」
「伊東丹後組の弁七と、有楽斎様邸の左右吉と――」
「よし、何とか手を回してやろう」
源太は膳の上のものを平らげた。
「おれは駿府の大御所様に報告せねばならぬ」
「そのからだで駿府へ行けるか」
「たとえ、這ってでも」
「気持は分るが、途中でくたばる。もう少し癒くなるまで待て」
「そうはしておれぬ。一日も早く――」
「ならば、藤堂様に申し上げて大御所様のお耳に達するようにするがよい。藤堂様ならば、三日のうちに書面を駿府に届けるだろう」
「でも、おれは直接に――」
「では、自分で行けるまで待て。強いて急いで、命をちぢめることもあるまい」
「一日も早く――お報らせせねば」
「藤堂様は大御所様腹心第一のお方だ。藤堂様に申し上げるのは、大御所様に申し上げるのも同じことと思うがな。お主は直接に申し上げねば、自分の手柄にならぬと心配しているのか。

藤堂様はお主などの手柄を横取りされるような方でない。ちゃんとお主の仕事として大御所様にお伝えして下さるさ」

「そ、そんなことを心配しているのではない」

源太は慌てて弁解した。

「ま、好きにするさ」

「おれが間違っていた。藤堂様に申し上げて大御所様にお伝え願おう」

「そうか、藤堂の殿様は今、御在国中だが、当邸に御家老藤堂高吉様がおられる。おれはすべて高吉様に報告した。お主も高吉様に申し上げるがよかろう。今、取次いでくる」

作左が、白髪の老人を案内してきた。

慌てて上半身を起こそうとして、顔を歪めた源太を片手で抑え、

「よい、そのままでよい、大御所様へ言上したき情報ある由、聞こう」

源太は、語った。

——千畳敷御殿にて大坂方重臣の会議あり、結論として、関東方には表面陳弁謝罪これ努めて時を稼ぎ、その間に至急、充分の戦備を固めることとする。

「ほう——御苦労、よく調べたな。大御所様には直ちにお報らせしよう」

嬉しそうに言うと、作左と顔を見合せ、大きな声を出して笑った。

「源太とか、褒美によいものを見せてつかわそう、作左、それ」

作左が座を立ち、あっと思う間もなく源太を抱きかかえ、縁側につれ出した。

源太は凝然とした。作左の指した方に、よく知っている五層の天守閣が聳え立っていた。

「あ、ここは」

「そうだ、大坂城だ。濠を渉ったのも、追手も、銃声も茶番劇、かごに乗ってこの大坂城の周りを二回、走り回っただけよ」

「畜生、図りおったな」

「弁七、左右吉の両人は直ちに捕える」

凄い目つきで作左を睨んだ源太の眼に、縁の向うからゆっくり近づいてくる速水と郡の姿が映った。

源太は、ぐっと呻いて、うつむいた。固くむすんだ両唇の両側から真赤な血がどくどくと流れ落ちてきた。

最後の隠密

小松左京

1

旧徳川幕府御庭番小坂了介老が、ある日いきなりわが家の風呂桶の中からうかび上った時は、まったくびっくりした。こっちもびっくりしたが、むこうはもっとびっくりしたろう。

その日は、年末以来こじれていた風邪が、ようやくかるくなって、せめて小正月までに、越年の垢をおとそうと、女房に昼風呂をたてさせた矢先――湯殿で突然えらい水音がしたので、飼猫でもはまったかと腰をあげかけると、

「あれェ！」

同じ思いで台所の方から通ずる引戸をあけた女房の、年甲斐もない、ガラスを金物でひっかいたような悲鳴があった。

「どうした!?」

と、一足とびに茶櫃をけかえして風呂場のドアをひきあけると――。

プラスチック製挽茶色の浴槽の中に、八分目ほどはった水が、ガス風呂のことだから、さっき火をいれたのに、もううっすらと湯気をたてている。その中から、これもプラスチック製の蓋をはねあげて、ぬれねずみになった老人が、鼠色木綿の羽織を着たまま、呆然とこちらを見上げていた。

「あ、あんたは誰です?」と、私は目をまるくして叫んだ。「いったいどこから風呂桶にとび

こんだんですか？」

「どこからと申して……」と、老人は私と女房の顔を、あっけにとられたように見くらべた。

「全体ここはどこだ？　たった今、錦切れ二人に追われて、道灌堀へとびこんだが……」

ザーッと湯槽から立ち上った姿を見て、女房がまた悲鳴をあげて、どすんとひっくりかえった。——老人の禿げ上った頭に半白のぞべ本多の髷がへばりつき、手にはぬきはなった一尺八寸ばかりの脇差しがあったからである。

なぜこんな事になっちまったのか——という詮索は、いくらやってもしかたがあるまい。とにかくそういうことになってしまったのである。幕末——というより、江戸城に明治帝の御鳳輦のはいった月というから、明治元年の十月末、江戸市民が天盃頂戴でうかれかえっているある晩、小坂老人は、何のためか官軍兵士の警備する江戸城内の紅葉山にしのびこもうとして、見張りの兵士にとがめられ、あやうく斬られそうになって、すぐ西の、吹上御庭との間にある道灌堀へとびこんだ——と思ったら、お堀の底をくぐりぬけるみたいに、昭和元禄の三文SF作家の陋屋内、カルキくさい水が、日向水ほどになったガス風呂の中からズボリと顔を出していた、という。そんなベラ棒な話が——といきまくむきには、どうぞ『街談文々集』でも『霊界異聞』でもお読みいただきたい。また新しがり屋の方は、フランク・エドワーズ編 "Stranger than Science"——邦訳名『しかもそれは起った』——でもなんでもめくってごらんになるがよかろう。江戸期に京の男が一瞬にして江戸の街の路上に、すっぱだかでほうり出されたるがよかろう。

話や、神かくしにあって、天狗とともに諸方をとびまわった子供の話など、またフィリピンの軍隊が、突然メキシコにあらわれた話、時間を一世紀とびこえて、ニューヨークに出現した男の話など、科学では説明しがたい奇象の記録が、ごまんとある。おお、ホレーショ、天地の間には……、と、ハムレットを気どらずとも、何とも不思議な事、今日の進んだ科学でも説明のつけがたいような奇妙奇天烈な事は、自然の中に間々起る。明治百年をとびこえて、丁髷姿の老人が、いきなり当家の風呂桶から出現したのも、何しろ起ってしまったからしかたがないので——、

「いったいまた、何のために、官軍警備下の紅葉山なんかに忍びこんだんです？」

と、私はたずねた——。小坂了介老人が、しょうことなしにわが家の居候になって、もうだいぶおちついてからのことである。

「明治帝の行宮になっているとなれば、警備は一しお厳重だったでしょう？」

「いや、二人ともおそろしく手練の者でした」と老人は苦笑した。「それに、太刀筋がはげしい。どうやら、示現流でしたな。講武所もお玉ケ池も、あの気のはげしさだけは教えられますまい。九州者は、いもとはいっても恐ろしいものですて」

「何かとりにいったんですか？」と、私はしつこくたずねた。「一橋家が水戸へおちる前に、紅葉山の御宝蔵も、御霊所も、城外へうつしていたんでしょう？　御文庫に、何かのこっていたんですか？」

「天璋院様付きの御祐筆の一人に、たってとたのまれた事がありまして……」と老人は言葉を

にごした。「御霊牌はおうつし申してありましたが、紅葉山の御霊屋を、官軍がこわすという話をひそかにききましてな」

たしかに、明治元年十二月、紅葉山の建物とりこわしの令が出ている。しかし、小坂老が、危険をおかしてまで、からっぽのはずの紅葉山に、いったい何をとりにいったのか？——それも、もと奥向きの筋の命をうけてである。しかし、老人は語りたがらず、私もそれ以上きこうとしなかった。

小坂了介老人——老人といっては気の毒な年齢かも知れない。文政二年（一八一九）のうまれというから、明治元年には、まだ四十九歳のはずである。とびこした百年の歳月は計算にいれないとして、しかし、よほど隠忍と辛苦にみちた仕事をかさねてきたにちがいない、そういった奇妙な影が、すでにしわ深い鉛色の顔に、きざみこまれていた。

背丈は五尺四、五寸、当時の標準から見ればどうか知らないが、今ならさまで高い方ではない。面長で、ややとび出した顴骨、こけた頬、痩身で、少し猫背で一見いかにも軽そうに飄々乎としているが——さて、そのくぼんだ眼が、いかにも奇妙だった。

笑えば、好々爺然としわの中にかくれてしまうのだが、そうでない時は、ぽつんとあいた二つの穴のように、まるでまたたかない。何の表情も読みとれない。それでいて、その石ころのような目は、路傍におちた二つの石ころのように、こちらの注意を全然ひかないで、しかもこちらのすべてを見ている。——そんな感じだった。

天璋院御祐筆の密命の話を、のちにきくまでもなく、風呂桶からあらわれた時もっていた老

人の脇差しの鍔をみた時、何とはなしにピンときた。古風で、頑丈一点張りの、一見何の変哲もない、大ぶりの鉄鍔だったが……。

「ああ、これですか？」と、これものちに老人は笑っていった。「これは伝来のもので——なに、みんなが、こういったものをつかっている、というわけではありません。御開城のころは扶持もとどこおって、手もと不如意で不断差しのほとんどは質屋に流れてしまい、こればかりはうるさい由来がついていて、手ばなしかねたもので——示現流でなくても、このざまでは、やられていて当然でしょう。おはずかしいが、太刀の方は、ほれごらんの通り、竹光同然のなまくらです。——へえ、そうですか？　いま時分この鍔のことが大げさにつたえられて……」

と老人はおかしそうに笑った。

老人は、伊賀衆の出だった。

姓の小坂というのは怪しい。が、そんな事はどうでもいい事だった。——時代をとびこえてしまった事は、彼にもすぐのみこめたらしかったが、しかし、秘密めかした性格は、そう簡単に解放的になるわけでもなかった。自分のおかれた状況が、次第にわかってくるにつれ、老人の口も、ぽつり、ぽつりとほころびてきたが、しかし、それでも最後の最後まで、彼の内奥に秘められたままになっていた部分もあったようである。

小坂老人は、服部家手下の、四谷の伊賀衆の家に生まれ、十四歳の時、江戸城大奥の御広敷詰めの添番に上った。——いうまでもなく、御広敷は男子禁制の大奥に属する執務所だった。江戸城本丸中の、将軍の居室であり、かつ御側用人たちによる側近政治のおこなわれた中奥か

ら、御錠口から御鈴廊下をわたって大奥へはいったばかりの所にある、大奥関係の事務をとる所で、大奥の中で男子のいる唯一の場所であった。御広敷から奥には、さらに御錠口、御鈴廊下があって、ここから先になると、もう将軍以外は、御広敷役人もはいれない御殿向である。

今みたいに、やたらにプライバシーを公開する時代とちがって、奥向の事は厳秘にするのが武家の習わしであり、とりわけ武家の棟梁である将軍の大奥は、すべてにわたって厳重な秘密主義がとられ、維新以後でさえも、その緘口の威令はきいて、奥勤めの人々からのきき書きさえ充分にとれないような有様だった。——何しろ、当時にあっては、日本最高の権力者で、神にひとしい公方のプライバシーにかかわることである。御広敷役人も、身分こそ低けれ、とりわけ口のかたい、譜代の旗本、御家人からえらばれるのが常だった。

御広敷には、用人、御用達、広敷番之頭、添番、伊賀者などがつめていた。——同じ伊賀衆の出身でも、御広敷伊賀者はこの役所内でもっとも低い身分で、もっぱら老人がなり、扶持は二十俵以上である。しかし、御添番の方は、伊賀者より役目上では上で、百俵をもらっていた。大奥唯一の男性幕吏の詰所である御広敷でも、ふつう、女中衆と接触するのは、六十歳以上、十五歳以下ということになっていたそうだが、小坂老のころには、この年齢制限はやや曖昧になっていたようなふしがある。——とにかく小坂了介老は、天保四年（一八三三）、御広敷添番に上る。添番の役目は、大奥に出向く役人衆が、女方と御広敷で話をするのを、ついて行って監視をする役目だ。たとえ老中が来ても、中奥との境の御錠口で刀をうけとり、それをもって対座の場までついていった。そして、翌天保五年——十五歳になった小坂少年は、この年西

丸から本丸老中に就任した水野忠邦の目にとまる。

「どういう事で、目にとまったんです？」

「なに、大したことじゃありません」と、老人は笑ってこたえなかった。「名誉ですが、迷惑でもありました。ずっと御添番なら、扶持もいいし御勤めも楽だったんですが——」

御広敷は、留守居役年寄を経て、老中の支配をうける。奥向の事は、何度もいうように、将軍のプライバシーに関係することだから、いわば側近に近い。——水野越前守がどこを見こんだのか知らないが、老人の話では、忠邦が大奥御年寄り、中臈をたずねてくるたびに、彼が添番役にまわることになったという事である。当時は、歴代将軍中、最高の子をなしたという、好色の家斉の時代で、それだけ大奥の権勢もつよく、幕閣も奥向との折衝を重視せざるを得なかった。

「だから、きっと、まわりあわせにすぎないでしょう」と、老人はいった。

だが、間もなく彼は、番之頭から、年寄衆の意向という事で、御広敷伊賀者の家へ、養子縁組をさせられる。——そして、幕閣中枢部の隠し目付として名高い、御庭番を仰せつけられるのだ。小十人格。百俵扶持。

「すると、隠密出張をなさったこともあるんですね」私は、若干胸をときめかせながらきいた。

「将軍から、じかに内命をおおせつかった事もありますか？」

「いやいや——」と老人は苦笑しながら、言葉をにごした。

「そんな事は、三、四十人もいた御庭番衆の中でも、めったにありません。小十人組といえば、

一応御目見得以上ですが、旗本の中でも一番格の低い——俗に、百俵六人泣きおとしといいましてな、百俵では、六人家族がいたら暮せないほどで——格はこの小十人組と同じですが、おじきの御用命はほとんどなく、御用御取次といって、御側衆から御下命があり、また御復命することになります。元治の頃、十三代様が西ノ丸仮御殿に御住いの時、一度だけじかに御復命いたした事がございますが、その時とて、御障子越しでした。御老中、若年寄は、これは何度も、……」

御庭番を拝命してから、一年たって、大奥への耽溺から化政の頽廃の世相をうんだ、十一代将軍家斉隠居、そしてこの年、天保八年、老中水野の直命で御休息庭之者支配にはいる。

「妙なもので——御広敷伊賀者は、伊賀衆組頭もともに、御留守居年寄、老中の御支配なのに、御休息庭之者は、若年寄の管轄です」

「その移動は、どういうわけです？」

「越前守様の引きだったと思いますが、鳥居様が、御目付になられました。目付は若年寄の支配です。それで——」

「ははあ——」と、私はうなずいた。「鳥居耀蔵（ようぞう）——天保の改革ですな」

「いや——御改革の筋の前しらべは、それまでの御用命にあったようです。それまで、御老中の御下間は、大むね、大御所（家斉）さま御側衆（おそば）の事だったのですが——天保九年の御用筋はもっぱら御目付の方から——しらべ先は……〝山の手派〟でした。御存知ですか？」

「山の手派？」

「さよう——」

老人の眼が、何かを吟味するように、小さく、キラッと光った。まるでとびこえてきた、百年のへだての意味を、さぐりたしかめるように。——そして、安全性をはかっているような、慎重な口調でぽつりといった。

「〝尚歯会（しょうしかい）〟の事——いまの人は、御存知ないかな？」

ああ、そうか——と、私は膝をうった。渡辺崋山、高野長英、江川英竜、川路聖謨（としあきら）——蘭学ぎらいの鳥居耀蔵がおこなった天保十年の〝蛮社の獄〟だ。

「すると、あなたは、渡辺崋山らの動静をさぐりに……」

「いえ——全楽堂（崋山の号の一）は、お目付手下が直接さぐっていました。私は、その会の中で、勘定吟味役の川路さまや、江川さま、羽倉さまなど、御代官役——いわば重い御役目の方々をしらべました。お目付と越前守さまとでは、この件についての考え方がちがっていたようです。お目付は、一途に蛮学をきらっておられたが、御老中はむしろ、この件に連座して、御役人衆に傷がつくのを御心労されていたようで——とりわけ、大坂へつかわされました時は、お目付は、大塩平八郎とのつながりをお見つけになりたがり、御老中はその逆のように拝察いたしました」

「じゃ、あなたはどちらの線にそって動かれたのです？」

「伊賀者は——神君以来、公方様おじきにつかえます。おわかりいただけますか？」

神君、といった時、小坂老の中で、ぴくりと何かがひきしまった。——とたんに、なんとな

く、冷たいものがこちらの背筋を走ったような感じがした。

ダブル・スパイ——というほど、はっきりしたものではないだろう。だが、老中と、老中自身が目をかけた目付鳥居忠耀の間に、政治的識見のちがいがあり、構想のちがいがあり、そこから、同じ事件を処する方針のちがいが出てくる時、そのおのおのから、ニュアンスのちがった指令をうけとる「密偵」はどう動くか？——単純に考えれば、序列の上の方につくことである。もう一つの場合は、直接の上司につく。どちらの場合にも、利得計算の上で、どちらにつくかの「賭け」がおこなわれるだろう。序列の上につくのも、直接上司につくのも、「名分」はどちらにもたつ。「大勢」を見通す、あるいは、それぞれの人物の「識見」による、いずれも計算のもとになろう。——だが、第三の場合というものが考えられる。それは、一応双方の意をうけとっておきながら、どちらの線にそって動くかは保留しておき、しばらく双方の意志から、等距離の地点に自分をおいて、動いてみることだ。

いわば、「両天秤」にかけて、暫時平衡をとるこの方向を選択するには、しかし、これを主体的にやろうとすれば、どうしても「支点」がいる。ただ単に情勢にそってやろうとすれば、両天秤は右顧左眄して動揺はたちまち見すかされたろう。——「番の者」といえば、とにかく武官で、「行動の人」だ。そんな動揺は、卑劣としてもっとも唾棄される。だから、どうしても「支点」がいるのだが——この「支点」を、単なる利害計算のきびしさによってだけ得ようとすることは、利害に財命を賭ける商人ならいざ知らず、すくなくとも徳川期の武士の場合には、伝統的心理として、不可能にちかかったろう。

だが、「行動の人」には、ここに恰好の名分があたえられている。それは、「将軍」に対する直接的な忠義だ。もはや伝説にちかい、開祖家康との出あい以来、伊賀衆集団の中には、将軍家の「肌身近くに接する」職分を通じて、一徹な、「血の忠誠」といったものをたもちつづけてきたであろう。秘密をまもり、奥向きに関して見聞した事は、一生口をつぐんで死んで行く——重命をうけて、誰にも知られず、他国へ出て行き、そのまま何の証拠ものこさず死んで行くこともあるかも知れない。およそ有能な密偵は、絶えず「二重生活」という、精神的激務をせおっている。その二重生活のバランスをとる支点は、きびしい利害でないとすれば、「忠義」しかあるまい。

私は、この老人が、無表情な顔でさりげなくつぶやいた言葉の中から、江戸期をこえ、維新以後、昭和戦前にいたるまで、およそ政治の裏面に動いてきた「密偵」や暗殺者の、行動のメカニズムがほの見えるような気がした。むろん、「忠義」もまた、この際「名分」にすぎず、名分である以上、裏がえせば、それ自体個人の「利害」と接するものであろうが、とにかく、「将軍に対する直接的忠義」の支点は、いかに高臣であるとはいえ、将軍の家来にすぎない老中、目付、双方の指令に対して、「内心において、選択を保留する」ことを可能にする。場合によっては、将軍じきじきに、双方とも「お為めにならない」といえばいい。——といっても、単なる密偵がたとえ御側用人とむすんでも、老中、目付に対抗できる「第三勢力」になれるはずはなく、要は、「行動の指針としての選択」を、ほんの一時期、のばせればいい。調査がすすむうち、双方の理非は、ある程度おのずから、見えてくるであろう。

「隠密御用の時は、必ず二人が組みで、拝命するとききますが……」と、私はいった。
「それは御小人目付の場合で、庭番は一人の時もあります。その時は二人でした」と、老人は簡単にいった。「しかし、その前に、御老中から御内に、私だけが吹上の御庭へよばれました」
「老中は、何といったんです？」
「三左（川路聖謨）のこと、気がかりじゃ、と、ただ一言申されただけです」
それだけで——ただそれだけの事で、ニュアンスをかぎとらねばならないとすれば、御庭番も、単に軽輩とのみいい得ない。容易ならぬ類推力をもたねばならない。
「それで？——上方の調査はどうでした？」
「洗心洞（大塩平八郎塾）と、山の手は、何のつながりもありません。一方は陽明、こちらは蘭学です。川路さまは、どこかで中斎（平八郎のこと）と面識ぐらいおありになったかも知れませんが、——渡辺登と生田万の仲は、これははっきりしておりましたが、これとて、共謀の事などあるわけはなく、そのように復命いたしました」
「もう一人の方は？——同じ見解でしたか？」
「それが、道中奇禍にあい、私一人が復命いたしました」
まさか、小坂老が殺ったのではないか、などとはきくわけに行かない。——大塩平八郎の乱が天保八年、小坂老の上方調査が九年、そして〝蛮社の獄〟が十年である。鳥居耀蔵の辣腕も、ついに尚歯会一統を、「大塩通謀、無人島脱出」などの「犯罪捏造」に問うことができず、わずかに崋山の「慎機論」、長英の「夢物語」だけが幕政批判の言とされ、崋山は国もとに蟄居

中自殺、長英が永牢を仰せつけられただけで、あとのメンバーは、川路聖謨、江川太郎左衛門、羽倉外記など、かえって老中の重要ブレーンとなり、アヘン戦争など、海外情勢急をつげる中で、天保十二年にはじまる改革に、開明策のプランナーとして活躍をはじめる。
「妖怪（耀甲斐）」、とよばれた洋学ぎらいの鳥居甲斐は、まるで腹癒せのように、酷吏ぶりを発揮するが、文化の打払令を薪水令にもどす、老中水野忠邦の開明策は、一応軌道にのった。
——その「すれちがい」に、御庭番小坂了介のしらべが役に立ったかどうかは、老人も語らないし、たしかめようもない。だが、そのあと老人は、なぜか御休息庭之者から、目付手下の御小人目付にまわされる。伊賀者としては異例だが、これは、鳥居のやった一種の左遷と見られぬこともない。

2

老人が明治元年の江戸城道灌堀から、突然わが家の風呂桶の中にうかび上ってから、すでに一か月あまりたった。
——当初、ちょっとしたさわぎが、もっぱらこちらの方にもち上った。
隠密をつとめたほどの経歴の小坂老人も、当初さすが事の意外さに仰天したらしいが、事態だけはすぐのみこめて、そこは伊賀衆らしく、動揺をあまり外へ出さなかった。
しかし、わが家の女房は、すっかりヒステリーを起してしまい、こんなうすっ気味の悪い風

呂など、今後何がとび出してくるかわからないから、すぐこわしてしまってくれ、とか、夜中に風呂の中から、お菊さんが出てきて皿をかぞえたりしたら、とてもこんな家にすんでいられない、とかわめきちらした。風呂場が、最近やっと改装してひろくなった所で、まだ佐官屋に金もはらってないこと、お菊さんの出るのは、井戸であって風呂ではないことなど、しきりになだめたが、老人を家におくことにするというと、頭へ来て、三日ばかり実家へかえってしまった。

——しかし、やはり好奇心には勝てなかったらしく、四日目にかえってくると、今度はいやにまめまめしく、老人の身のまわりの世話をしたりし出した。彼女をかわいがってくれた祖父が、三、四年前に死んだので、なんとなくなつかしくって、お年寄りってのも、いいものね、とか何とかいっていたが、米寿を祝って死んだ妻の祖父と、まだ知命（五十歳）をむかえていない小坂老とをいっしょにするのはちと酷な話である。

とはいえ、まあまあ、この「過去からの漂流者」を、何とかうけいれる気になってくれたことはけっこうだった。

私としては、ふだんから、このテの与太話を書きつけているし、また実際、過去の記録などをしらべてみると、まったく解釈に苦しむようなこの種の奇現象、珍事件が、実際に起ったこともあるらしい、という事ぐらいは知っていたので、小坂老が、いよいよほんとに、幕末の人であることがわかっても、まあこんなことも、たまにはあるさ、と、無理におちついてはいられた。

ぬれた着物を着かえさせて、日比谷門の御用邸——そこの、鍋島藩の囲いこみうちが、大奥年寄りの療養所になっており、御庭番は、そこに官邸のお長屋をもらって住んでいたのである——にかえる、というのを、そんなもの、今はもうありゃしません、と、口を酢っぱくして説明し、外を見せ、月賦ののこった中古マイカーを動かしたり、テレビをつけたり、ステレオをきかせたり、電話をかけてみせたり、新聞を読ませたり、いろいろやってやっと納得させ、その晩は二階の一間にとめたものの、さて、警察へ知らせる気にもならず——SF書きの私が知らせたって、頭がおかしくなったと思われるだけで、そこはふだんの言動が大切である——といって、へたにマスコミなどに知れたら、最近ネタひでりのテレビのびっくりなんとか、底ぬけなんとかなどにひっぱりだされ、新聞記者にもみくちゃにされ、不躾な週刊誌記者に、針小棒大、ウソ八百を書きちらされ、あげく女性週刊誌に「忍者の性生活」、少年週刊誌に「ふしぎだがほんとうだ！——過去からやってきた、江戸時代のカッコいい忍者！」などとデカデカと書かれ、あげく歴史家や歴史小説家が、真贋をきわめるとかのりこんできて、よってたかって根ほり葉ほり訊問し、本ものとわかれば、学会や資料会がまたよってたかってチャチャくちゃにしかねない。今の世の好奇心は、この老人をズタズタにしてしまうであろう。

また、へたに外へほうり出したら、いかに忍者でも、あの交通地獄はかわせず、神経がまいってしまうにちがいない。

ということで、とにかく、とりあえず当分の間——せめて世の情勢が、おぼろげにでものみこめるまでの間、わが家でそっとしておいてやろう、彼を思いもかけぬ異郷への「漂流民」と

して、あたたかくあつかってやろう、と腹をきめた。——せっかくとびこんできた、貴重な「生ける江戸資料」をこっそり一人じめにし、これを締切りせまって苦渋する原稿のタネにして、なにがしの原稿料をせしめよう、などというさもしい根性から発したことでは断じてない。誓っていう——断じて。

さて、老人の方は、さすが庭番までつとめた伊賀者だけあって、百年をとびこえた、ということには、さまで動揺をしめさないようだった。すくなくとも、表面的には。——動揺を、顔に出さない訓練は、そこは庭番だけにつんでいたであろう。のみならず、攘夷の開国のといったさわぎからはじまる幕末から維新へかけてのあの時代は、まったく泰平の常識からいって、おどろくべきこと、信じがたいことが次から次へと踵を接して起り、また、舶載唐物をもって細々と知っていた西欧文物が、突如幕を切ったように、どっと巷間の視線の前にあふれはじめた時代であった。——大老が江戸城門外で浪士に討たれ、紅毛夷狄が、武をもって公儀を圧服し、天朝さまが公方さまを譴責し、西国諸藩が公儀に叛き、上下公論沸騰し、——黒船、租界、テレガラフ、陸蒸気、そして、わずか三百トンの、いわば扁舟咸臨丸で、水煙万里の大海をこえて見聞したアメリカのありさま、ヨーロッパ視察をおえて次々帰国する留学生たちのつたえる彼地の新情報……そして、ついに、大政奉還、慶喜朝敵の宣言、江戸落城、帝輿の江戸下向——まったく、おどろくべき情報の爆発、目まぐるしいどんでんがえしの連続の世相だったのである。こういう時代なら、それこそ Anything will happen であったろうし、その連続として、この珍事を見れば、さまでおどろくこともなかったかも、知れない。

その上、化政から幕末へかけて、江戸では風来山人の『風流志道軒伝』をはじめ荒唐無稽な、異郷談をのせた、洒落本、黄表紙の類がわんさと出ていた。歌舞伎も寄席も、当世SF作家がおったまげるような奇々怪々奇想天外な話を平気でやっており、その上、真偽とりまぜた半可通の紅毛談義が流行する。おまけに日本人ときては、とりわけ好奇心旺盛のおっちょこちょいと見え、たとえば、きのうの四つ足不浄も、今日の文明開化と、慶応年間、横浜に開けた牛肉屋は、維新とともにあっという間に江戸両国へんに飛び火し、「牛にひかれて膳好方便、仏の教えさらんばア」と青陽山人魯文が『安愚楽鍋』序に書いた明治四年には、老若貴賤士農工商四民平等、鞭声粛々チェストの鄙侍から、芸者花魁にいたるまで、やれ牛肉は高味でござるの滋養になるの、横浜で食べつけたから三日に一度は食べずにおれないの、と、鍋のかわりはさらなり、通人ぶって生肉のうす切りを山葵醤油で食べるなど、当今レア・ステーキ愛好者顔まけのはねっかえりぶりを見せているのだから——そもそも、日本人というのは、たとえ宇宙人が来ても、あるいはアンドロメダへ流れついてもおどろかない人種かも知れない。

それやこれやで、小坂老人は、決して居心地はよさそうではないものの、かといってじたばたするでもなかった。——ただ、彼にとって、やや困惑したらしいのは、私の「格」を、どう判じて、どういう交際い方をしたらいいのか、当初は見当もつかなかったらしいことである。

百姓町人か、それとも士分か、諸藩か直参か、目見以上か、何しろ作法格式のやかましい武家の、それも軽輩とはいえ柳営の奥、将軍老中の傍近くつかえる身である。何をなさっています、とむこうからきくのは失礼で、住居服装業を見て見当をつけねばならぬ。

きかれもしないのに、こちらから、実はものを書いていますと説明して、SFというのはまあ、福内鬼外や曲亭とどっこいどっこい、三馬や一九よりも、すこしは上と、勝手にうぬぼれている戯文の一種で、というと、あからさまに軽蔑しかけた顔をしたが、幸か不幸か、書棚にずらりと、さまで開きもせぬブリタニカとアメリカーナがならぶのを見て、逼塞の洋学者と勝手にきめたらしく、以後ずっと、恐縮するほどへりくだった態度をとった。ミイラ取りがミイラになったのかと最初思ったのは僻目で、結構、老自身、見識があったのだが——とにかく、蛮社の獄の取りしらべで、隠密のくせにしらべた相手の、川路聖謨にすっかり傾倒してしまい、洋学をひどく尊敬していたのが、まあ、こちらにしてみればくすぐったいような僥倖で——。

にもかかわらず、わが政所がヒステリーの、おん出るのとにぎやかな所を見せてしまい、一目おいてもらっていたから、かえって赤面した。

「これも御時勢で、昭和元禄、女がすっかり強くなりました」と、私はつい弁解した。「表と奥と、きっちりわかれていた御武家の眼から見れば、ずいぶんとはしたない所をお見せして——」

「いや、格式のやかましかったのは、御旗本の、それも中どころから上の方々のことで、傘張り内職をしなければならないような貧乏御家人の家内では、けっこういいたてあいもあったようで」と老人は苦笑した。「ただ、町民とちがう所は、それを外にきこえないようにしただけです」

「うちのじいさんなんか、平民の出でいながら大層やかましかったようですが」というと、ちょっと考えて、それは御一新で四民平等になったから、武家の格式をかえって庶民がまねするようになったのでしょう。町民が作法や家内の格式で、武家をまねることは、江戸のころでもよくありました、という答えだった。

——維新新政は、平等の思想を輸入したばかりではない、「武家文化」をも一般に解放したのである。

3

天保十二年、隠居の身で権勢をふるっていた大御所家斉逝くや、水野忠邦は首席老中となり、家斉側近の若年寄小納戸頭などを罷免して、苛烈な天保改革を断行する。好色将軍家斉治政下、化政以来の頽廃し切った風俗を一掃し、奢侈を禁じ、物価高騰の原因と見なされた豪商、株仲間に大打撃をあたえ、天保の飢饉の余波を終結させるため、強引きわまる帰農策を遂行し——「酷吏」鳥居耀蔵は、十二月、甲斐守忠耀として江戸南町奉行に任じ、秋霜烈日、四民恐怖におののくほどの大弾圧政治をはじめる。この男、若い時はとんだ遊び人だったというが、よほど何かに恨みでも持っていたのか、その酷烈陰険な密偵政治は、海外情勢をにらみつつ化政以来の疲弊しきった幕政をたてなおそうという、それなりに建設的な水野忠邦の足を、かえってひっぱることになった。

町奉行は、江戸市民の民政官だったから、取締りの中心は、もっぱら風俗と奢侈にむけられ

る。

密偵も町方与力、同心はもとより、御小人目付から徒士目付まで、暗躍をかさねた。町方は町民を、御小人、徒士目付は一応目付差配で、士を対象とするが、これも鳥居甲斐が前任する所で、「老中御声がかり」をかさに、身分の容赦なくおこなわれる。御小人目付は、庭番同様、隠密になる役目で、大名、旗本、諸藩、直轄領にむけて、いっせいに探索を開始した。

小坂老も、御小人目付の一人として、京、上方の商人の動静をさぐりにいった事もあった。だが、蛮社の獄の時の事がたたってか、あまり大任はまわされず、鳥居甲斐とならぶ天保改革の悪役、書物奉行渋川六蔵の手下にまわされた。

紅葉山文庫を管轄するこの奉行は、蘭学禁止、陽明学徒の監視、また種彦、春水を捕縛した人情本の禁止など、言論、思想弾圧の、陰険な影のブレーンだったらしい。

――尚歯会探査の時、身につけた蘭学に関する簡単な知識をかわれて、小坂老は、「蛮社残党」の監視にあたる。いわば「思想警察」の末端をつとめたわけだが、これがかえって、川路聖謨らに対する私淑の意をつよめた、という。そしてまた、軽輩の身でいながら、朱子学、陽明学、蘭学、国学など、諸学の思想について、意外な識見をたくわえることになった。

――こういうことは、昭和の大思想弾圧の時も、まれにあったらしいが、とりしまるべき思想に、逆に共鳴する所があったため、表面成績はあがっても、鳥居忠耀が、例の浦賀測量事件以来、眼の仇にして憎んでいる閣内洋学派の大ものは、かえって陰険な罠にかけられるようなぼろを出さずにすんだ。

といって大とよばれる隠密の、それも秘密主義にとざされた伊賀者出身のこういったささやかな配慮が、歴史の上でどれほどに効果があり、どれほどに評価されるべきなのか、私には判断のしようがない。

その「弾圧政治」の手先となりながら、わからぬ所で川路、江川らをかばった、この複雑微妙なダブル・クロスも、徳川家の「お為め」から発していたのだった。いや、そのころには、将軍への「血の忠誠」を足がかりとして、小坂了介青年は、「御政道のお為め」という所まで、識見を高めていたとも思われる。しかしそれが日本という「お国のお為め」にまで――最後には、その考えを理解するにいたったがついに主体的な行動の「原理」にはならなかったようだ――拡大されていなかった所は、公儀御庭番、譜代幕臣としての彼の限界であったろう。

天保期にあっては、無理もなかった事でもあろうし、幕末の志士たちもまた、この「お国のお為め」という考え方を、その必要性は客観的情勢から理解しながら、「行動の原理」とするための心情の核を得るのに、それぞれ内面的な苦労をしたであろう。その時、「将軍――幕制」を凌駕するシンボルとしての「天朝」が、あらかじめ学者たちの手によって発掘されてあり、志士たち――すべてとはいわないが――はそこに「名分」を見出したのであろう。

また、この期間を通じて、さまざまの「危険人物」の身辺を監視するうちに、川路聖謨に対する尊敬の念を、いよいよ深めて行く。――露使プチャーチン属官であった「オブローモフ」の作者ゴンチャロフが、口をきわめてほめているように、聖謨は苦労人であるとともに、賢明かつ篤実の人であったらしい。「川路さま」の名を口にする時、老人の眼に、敬愛の光が宿る

のが見られた。そして、畏敬と同時に、一種の痛憤の表情が見られたのは、安政の大獄に左遷されて以来、この彼の尊敬する人物について日の当る時がこず、西丸御留守居という閑職のまま、江戸開城の日、自殺したことによるものであろう。

「川路聖謨は、ピストル自殺だったということですね？」

「断じてそんな事はございません」と、老人は言下にいった。「あの方は、そんな方でございません。幕閣の中で、もう数のすくなくなった〝腹の切れる〟お方でした」

だが、それは彼の「信念」であって、彼自身、聖謨の最期にたちあっていたわけではなかったのである。

4

天保十四年、上知令の失敗により、忠邦は大名武家から、庶民にいたるあらゆる階層から攻撃をうけ、四面楚歌の中で退陣する。——鳥居甲斐守も失脚、丸亀藩におあずけとなり、小坂青年は御小人目付からもとの御庭番にかえって行く。だが、老中水野、鳥居甲斐とのつながりと、両者の失脚は、この青年の前途に、やはり大きな運命の齟齬ともいうべきものをもたらした。弱冠二十四歳で、忠邦にかわって首席老中となった福山藩主阿部正弘は、川路、江川、佐藤信淵など、才能ある中堅官僚をつかい、安政四年、わずか三十八歳で死ぬまで、国論統一、日米、日英、日露各和親条約締結、洋学所、海軍の創設と、開明策に敏腕を発揮して行くのだ

が、その時すでに、阿部伊勢守にも、腹心ともいえる御庭番がいた。——小坂老より、九歳齢上の、村垣範正である。小坂老と同じ、小十人格の軽輩から身を起し、隠密として諸方に働きながら、やがてその才腕を買われ、勘定吟味役にのぼり、安政元年、露使プチャーチン下田来航のおり、川路聖謨、筒井肥前守らとその応接にあたる。

その後、外国奉行、勘定奉行、神奈川奉行を歴任、万延元年、遣米使節派遣の時、新見豊前守正興をたすけて、咸臨丸で渡米、達筆のスケッチをたくさんいれた『村垣航海日記』を書いた、村垣淡路守その人である。御庭番という、いわば密偵から身を起して、出世したものは、ほかにもいるが、奉行にまでのぼり、対外使節代表の一人に加わったのは、彼のみであろう。他藩でも、御庭番から維新元勲になった例はないでもない。大西郷がそれである。——余談だが、この遣米使節には、中津藩士福沢諭吉が、天保期の小坂老と同じ、御小人目付の資格で随従している。

だが、同じ御庭番衆で、その新知識に対する識見は、決してひくくないのに、村垣範正と小坂了介の運命は、その後大きくひらいて行く。

「村垣さんね——ええ、あの人は、なかなかはしっこい人でした」と老人は、思い出すように眼を宙にはせた。「御添番に上った時は、まだ、たしか休息庭詰めだったと思います。しかし、こちらが大奥へもどった時は、もう雲の上といってよかった」

人材登用に、もっともはなはだしい成果をあげた、阿部伊勢守老中時代は、ずっと西丸の山里庭預りという閑職につく。——同じ御庭番でも、山里御庭詰めの方は、通常城内警備だけで、

隠密には出ない。次にふたたび、御休息庭支配のもとによびもどされ、隠密御用をつとめ出すのは、皮肉にも、安政五年、井伊直弼が大老に就任し、いわゆる「安政の大獄」の嵐がふきあれる時なのである。

「阿部伊勢守の死に方も、いかにも唐突ですね」と、私はいった。「なにかの噂はありませんでしたか？」

「さあ、伊勢守さまは、面とむかった敵のないお方でしたが……」と、小坂老も言葉をにごした。「ただし、おやりになったことは、大きく見ると、ずいぶん思い切った事でしたから……」

諸藩協調から国論統一をやり、攘夷派の抵抗を最小にしておいて開国へもって行こうとした阿部正弘の方策は、諸藩、尊王派弾圧、幕府専制強化による独断的開国という、まったく逆の、井伊反動政治によってとってかわられる。——川路聖謨をはじめ、閣内洋学派を一掃した、この井伊政治と大獄については、小坂老はあまり語りたがらない。安政期の老の記憶の中では、例の城内御金蔵破りの事件が一番大きく印象づけられているようだった。——安政二年三月六日、野州犬塚村無宿富蔵と、上槇町のもと御家人藤岡藤十郎の二人が、大胆不敵にも城内金蔵を破って二千両箱二つ、計四千両をぬすみ出した事件である。

「あの時は、御城内もえらいさわぎでした」と、老人は思い出すように眼を細めた。「外にもれては、ただごとさえゆらぎかけた幕府の威信が地におちます。といって、しらべをすすめるうちに、どうしても洩れてしまいます。伊勢守様も、大事な時故、御心痛でした。結局安政五年になってつかまえられるのですが、一時は、勤王浪人の陰謀にちがいない、とか、御城の焼き打ちを計画しているとか、いろいろいわれまして、御庭番も、ずいぶんとりしらべもされ、また探索にもつかわれたものです」

「御金蔵なら、御金蔵同心の責任じゃないんですか？」

「いえ、御金蔵は、本丸内桜田門から堀をへだてたむかい側の、蓮池御金蔵と、本丸大奥の北、天守閣わきの奥金蔵とありまして、やぶられたのは奥金蔵の方です。蓮池金蔵の方は、ふだんの金銀出し入れにつかっておりましたし、何しろ大手玄関前ですから警備も行きとどく。それに対して、奥金蔵の方は、何しろ、御貯え金をおさめて、大奥まぢかですから、ふだんめったに家士も近づかない。その隙をついたのですね。竹橋蔵の前の、北桔橋門から何度もしのびこんで合鍵をつくったというのですから、大胆な奴です。北桔橋門は、葬礼の時につかうだけで、桔橋の鎖もさびついているぐらいでした」

安政六年十月、本丸焼失、万延元年、桜田門外の変、翌文久元年、坂下門外の変——将軍居城のすぐ傍で起った、幕閣最高位にある人物に対する暗殺事件は、いよいよ公儀の権威をゆるがせ、城内の警備をますます神経質にさせた。——公武合体の政略結婚の犠牲といわれた皇妹和宮が、大奥御台にはいったことも、この緊張をたかめた。——だが、広大な城内警備も容易な事ではなく、怪異や怪火がたびたび起り、大奥柳営内に、流言がささやかれる。そしてまた、内外の情勢は、生麦事件、薩英戦争、浪士の暗躍、一揆の続発と、まったく混迷を加えて行く。その中で、文久三年六月、西ノ丸炎上、同年十一月、本丸炎上、そしてついに江戸城本丸は、これ以後西ノ丸仮御殿以外に再建されず、慶応四年の開城をむかえる。

「城内の火のまわりは、特別やかましかったのでしょう？——放火もあったのですか？」

「あったと思います。——大事にいたらずとりとめた不審火も、何度もありました。それに、警戒をするにも、お城がひろすぎましたし、諸事窮屈になりまして、表向きも奥向きも、下僚のものの質がおちておりました。心のきくものは、どしどし御政務に召上げられますし……」

「放火をするとなると——やはり、諸藩の隠密ですか？」

「そうでしょう。——薩長のものが多かったと思います。吹上のお庭で一度、不審のものをつかまえた事もありますが、その場で舌をかみきりました。牢問いにかけても吐きますまいし、本人が口を割らぬことには、体をしらべても、何の証拠も上らぬのが普通です。隠密というものはそういうもので、いくらつかまえても何もなりません。——とりわけ、薩摩の隠密は、はげしくて、公儀のものも、何人も闘って死んでおります。薩摩は、こわい国だと思いました。公儀に対抗して、あれほど下級の者が、次から次へ、お国のために死ねる、ということは……」

小坂老最後の〝御用〟は、慶応元年の、第二回長州征伐の時だった。——すでに、本丸、二ノ丸は失火で焼けおち、西ノ丸、山里庭詰めだった小坂老は、西ノ丸仮御殿の御庭先から内命をうけ、正月の松のとれないうちに、変装して長州萩へむかう。——最後の御奉公と思っておりました、と、老人は述懐した。道中騒然たる中を、いったん芸州まで行き、そこからとってかえして、大坂城代に途中の情勢を報告し、つづいて三月、無事に萩城下に侵入する。——だが、五月に江戸を発した長州征討軍は各地で敗北し、翌慶応二年七月、若年の十四代将軍家茂は、出征中に大坂城で急逝する。後見役一橋慶喜が十五代をつぎ、征長はとりやめになり、歴史は今や、決定的に幕府の崩壊にむかってころがり出した。そんな中を、日比谷門外の伊賀組御用屋敷に、ひっそりと小坂了介がかえってきたのは、年もあけた慶応三年末であった。芸州藩が薩長に同調する情報をつたえようと、長州武士数人を切って、京都へついたが、慶喜にはついにあえず、そのうち十月になると、大政奉還になってしまった。老中は目まぐるしくかわり、事態の推移の早さは、もはや彼のにぎった情報を無意味なものにしてしまった。打ちこわし、ええじゃないかのつづく街道筋を、江戸までかえってきた小坂了介は、翌日から何の変哲もない顔で、西ノ丸に詰めていた。——長い将軍不在で、ひっそり閑とした江戸城内で、庭やこぼれた門の手入れもろくにされておらず、壮麗をほこった本丸、そしてまたまたこの年末に焼けた二ノ丸の焼跡も無残に、徳川二百数十年の歴史も、荒廃の中に幕を閉じようとしていた。

江戸市中は、薩摩御用盗の跳梁、幕兵の薩摩邸焼打ちに騒然としていた。——だが一方、すぐ隣りの横浜は、諸外国居留地のみ別天地で、そこから吹き出す開化の息吹きは、政変を前に、やけっぱちで度胸をすえた江戸市民たちの間にも、次第に滲透しつつあった。そして二月、慶喜は突如江戸へかえってくる。

「開城の頃はどうしました？」

「紅葉山の御霊屋の御移封と、御宝蔵移転の下役をつとめました」

「そのあとは？」

「寛永寺で、慶喜様の御身辺に詰めました。侍僧を通じてお叱りを頂戴しましたが、やはり夜

は庭におりました。——別に組頭や御重役の御指図があったわけではありません。ですが、私どもは、下級のものではありますが、御神君以来の掟があります」

忠実な番犬のように——という言葉が、胸にうかんだ。だが——、自身大変な開明派だった慶喜にしてみれば、何の興味もなかったろうが、しかし、儒をもって武家の道徳をたてた徳川の「忠義」は、最後はこういった下級武士や「公方様」をしたう江戸町民によってたてられたのである。

四月十一日、慶喜水戸へ退去——神君以来の「義」を結んだ当の相手は、もうこの天地の間のどこにも存在しなくなってしまう。もはや命令系統も存在しない。御金蔵は二つともからっぽだ。

「困られたでしょう」と、つい私は同情の口ぶりでいった。「どうなさるおつもりでしたか?」

「腹はきまっておりました」と小坂老人はいった。「生きる方は何とでもできます。そこは御旗本衆とちがって、隠密は何でもできますから——しかし、幕府はなくなっても、神君との御約束はなくなりません。東照宮の御門前で、御霊屋のお守りでもするつもりでした。天朝様は、日本万民の主の姿にかえられて、新しく万民と義をむすばれるでしょう。しかし、私どもは徳川御神君と義をむすんだのですから」

これが、洋学、儒学、国学などを「理解」し、時勢のおもむく所を理解した人の言葉か、と、私はややおどろいた。——小坂老は、伊賀衆の中でも、特異な人であったろう。密偵政治は、維新政府にとってもやはり必要であり、余禄で食えぬ士族は、それぞれ新政府末端につかえ、

下級武士は多く邏卒になり、伊賀・甲賀衆はその特異な諜報能力を買われて、「刑事」になった人も多かったのだから。戦前、特に明治大正期、「巡査」と「刑事」の間では、何となくへだてがあり、刑事は印半纏を着て、ほおかむりで軒下にしのぶものと考えていたのも、おそろくこのせいではないかと思う。生きのびた人たちは、新しい主人を見つけた。しかし、小坂老は、単なる御庭番ではなく、その経歴を通じていつの間にか——手づくりの素朴さをもってはいるが、それはそれなりに、独自な、——「思想人」となっていた。

「隠密といえば、まことに軽輩ですが、魂は、武士の中の武士でなければなりません」と老人は、ちょっとせきこむようにいった。「武士は、主君のお為めとあらば、死を恐れないものです。とりわけ、庭番は、公方さまの奥の事から知っているのです。——おじきの密命をうけて、出ては二度とかえらないかも知れません。つかまっても、死んでも、身分はあかせません。まつられもせず、死骸は畜生同然にうちすてられます。もし、〝忠義〟という心がなかったら、とてもこんな仕事はつとまりません。もし隠密に〝忠義〟がなかったら、それは利害につられ、他家の秘密をぬすむ、卑しい密偵にすぎないでしょう。また、人間、利得勘定だけでは、とても長年にわたって身分をかくし、死を賭してまで動けないものです。——商人は利得だけで動き、百姓町人もまた、その日のくらしむきのみを案じます。利得安逸をこえた〝忠義〟に身命を賭すことのできるのは、武士だけです。ですから、御政道は、百姓町人にはまかせられません。損得ずくでは、身命を賭せないでしょうから……」

「〝葉隠れ〟ですか?」と、私はいささか鼻白んでいった。

「〝鍋島論語〟ですか？」と小坂老は、かすかに軽侮の色をうかべていった。「山本常朝はしゃべりすぎました。それを書きとめて、読ませるにいたっては論外です。――〝忠義〟は言葉で教えられるものではありません、いってしまっては、おしまいです」

5

当然の事ながら、老人は、百年後の日本とそれから維新以後の日本の歴史につよい興味を示した。――皇居となった江戸城を、ぜひみたいといって外出したが、東京のあまりのかわり方に衝撃以上のものをうけたらしい。大丸呉服店はどちらでしょうか、ときかれたが、まさか、今の大丸が、隠密のために衣服をととのえてくれるはずがないから、ごまかしておいた。そのかわり方がすさまじいにつけ、彼の最後に記憶する、明治元年の日本から、今の日本にかわるまでの経過に、大変な関心を抱き、私の日本史に関する旧書を読みあさった。天皇を中心とする維新政府の統一国家のくだりを、彼はうなずきながら読んでいた。日清・日露の軍事探偵のことを知ると、くわしい事を知りたがった。――だが、戦後の所がどうしても理解できないようだった。老人の理解する範囲は、敗戦までだった。

「すると、今の日本には〝忠義〟ということはないのですか？」と老人は、はげしいショックをうけたようにいった。

戦後は、主権在民の国になった。あなたの理解でいえば、〝百姓町民〟の国になったのだが、

御一新の、四民平等の理想は、戦後やっと完全に実現され〝国民〟の代表が政治をおこなうのだ、と私は説明した。

「それはわかります。しかし、天朝さまあっての四民平等であり、〝国民〟でも政治を行えるのでしょう。天朝さまに対する〝忠義〟がなくてなんで、御政道をあずかれますか？」と、老人は頑固にいいはった。

〝国民の代表〟が責任をもつのは、〝国民〟に対してである。それが代表民主主義というものであって、西欧諸国はもとより、世界の国々は、次第にこのやり方にむかいつつあるし、それできわめてうまく行っているのだ、と説明しても、老人にはどうしても納得が行かないようだった。

「しかし、政治には、何かに対する〝忠義〟がなくてはならないはずです。政治には、必ず利害をこえたものに対して、世の褒貶をよそに命をすてる必要が出てきます。また、ふだんそれを心に思っていればこそ、御政道にたずさわるものは、それをおろそかにしない態度が出てきます。そのようなものなくしては、利害を切断することもできず、利得に押しながされるばかりで、とても御政道の権威をうちたてることはできますまい。――それに、政治には、どうしても人を殺さねばならぬ時が出てまいります。万物有霊、まして霊長の人の命をうばうに、利害に従って殺すは、たとえ匹夫であろうと相手を卑しめ、犬死させることになります。人我れの、かけがえのない命を奪うには、奪うに値する高いもの、深いものがなくてはかなわぬと思いますが……」

もし、戦後の日本にそれがあるとすれば、まあ、国であり、国民であろう。しかし、戦後の日本においては、人命は政道よりも何よりも尊いということが、あらゆることの基本となっており、政治は、人を殺さず、我を殺さずが基本になっている。政治家もまた、同じ国民であって見れば、たとえ政道の失敗があっても、昔のように、切腹をもって報いることなく、ただ、一種の社会的な罰をうけるだけである。それで、けっこううまくいっているのだ、と、私はいった。

「それはそれでけっこうな事かも知れません。——しかし、政道をあずかるものが、常に己れの死を腹の中にもっていなくては、また非常の時に、身命をささげるものをもっていなくては、襟を正した政事ができようと思えませんし、非常の時の断を下せようとも思えません」と老人はいいはった。「日本国内の事は、それでもよろしゅうございましょう。ですが、四海諸国、みなそのようになっておりますか？」

私が答えをためらっていると、小坂老人はさらにたたみかけるようにきいた。

「日本は武をすてた、これはよろしいでしょう。しかし、なお、強大な武をほこる国が、利害をもって攻めてきた時、これを断乎としてはねかえす〝義〟、また全国民が、一丸となり、烈士は命をすてる〝忠〟、これなくていかに国をまもりますか？」

ちょっと考えてから、私は、大丈夫だと思うと答えた。忠も義も、も早そういう形では存在しないが、しかし、なお日本の人々の底には、まさかの時には断乎として理非を直す〝義〟にあたるものはあるような気がする。また政治にたずさわる人も、すべてがすべてとはいわない

し、また〝切腹〟もしないだろうが、世の褒貶をよそに、黙々として、利害をこえる価値にむかって、ほとんど身命を賭するにひとしいほど、その力の限界まで発揮する誠実な人がいる、と信ずる。——政治に不可避な、巨大な責任をともなう「決断」も、今は昔にくらべて、はるかに「賭け」的要素がすくなくなるようにできているし、また、まさかの場合にはやはり中心人物は、「死」を覚悟するだろう、と。も早「忠義」は、武家の専売特許ではなく、「死」という、武家にしかできない、恐しい芸当の看板をぶらさげ、その専売権を保護する必要もなくなった。——その意味で、維新から敗戦までの八十年間は、日本はまだ、ある意味で、徳川三百年、いや鎌倉以来七百年におよぶ「サムライ」の支配の延長上にあり、その精神の支配している国だった。

しかし、終戦をもって、「武士」は完全に日本から消えたのだ。

「しかし——それで……このままで、これから先もずっと、うまく行きますかな」と、小坂老は、なおくりかえした。「もし、他に〝忠義〟をもった国なり、徒党なりがでて、日本を攻めてきたら、今度こそ日本はほろびるのではありますまいか」

そんな事はないと思う、と私も半分意地になってくりかえした。

この最後の問答が、老人にとって、東京の変貌よりも何よりも、最大のショックになったらしかった。——翌日、老人の姿は、身のまわりのもの一切とともに、わが家から消えていた。三日たって、裏山の中で、割腹死体となって発見された。私の家に迷惑をかけまいという配慮からか、それらしい形跡は何ものこしていなかったが、ただ、「忠義のなくなった世界には生

きていられない」という意味の遺書がのこっていた。——警察も新聞記者も、身寄りの知れない、風がわりな老人の自殺とうけとっているらしかった。たしかに、将軍家がなくなっても、それを上まわる権威が用意されていた維新の時ならともかく、——「忠義」という行動原理が完全になくなった世界にあっては、公儀の「隠密」として代々もっとも苛酷な、心身訓練をつんできたものにとって、も早生きるべき価値を見出す事はできなかったろう。「忠義」がなければ、隠密など、もっとも卑しい、もっともつらくて愚劣な職業だ、といった老人の言葉が、あらためてよみがえってきた。

その意味で、まさに最後の「武士」が死んだという感じだった。

死体は、雑木林の中で、東北の方をむき、左につきたてた脇差しを右にいっぱいにひき、鳩尾から上へさしこんで、心臓をつき、さらに、もちかえて臍の下まで十文字にかっさばき、その上、のどをついて前へたおれふすという、気魄のこもった、作法通りの見事な切腹ぶりだった。葉のおちた木立ちをぬってちらつく、春三月の雪が、その肩や、背や、半白の髷にうっすらとつもっていた。——降る雪や、明治は遠くなりにけり、という所だった。

その死体を見おろしながら、私はつくづくと、われわれ日本人は今、「忠義」というものはない世界に住んでいる、と思った。「忠義」だけでなく、政治一般から、「死」を追放した。戦後の政治と戦前の政治の最大のちがいは、まさにその点にある。明治以来戦前まで、総理や高官で暗殺やテロにあわなかったものをさがす方が早いくらいなのに、戦後の政治家の中では、テロにたおれたのは故浅沼稲次郎氏だけである。

学生の暴力といった所で、あれほどさわいで、死者といえばほとんどなく、それも事故によってではないか。ゲバ棒のなぐり合いも、器物破壊も、そのかぎりでは、エスカレートされた「意思表示」にすぎず、いかに彼らが戦後の「言論・非暴力の子」かという事がわかる。その点だけみても、たしかに戦後、われわれの社会は進歩した。そしてまた、「昭和元禄」という言葉も、そこに皮肉な照応を見出せるような気がした。

元禄期は、赤穂浪士の誰だったかがつくったという、

人斬れば、わしも死なねばなりませぬ

そこで無事にと木脇差しさす

という狂歌にうたわれたように、戦国の「暴」が、社会の中から払拭されようとしている時代——赤穂浪士の「仇討ち」が、世論にあれほど喝采されながら、「集団暴力」として「法」の強烈な断罪をうけた時代だったのである。

小雪のちらつく山道を、踵をかえしてくだりながら、私はもう二度と「忠義」を必要とするような時代はくるまい、と思った。——とはいえ、「これから先もずっと、このままで行きますかな」という小坂老人の言葉は、何がしかの不安を胸の底にのこしていた。——本当にもう、われわれは二度とそういったものを必要としないであろうか？　先行き、危機にのぞんで、誰かがこれを復活させようとするこころみはなされないだろうか？　あるいはより高度な次元で、そういったものの復活の「必要」にせまられることはないだろうか？　その時、その対象は、「党派」か「階級」か「人民」か「国家」か「民族」か、——「民主主義」かあるいは「人類」

か？――よしんばそういった事はないにせよ、性急な死で区切られたこの束の間の生をこえる何ものか、盲滅法の決断で果敢な行動の選択をせまられる場合、そこに身命を賭け得る何ものか――否、「死ぬこと」そのものを価値あらしめるような「何ものか」を必要とするような時が――本当に二度とこないであろうか？

編者解説

歴史の中で闇に生き闇に死んでゆくのが忍者の宿命――だが、そんな彼らも、ひとたび小説の中に登場すれば、堂々たる主役として武士や豪商をもしのぐ活躍を見せるのは周知の通り。本書『日本妖忍者列伝』は、先に本文章で刊行された『日本忍者列伝』に続いて、大陸書房版『忍の巻―時代小説を読む』の後半を再編集したものである。

「おんみつ侍」小松重男

ユーモラスな味わいの武家ものや市井ものに健筆をふるう小松重男は、その一方で、優れた隠密小説の書き手として知られている。

小松重男の隠密ものは、概ね、虚構の隠密を主人公にしたユーモアの中に鋭い切れ味を秘めた諸作と、実在の史上人物を主人公にした一種の史伝性を備えた作品の二種に大別される。

後者を代表する大作としてまとめられたのが、上下二巻にわたる大作『お庭番秘聞』で、代々のお庭番の家柄に生まれながらも、幕末、初代新潟奉行となって辣腕をふるった川村修就の生涯を、綿密な史資料の調査を経て描いたものだ。作者の言によると、「おんみつ侍」の主

人公村上範正は、この川村修就と親しかったとのこと。
お庭番組織の実態を詳細に再現しつつ、当時の政治・風俗といった時代相の中で彼らの姿を浮かび上がらせた秀作である。

「神変卍飛脚」宮崎惇

SF同人誌の名門「宇宙塵」を舞台に創作・評論を発表する一方、『忍法柳生新陰流』や『甲賀忍法江戸控』等、忍者ものにも力作を発表した宮崎惇は、新たな伝奇小説の書き手として嘱望されつつも、惜しくも早逝していった作家である。
「神変卍飛脚」も、猿飛佐助、風魔小太郎、服部半蔵の三人が、それぞれ、天文十四年六月に、各所に落下した火球＝隕石？　の放射能を浴びて超能力者となったというSF的設定がとられている。
作者には、私家版の評論集『空想科学小説の諸相』があり、その中に収められた「SF時代小説について」で「日本人むきな時代小説にSFが進出することで、何か新しい打開面、可能性が開かれればと願うのは、ぼくだけであろうか」と述べており、様々なエンターテインメントがクロスオーバーした現状を見るにつけ、その早逝が惜しまれてならない。

「最後の忍者――天正伊賀の乱」神坂次郎

長いキャリアを持ち、『元禄御畳奉行の日記』でベストセラー作家入りを果たした神坂次郎

には、戦国、江戸、幕末と、それぞれの時代を生きた有名無名の人々のエピソードをまとめた作品集『戦国を駆ける』『江戸を駆ける』『幕末を駆ける』の三冊があり、この「最後の忍者　天正伊賀の乱」は、『戦国を駆ける』に収録された一篇。
文字通り、屍の山を築きながら、伊賀攻めを押し進める悪鬼織田信長に対して、作者がいうところの「忍術のすべてに長じた男がそれほど多くいたわけではない」伊賀者たちは、どう対処していったのか。作者は、隠の与次と音という、二人の対照的な忍者を登場させ、阿鼻叫喚の地獄図絵の中での、二人の人生を巧みにさばいていく。
結びの五行の中で、作者と同じ様に、音と彼を慕う妻の平和な暮らしを願うのは、私だけではないだろう。

「捨てかまりのお蘭」新宮正春

長篇小説『鷹たちの砦』をはじめとして、『陰の剣譜』『陰の絵図』、もしくは作品集『忍法鍵屋の辻』等を見ても分かる様に、新宮正春がものする時代小説の真骨頂は、忍者、剣豪が卍どもえと入り乱れるスケールの大きな伝奇世界にある。
「捨てかまりのお蘭」は、風魔きっての使い手変化の馬平と対決することになった甲賀のくノ一お蘭の決死行を描きつつも、敵の忍びの中に、彼女を捨てた実の父花沢の十蔵を設定したところがミソである。
幼くしてお蘭を捨てた十蔵の真意は奈辺にあったのか。お蘭の心の動揺と真相の解明が過不

足なくストーリーの進行とむすびつき、クライマックスの対決シーンへとつながっていく。
忍びを主人公とした父娘の愛憎物語ともいうべき作品で、生と死の修羅場に立ってはじめて互いの愛情を確認する彼らが哀れである。

「くノ一崩れ」早乙女貢

「捨てかまりのお蘭」に続いて、もう一人魅力的なくノ一に登場してもらうことにしよう。
その名は小弓——私怨のため、松平伊豆守の走狗となり、由比正雪と紀州大納言頼宣の関係を探るべく、己れの身体を賭けて頼宣の傍近く潜入した女忍者である。
早乙女貢には、歴史や権力者によって翻弄される女忍者の姿を描いた大作『甲賀くノ一』や『忍法くノ一』等があり、闇の世界で非情に使い捨てられていく彼女たちの姿が浮き彫りにされているが、小弓の場合、その行動が一途で健気なだけ、よりいっそう哀れさが際立っている。
紀州方と知恵伊豆との虚々実々の駆け引きや、〈ヒダリ〉と呼ばれる隠密の謎を追うストーリー展開もさることながら、首のない裸身をさらすことになったくノ一の姿が鮮烈なイメージを結ぶ一篇である。

「脱走」南條範夫

五味康祐の剣豪小説が作中にちりばめられた政治の非情さにおいて忍者小説ブームへのレールを敷いた様に、南條範夫の一連の残酷ものも、封建治制下において展開された残酷非情な仕

打ちを描くという一点において、忍びの世界を描く忍者ものへの確実な布石となっていたのではあるまいか。
しかし、今回、収録された「脱走」は、そうしたシリアスな問題意識に裏打ちされた諸作とは違ったエンターテインメント精神にあふれた快作である。
人を欺し、たばかるのが忍びの心得なら、さらにそれを上回る仕掛けとからくりを用いて忍びの口を割らせるのが、彼らに対する極意である。大坂城の地下牢を脱走した伊賀者田村源太にはりめぐらされた二重、三重の罠をめぐって、軽快な筆致とスピーディな展開、そして、シヨッキングな結末の三拍子が揃った作品といえよう。

「最後の隠密」小松左京

さて、本書『日本妖忍列伝』の最後は、極めつけの異色作、小松左京の「最後の忍者」の登場である。
明治元年、官軍に追われて道潅堀に飛び込んだ旧幕府御庭番小坂了介老人が、タイム・スリップし、某三文SF作家の自宅の風呂から飛び出した——この最後の隠密の眼には昭和元禄を謳歌する現代はどのようにうつったのか。作者の筆は、この了介老人を狂言廻しに、天保から幕末、明治、そして大正、昭和へと続く歴史の流れを自在に往還し、独自の日本論、日本人論を展開していく。
この作品は、歴史の流れの中での隠密の役割を説明しつつも、むしろ、忍者を狂言廻しにS

F的発想で展開された民族論思想史論的意味合いを持つ秀作として、数ある忍者小説の中でも特筆されるべきものであろう。

巻末に据えられるべき逸品として、味読していただきたいと思う。

さて、多彩に展開された忍びたちの活躍はいかがであったろうか。忍者たちを描くという拘束が、物語の枠を狭めるどころか、かえって、それを逆手にとって様々な可能性を引き出しているものばかりであるといえよう。この一巻を通して、忍者たちが私たちのごく身近な存在であった様な気がしてならないのは、私だけではないだろう。

歴史に名を残すことなく死んでいった忍者たちも、以て瞑すべし、といえようか。

縄田一男

日本妖忍列伝（にほんようにんれつでん）

著　者　早乙女貢（さおとめみつぐ）他
編　者　縄田一男
発行者　塚田友宏
発行所　株式会社 大陸書房

〒113　東京都文京区本郷 2-6-4
電話　03-3814-7441〔営業〕
　　03-3817-0741〔編集〕

印刷・製本　図書印刷(株)

乱丁・落丁のものは小社またはお買求めの書店にてお取替え致します。
定価はカバーに表示してあります。
© KAZUO NAWATA&TAIRIKUSHOBŌ 1992 Printed in Japan
ISBN4-8033-3987-2

時代小説を読む

日本忍者列伝

縄田一男・編

※時代小説の醍醐味にふれる珠玉の名作

〈大陸文庫〉

定価540円

（本体524円）

山田風太郎
南原幹雄
戸部新十郎
柴田錬三郎
大坪砂男
五味康祐
村上元三
野村胡堂

猿飛佐助、風魔小太郎、服部半蔵、いづれ劣らぬ忍者たちは、凄絶な修業の果てに常人には想像もできぬ妖術を身につける。

しかし彼らは、主命を全うし、歴史の表面に現われることもなく闇の中を疾風のように駆け抜けていった……。